
とある麻帆良の超電磁砲（レールガン）

武田軍兵士 清坂 剣麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある麻帆良の超電磁砲^{レールガン}

【Nコード】

N1827T

【作者名】

武田軍兵士 清坂 剣麻

【あらすじ】

第三次世界大戦終結から2ヶ月経った冬休み。突如御坂美琴が学園都市から姿を消した。

そして、彼女は・・・。

科学と魔法が交差する時、物語は展開する。

とあるシリーズとネギまのクロスオーバー作品

プロローグ（前書き）

第三次世界大戦終結から2ヶ月。

科学と魔術の戦いは、とある少年たちの活躍により、最悪の事態は間逃れ、世界は一時の平穏を取り戻した。

激戦地であったロシアで戦った三人の少年たちは、各々の日常へ戻っていった。しかし、その少年たちの活躍を知る者は、一部の者達だけであった。

一つの大きな大戦があった。しかしそれは、魔法世界という所で起きた出来事であったが、・・・その大戦の集結に大きく関わった集団がいた。

・・・その名を『紅き翼』アラルブラ。

彼等は、後に英雄と呼ばれるようになった。

それから時が経ち、紅き翼の一員で実質リーダーだった『千の呪文の男』サウザンドマスターの消息が不明になった。

そして現在、一人の少年が『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』となるため、麻帆良学園の教師となった。

プロローグ

プロローグ

「・・・・・・どこ？」

御坂美琴は今、途方に暮れていた。

何故、彼女がこのような状況になったのかを説明するには、少し時間を戻す必要がある。

数時間前、冬休みということもあり街をふらついていた美琴が見るからに怪しい人物を見かけたからだ。

いかにも言った風貌をしていたからか、美琴はつい声をかけたのだ。

すると、その人物は美琴の顔を見るなり突然逃走したのだ。

何時もの美琴なら、不快に思っても追いかけることはしなかっただろうが、その人物が言ったある言葉が気になったのか、その逃げた人物を追いかけることにしたのだ。そして、逃走者を追いかけている最中、相手が突然変な言葉を口に出した。

すると、美琴の目の前の空間に黒い渦のような物が発生した。

美琴はその渦に飲まれたかと思っただけなのに、いつの間にか知らない道端に立っていた。

そして冒頭に戻る。

「ここって学園都市じゃないわね。・・・はあ、こつこつってアイツが巻き込まれるんじゃないの？」

そう愚痴っている彼女だが、ふと先程まで追いかけていた人物が

言っていた事を思い出していた。

「・・・そういうばさっきの奴。　アイツの事捜してたような・・・？」

「・・・・・・・・（にしても『イマジンプレイカー（幻想殺し）』より先にレールガン（超電磁砲）に出くわすとは・・・」とか言うてたけど・・・。　まさか、例のグレムリンとかいうテロリスト集団の一人だったのかしら？）・・・・・・・・ってあれ！！？」

考え事をしていた美琴が、ある違和感に気がついた。

「たしか今って12月よね！？　何で桜が咲いてるのよ！？」

一瞬、見間違いかと思ったのか、美琴はもう一度周りを見渡した。

「やっぱり咲いてる。　・・・・・・・・いやほんとどうなってるのよ！？」

そう叫んだ美琴だが、突然ある考えか思い浮かんだ。

「こういうのって、マンガとかだと『別世界に来ちゃった』とかそんな感じなんだろうけど、いくら何でもそれは・・・」

そう思っている美琴だが・・・。

「何者だ！　そこで何をしている？」

「えっ？」

そう聞いて美琴が振り返ると、そこにいたのは長い刀を持った少女だった。

「・・・っへ？ってちょっと待って！　なんで刀を普通に持ってるのよ？！」

「それに私、何もしてないし！！」

そう言う美琴だが。

「私の質問に答えてもらう。　事と次第によつては・・・」

そう言つて構える彼女に対し。

「いや、何でそうなるのよ！！」

「（それに、私自身なにも分かつてないのにどうしろって言つてよー！！！！）」

「（今、すっごくあの言葉を叫びたいんだけど、・・・不幸だー！！！！）」

絶賛混乱中の美琴であつた。

これが、学園都市超能力者第3位、『超電磁砲』御坂美琴と桜咲刹那、科学と魔法が会合した時である。

ブログ（後書き）

感想等、お待ちしております。

まだまだ未熟ですので、ヘタかもしれませんがご了承ください。

第一章（前書き）

〽 前回のあらすじ

気がつくと見知らぬ土地にいた御坂美琴。

突然の事に驚く彼女。しかし、そんな彼女の目の前に突如現れた謎の少女。果たして、彼女はいったい何者なのか？

・・・それに関しては本編にてお確かめください。

それでは！

ガ。ダムファイト。レディイイ、ゴオオーーッ！！

美琴「って、最後のいらなくない!？」

第一章

『第一章 会合と話し合い』

美琴SIDE

「もう一度だけ聞く。　ここで何をしていた？」

そう言って刀を構えながらそんなことを聞く謎の危ない人。
いや、何をしていたって言われても……。

「知らないわよ！　つか、ここどこなのよ!？」

そう言って目の前の人に聞いてみるけど……。

「あくまでもしらをきる気か！　ならば……。」

って、全然話し聴いてないし！　それどころか何時の間にか臨戦状態に!？

……もういつそのこと、この人焼こうかしら？

「おっと、おかしい真似はしない方が身のためだぞ」

「……それと、刹那も刀を退け。　これでは話が進まん」

そんな危険な考えを実行しようとする私の思考を余所に、近くの
茂みが揺れ、その中からとても羨ましい体型をした女性が片手に銃

をもつて現れた。

「龍宮！？ しかし！ ……それに何故お前が……？」

「それは僕から言おう」

「高畑先生まで！？」

そう言いながら現れた高畑と呼ばれた中年のオッサン。
てか、私のこと無視して話し進めないでくれない？

「まず、彼女の事だが・・・学園長が会って話したいだそうだ」
「学園長がですか！？ わからました、そう言うことなら」

そう言つて刀を収めた刹那って呼ばれた人だけど・・・何がどうなつてるの？

「そう言う訳なんだが、…………一緒に来てくれないかな？
僕としてもできるだけ穩便に済みたいんだが……」

そう言つてくる高畑という人だけど……。まあ、行く宛でもないし、別に戦い訳でもないからいつか。

「別にいいけど、それよりここつてドコなの？ 学園都市じゃないみたいけど」

そう言つた私だけど・・・、なぜか、後ろの二人が驚いてた。

「それも含めて、これから説明するよ。…………ああ自己紹介がまだだったね、僕の名前はタカミチ・Ｔ・高畑。ここ『麻帆良学園』で教師をしている者だよ」「龍宮真名だ。そして私の横にいるのが桜咲刹那だ」

そう名乗ったタカミチと龍宮て人たちだけど・・・、ここ学園だったの!!!???

美琴SIDE END

先程、美琴がいた地点からそう離れていない場所に、一人の少女が木の枝に座っていた。

「・・・デカイ魔力が発生したと思って来て見れば、あの小娘、どこから現れたんだ？」

「・・・ふ、まあいい。坊や以外にも楽しみが増えたと思えばいいな」

そう少女が言うと、普通の人なら怪我をする位の高さの木から飛び降り、地面に着地した。

・・・この少女（幼女）の名前は、また後ほど。

美琴SIDE

タカミチという先生について来てみると学園長室に着いた。

「少し、待っててくれないかな？」

そう言ってタカミチは部屋には入って行った。・・・なぜか後

ろの人からの視線が痛い。

「さつきから私の事見てるけど何か用なの？」

たしか桜咲さんて言ったわよね？ さつきから視線が痛いんだけど！ なに？ 私何かした！？

「あ。いえ、・・・先程の件についての謝罪をと思いまして・・・」

「え？ そうなの？」

あれ？ じゃあこの痛い視線はいつたい？

美琴がそう思っていると刹那が・・・。

「ですが、貴女が何か仕出かさないように私がこうして見張っているのです」と、そう付け足した。

あゝなるほど。言われてみれば確かにそうよね。

・・・私も似た状況だったら多分そうするだろうし。

「それじゃあ何か話さない？ 待ってるだけってのもなんだし」

そう聞いてみたけど・・・。

「ええ。少しの間なら」

多分断られるわよねってあれえ！？

ど、どうしよう。

ダメ元で聞いてみただけだから話題が浮かばない・・・。

「え〜と・・・そ、そういえばさっきの龍宮って人は？」
とつさに思い浮かんだ私の疑問に対して。

「龍宮なら用事があると言ってどこかに行ったが？」

「そ、そうなんだ・・・」

「・・・あれ？」

会話が終了しちゃったんだけど。

そう思ってたらず屋の中から入っていいよと言われた。

よ、よかった〜。

「え〜と・・・失礼します」

そう言って私は部屋には入った。

そしてそこにいたのは、先程の先生と・・・。

「フオ、フオ、フオ。初めましてかの〜、僕は麻帆良学園で学園長をしておる近衛近右衛門じゃ」

「・・・へ？」

頭が異様に大きいお爺さんがいた。

・・・なんか、笑い方がどつかの宇宙忍者っぽいんだけど。

「あの？ 桜咲さん、誰ですかあの妖怪。・・・ぬらりひょん？」

「初対面の相手にいきなりじゃの！？」

「いえ、あれでも一応人間です」 桜咲さんがそう言ったけど。

・・・世の中いろんな人がいるもんなのね。

「せ、刹那君？ それはフォローになってないからね」
「濃ちよつと傷ついたな」。・・・そういえばお主の名前を聞いておらなんだの？」

あ、そういえば言ってなかった。

「御坂です。 御坂美琴」

そう名乗った私に学園長がふむと言った後に。

「さて、名前も聞いたし本題に入ろうかの？」

「それでは私は席を外させて・・・」

「それなんじゃが・・・刹那君もいてくれんかの？」

「！！？ わ、わかりました」

桜咲さんが退室しようとしたけど、学園長が止めた。

・・・本題ってなんだろう？

そう言えばさっきも学園長が呼んでるって言ってたけど・・・。

「さて本題じやが……君は何処から来たのかの？」

そう言った学園長に対して私はただ、驚くしか出来なかった。

美琴SIDE END

刹那SIDE

「君は何処から来たのかの？」

学園長がそう仰ったことは、私が先程から思っていた疑問と同じだった。

本来麻帆良学園には結界が在り、それによって外からの進入者を発見することができる。

しかし、彼女の場合は違う。

まるで突然何もないところから現れた感じだったからだ。私が考えに没頭しているなか……。

「えーと……。その前に一つ質問していいですか？」
彼女がそんなことを言い出した。

「む、なんじゃ？ 僕の頭以外なら別に聞いてもよいが？」

・・・学園長。それは今言う必要は無いのでは・・・。

「それじゃあ・・・『学園都市』を知っていますか？」

そう聞いた彼女に対し学園長は・・・。

「はて？ 此処以外に学園都市は無いはずじゃが？」

学園長の疑問ももつともだ・・・。

もしかしたら世界中探せば麻帆良以外でも学園都市は在るかもしれない。

だが、一般的には麻帆良学園のことをいつているはずだ。しかし、彼女が着ている制服はこの物ではない・・・。だが麻帆良以外に有名な学園都市なんて・・・。

「はあ。今の反応で確信が持てたわ」

確信？ それは一体どういう・・・。

「正直言つと・・・私はこの世界の人間じゃないわ」

「「「!!??」」」

そう言った彼女だが・・・。

「それはいったいどういう・・・。」

「刹那君」

何時の間にか彼女に詰め寄っていた私を高畑先生が鎮める。

「俄かに信じがたいのお」

「ま、そりゃそうよね」

学園長の言ったことに彼女は肯定する。

「だけど、事実そうだし。現に、私の知ってる学園都市がない
ってことが証拠になってるんだし」

他に言いようがないのよね。と彼女は言っているが、それでも信じられない。

「む、ならば僕らにも分かる証拠を見せてくれんかのお」

学園長のそんな言葉に彼女は・・・。

刹那SIDE END

美琴SIDE

証拠ついていわれても・・・、そういったのになりそうな物は、多
分あっち（元の世界）だろうし、他に証拠になりそうなものっていえ
ば・・・やっぱ、これしかないかな？

「今出せる証拠は、これだけなんだけど・・・」

そう言っ指先に軽く電気を纏わせてみたけど、これって証拠に
なるわよね？

「……って、あ、あれ？　何か予想以上に驚いてんだけど！？」

「なっ！？　突然電気が！？」

「高畑君」

「はい。魔力より気に近い感じはしましたが、おそらく別物かと……」

「むう。今の力について、説明してくれんかの？」

そう言っ て学園長は美琴に聞くと、彼女は自身の超能力や学園都市のこと、これまで自分が知っている範囲の一部の出来事とどういった経緯で今の現状になったかを話した。

「信じられない」

「けど、それなら確かに辻褄が合う」

「なるほどのお、では、今度はこちらのことを話さねばの」

そう言っ て今度は学園長がこの世界についてのことを美琴に話した。

「魔法っ て、そんなの非科学的なのがあるわけ……（ってあれ？　何か似たようなものに遭遇してたような……？）」

「けど、現に存在している。君がここにいるようにね」

そう言っ タカミチに美琴は何も言えなかった。

少しの沈黙が起きる中、突然学園長が……、

「それでは今後の事についてじゃが、……まず美琴君については、中等部の3-Aに転校生として入ってもらおうかの？」

そんなことを言っただけ、って、うえええええ!!!??

美琴SIDE END

「なつ、学園長!？」

「いや、何がどうしてそうなったのよー!？」

「僕としてもその方がいいと思うな」

未だに混乱している二人を余所にタカミチはそう言つと、

「それに、昼間から学生がふらつくのもまずいと思っしね」 そ
う付け足した。

「ああ。要するに私を監視したいという事ね？」

「フオ、フオ。 そう思ってもかまわん」

状況からそう判断した美琴に対し学園長はそう言った。

「そうわ言つても私まだ中二何ですけど・・・」

「なに、そこまで離れておらぬし、お主から聞いた限りでは勉強
に関してはさほど苦労しないじやろっしの」

そう言つてフオフオフオと笑う学園長に対し、

「そうですけど・・・」

未だに渋る美琴に対し、

「儂としては目の届くところにいてほしいんじゃが？」

「それに、3月とはいえ外は冷えるしの」

学園長がそんなことを言った。

最後のは脅迫な気がするんだけど……。

そう思っていた美琴だが、実は学園長を除くこの場にいる全員が思ったことであつた。

・・・けどまあ、野宿するのもなんだし、戻るにしてもバックアップとかがあればいいか。

「分かったけど、これだけは約束してくれない？」

「む？ 何じゃね？」

そう聞いた学園長に美琴は、

「私が元の所に帰るのを手伝うこと。・・・これが条件よ」

この条件に学園長はうむと言った後、

「よかるう。それくらいならやってもかまわん」

そう答えた。

「それじゃあ……しばらくお世話になります」

そう言つて頭を下げる美琴。これによつてこの会談は終了した。

それから数分後、学園長との話し合いにより刹那の部屋に泊まることになった美琴は現在、刹那と部屋にいた。

「それじゃあ、しばらくお世話になるわね」

そう言う美琴に、

「いえ。こちらこそ」

刹那は頭を下げたそう答えた。

「……ところで桜咲さん。私が言うのもなんだけど、本当によかったの？」

「（正直、怪しすぎる筈なのに？）」

美琴がここにくる間から思っていたことを刹那に聞いてみると、

「……たしかに私自身、貴女が言っている事全てを信じたわけではありません」

刹那がそう言った後にですが、と付け加えた。

「貴女が嘘を言っているようには見えませんでした」

「ですから。警戒こそしますが、友好的でいたいとも思っているんです」

刹那の言葉に一瞬、啞然とする美琴だったが、

「そっか。それじゃあこれからよろしくね、桜咲さん」

「はい。こちらこそ」

そう言ってお互いに握手を交わした。これから先に美琴も関わって行くのだが、現時点では誰もそのことを知らない。

第一章（後書き）

皆様、どうもお久しぶりです。

武田軍兵士 清坂剣麻です。

御坂妹「本編の登場予定のないミサカー〇〇三二号です。と、ミサカは答えます」

やっと出来ましたので、投稿させていただきます。

「なにやってんだよつとミサカは作者にそんなことを言います」
「プロローグから間空きすぎだろつとミサカはさらに追い打ちをかけます」

御坂妹から手痛い言葉を言われましたが、次からは出来るだけ早く投稿出来るようにしたいと思っています。

それと、後書きのほうで御坂以外のとあるシリーズのキャラを出したいと思っています。

最後に感想、質問アドバイスなどをお待ちしています。

「それではまた次回つとミサカは作者の台詞を奪います」

台詞とられた!!？

第二章（前書き）

（前回のあらすじ・・・）

御坂美琴が跳ばされた所はなんと、麻帆良学園と呼ばれる彼女が知らない土地でした。

それもそのはず、なぜならそこは異世界だったからです。

いえ、この場合は平行世界と行った方が正しいのでしょうか。

彼女はこの世界で何を使用とするのでしょうか？

・・・それは本編での楽しみ。

それでは！

『とある麻帆良の超電磁砲』！！

信玄「いざ、出陣じゃあ！！」

美琴「って、この人誰！？」

第二章

『第2章 少し早い春休み』

御坂美琴が麻帆良学園に現れてから3日経った。

麻帆良学園は現在春休みの真っ只中にあった。

そんな中、御坂美琴はというと・・・、

「はあー、たまにはこうして部屋で寝ところがるのもわるくないわね〜」

現在、居候をしている刹那と龍宮真名の部屋でのんびりしていた。そして、話しはそれから数分後、刹那が言ったことから始まる。

美琴S I D O

「学園を見回る？」

私が桜咲さんが言った事にそう聞き返した。

「はい。貴女もここの生徒になるんですから、土地とかに慣れていた方がいいでしょう」

まあ、それもそうよね。

刹那の言ったことに納得した美琴は、

「わかったけど、龍宮さんはどうするの？」

そう言つて美琴は、現在この場にいないもう一人の同居人の事を刹那に聞く。

「龍宮なら、神社の方が忙しいから来ないそうだし、あゝなるほど。」

．．．．それにしても、龍宮さんって私と同じ中学生よね？
あの外見だから最初はわからなかったわ。　．．．後胸とかも。

そう言っで自分の胸を見た美琴は、

．．．．だ、大丈夫！私もまだ成長するはずだから！！　．．．
．．．たぶん。

う、羨ましくないんだから！！

そんなことを思っている美琴だった。

「それでは私が案内しますので、行きましょうか。　．．．．

御坂さん聞いてましたか？」

「うえっ！？　あ、うん聞いてる聞いている！」

考え事してたから殆ど頭に入ってないけど．．．。

「そ、それじゃあ行きましようか」

「．．．．．そうですね」

一瞬間が開いたが刹那もそう答えた。

そんな会話から数分後、美琴達は道端を歩いていた。

「それで、どこから回るの？」

「一樣、校舎と学生寮は見てるけど、私もまだ全部は見えてないのよね。」

「はい、まずは全体が見渡せる展望台のほうへ移行かと」　なるほどね、確かにそこなら見渡せるもんね。

それから二人は、少し自分たちの世界について話していると展望台へと着いた。

「うわあ~~~~っ。　すごい」

「右手の方に見えるのが私たちが住んでいる寮があつて、ここから向こう側までが大学施設や研究所が」

「あそこに見えるのが私たちや御坂さんが通う事になる中部部や高等部の校舎が」

「あそこのヨーロッパの街並みに似ているのが商店街で遠くに見えるのが図書館島」

「そして、あそこの大きい木が世界樹と呼ばれる大木です」

そういつて目の前の景色を見渡している私に、桜咲さんが建物などを説明してくれた。

「ここってこうなってたんだ」

「はい。ここは一樣麻帆良学園全体が見下ろせるんです。

御坂さんの所は違うんですか？」

「ううん。私の方も見渡せるけど、ここまでじゃないから」

「街並みもだいたいは都会と一緒だしね。違う所なんか人口の八割が学生で能力開発してたり、いろんな科学技術を研究してる事と、後は道端のゴミを回収したりする警備ロボとかがあるくらいなのよね」

「な、なるほど（それだけでも充分なのは・・・）」

美琴の言ったことに苦笑いしながらそう答える刹那。

「・・・では、次の場所に行きましょうか？」

「そうね。・・・それで、次はどこに行くの？」

「そうですね。では、図書館島に行きましょう」

「へ？ し、島？ 図書館よね？」

さつきも聞いたけど、普通、図書館に島はつかないわよね？

それから数分後、現在二人は図書館島まで来ていた。

・・・ちなみに先程の美琴の疑問は、実物を見て晴れたが同時にすごく驚いていた。

「それにしても大きいわねここ。一体何冊あるのよ？」

「ええ。この図書館島は明治の中頃、学園創立とともに建設され、二度の大戦中、世界各地の貴重書が戦時中に喪失するのを防ぐためにここに集められたんです」

図書館島創立の事を説明する刹那。

「へええー。・・・ん？ ってことはここって泥棒が入ったら

まずくない!？」

「はい。ですが心配する必要はありません。なぜなら……
っは!？」

「うええ、ちよっ!？」

何か説明しようとした刹那が突然美琴ごと本棚の後ろに隠れた。
すると、向かいから話し声が四つほど聞こえてきた。

図書館内ではあるからそれほど大きい声ではなかったが……。

「だからさ、のどかは顔を見せた方がかわいいんだからそうしなよ」

「うえっ、でもはずかしいし」

のどかと呼ばれた少女はそう言っただけ顔を赤くする。

「もったいないな」のどかわええのに」

関西弁で話す少女がそう言った。

「そうですよ。それにそんな事ではネギ先生を誰かにとられま
すよ」

さらに、四人の中で一番背が低い少女もそんなことを言う。

「あうっ。そ、そんなじゃないってば」

そう言っただけより顔を赤くするのどかと呼ばれた少女。

四人はそう言った会話をしながら通り過ぎていった。

「……………」

「ムガ、ムガ(何で私まで?)」

それを本棚の後ろから見ていた刹那は、彼女たちが見えなくなっ
てから美琴の口から手を離れた。

「……………」

「いや、ふう。じゃないわよ!？」人の口いきなり塞いで!」

一樣、周りに迷惑にならないように注意を払いつつ、私は桜咲さ
んにさっきの行動について聞いた。だした。

「はっ!？ す、すみません。 ついいつもの癖で……………」

「癖って……………」

そう言っただけとしていた私は、

「と、とりあえず次の場所に行きましょう」

「え？　ちょ、桜咲さん！？」

桜咲さんに手を引つ張られながら図書館島を後にした。

・・・そういえば、桜咲さんのあの反応。

もしかして、さっきの人たちの中に桜咲さんの言ってるお嬢様がいたのかな？

それから数時間経ち、主なところを見終わった美琴と刹那は現在、裏山にある世界樹にいた。

「この木って確かさっきから見えてる木よね？」

「はい。　この樹は学園が創立される前から立っていたらしく、私達はこの大木を世界樹と呼んでます」

桜咲さんが説明してくれてるけど、私は図書館島の一件の事であまり聞いていなかった。

「・・・かさん。　・・・坂さん、御坂さん」

「え？　あ、ごめん。　なに？」

「・・・やはり気になりますか？　私がお嬢様と呼びしている人のことが」

ぐう。　見事に確信を付かれたから隠しようがないわね・・・。

「やっぱり、図書館の時のあの四人の内の誰かなの？」

「はい」

そう肯定する桜咲さん。

一樣、私もそのことは聞いてただけど・・・。

「あの中に桜咲さんの言ってるこのかって人がいたのよね？」

「はい、そうです」

「それでその人、学園長の孫なのよね？」

「そうなります」

全然似てないんだけど・・・。

そんな事を考えている美琴だったが、同時刻、学園長がくしゃみをしたのは知る由もなかった。

「・・・では、戻りましょうか？」

「そうね・・・」

前に、桜咲さんがそのお嬢様を守る理由を聞いたし、すごく大事な人って事もよくわかったけど。

・・・だけど、こんな守り方でホントにいいのかしら・・・？

けどま、他人のことをどうこう言えるほど私もできた人間じゃないしね。

・・・まあアイツなら、そう言った事関係無しに聞いてくるんだろうけど・・・。

そう思った私は、この事に関してはあまり探索しない事にした。

その後、美琴と刹那は寮に戻っていった。

・・・余談だが、美琴がアイツと言ったとある不幸な少年は、まとも厄介事と共にフラグを建て、居候の暴食シスターに頭を噛み付かれていた。（笑）

その夜、刹那と龍宮の部屋にて・・・。

「なるほどな。私がない間に、そういった事になっていたとはな」

そう言いながら銃の手入れをしている龍宮さん。

ホント、いつ見ても中学生とは思えない身体つきしてるな。この人。

見てるとこっちが虚しくなってくるんだけど。

「ふむ。さて、では私は少し出てくる」

「あれ？ 龍宮さん、こんな時間にどこに行くの？」

そう言っただけは、龍宮さんにそう聞いてみた。

「なに、ちょっとした仕事だ」

「すまない龍宮。今回は行けそうにない」

「・・・そのようだな。なに、安心しろ。今回は私だけで充分だ」

そう言っただけで部屋を出ようとする龍宮さんが・・・、

「ああ、そういえば、あの世界樹にはある伝説があつてな。・

・なんでも片思いの人にそこで告白すると願いが叶うらしい」

と言っただけで落としていった。

普段の美琴ならそう言っただけは信じないのだが、今の現状と、ある少年の事を思い出したからなのか、

「なっ！？ どう言っただけ桜咲さん！ 私聞いてにやい。てか、マジでっ！！」

て、て事は、アイツをあによ世界樹の場所に連れて行けばもしかしたら・・・、ってなに考えてるのよ私！？

あ、アイツはそ、そんなにやんじゃ・・・。

ものの見事に暴走し、刹那の肩を激しく揺らしている。

「お、落ち着いてください御坂さん！ な、なんか電気みたいな物が漏れ出して・・・」

だが刹那は、それ以上言えなかった。

「ふにやあーーーーっ！！！！？」

ビリビリビリッ！

「はぎやああーーーーッッ！！！？」

漏電した美琴の電撃を直接浴びた刹那は、そんな悲鳴をあげた。

数分後……。

仕事から戻った龍宮は、黒焦げになっている同僚と、気絶している美琴を交互に見てから、

「……………これは、いったいなにが起きたんだ？」

「み……………御坂さ……………んが……………漏……………で……………ん……………した……………」

「ガクッ

龍宮は目の前の状況に対してそう言うしかなく、刹那はそう答え、気絶した。

美琴 S I D O O U T

???? S I D O

夜の麻帆良学園中等部女子寮の屋根に立っている少女がいた。

先程まで何かを見ていた彼女は今、何か考え事をしていたが、後ろに誰かが来たので考えるのを一時中断した。

「マスター。先程までなにをお考えになられていたのですか」

「茶々丸か。いやなに、あの時現れた小娘の事についてな」

茶々丸と呼ばれた少女からの質問に対し、そう返すマスターと呼ばれた少女。

「そうですか。それで結果は」

「ふ。奴自身から何等かの力を感じたがそれだけだ。なに、

私の邪魔をするなら叩き潰すだけさ」

「フフフ。フハハハ、アーハハハっはうう!？」

ゴチン!!

高笑いする彼女だったが、足を滑らせて顔面から屋根に頭をぶつけた。

「大丈夫ですかマスター」

「クウウウウー!。おのれ、この程度のこと……………それもこれも全ては……………」

「だが、奴の息子の血を吸い尽くす事ができたその時こそ！
『闇の福音』と恐れられたエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
の完全復活となるのだ！！」

「フハハハ、アーハハハハッ！」

「マスター、鼻血出てます」

再び高笑いをすりエヴァンジェリンと名乗った幼女に対し、茶々丸と呼ばれた少女（？）がツツコミをいれた。

第二章（後書き）

皆様、私の作品を見ていただき、まことにありがとうございます。
御坂妹「と言つてもまだこの話を入れてもまだ2話でしょうっとミサカは気が早い作者にツッコみます」

相変わらず手厳しいですな、御坂妹殿。 と言っわけでありまして私は出来るだけ一週間の間に投稿していく所存であります。

御坂妹「なお、作者がそれを失敗したら、ミサカが電撃を浴びせま
すっとミサカは作者に脅しをかけます」

・・・まじで？

御坂妹「マジですつとミサカは肯定します」

御坂妹「ところで、今回の前書きに出てきたあの人は誰ですかつと
ミサカはお姉様と同じ疑問^{オリジナル}を作者に問います」

あのお方こそ、我ら武田軍が総大将、お館様事、『戦神霸王 武
田信玄』であらせられる。

御坂妹「おーつとミサカは適当に流しつつ一応驚きます」

いや、流すんかい！！

とまあ、さておき、次回からは御坂妹と、とあるシリーズのキャラクターで後書きをやっていきます。

そして、感想、質問、アドバイスとうお待ちしております。

御坂妹「それではまた次回つとミサカは前回に続きミサカの手によ
つて幕を下ろします」

第三章（前書き）

「前回のあらすじ・・・」 御坂美琴が麻帆良学園に来てから3日経った。

彼女は桜咲刹那に麻帆良学園を案内してもらったことになった。

だが、その案内の中、彼女は刹那と秘密の一端を知ることとなった。

・・・そして今回、彼女は遂に原作主人公との会合をはたすのです。

・・・では、この続きは本編にて。

刹那「私がガ。ダムだ!!」

美琴「桜咲さん！ それ桜咲さんの台詞じゃないから!!」

セ。エイの方だから!!」

第三章

『第三章　ようこそ！　　　　3－Aへ！？　　　　そして、ある噂』

美琴SIDO

私がこつちに来てから数週間が経ち、季節は3月から4月になった。

さすがにそれだけ経つと少しこつちの生活に慣れてきた。・・・

・まあ、学園都市にいた時とあんまし変わんなかったけど・・・
それでもって今私は学園長室にいた。

「フオフオフオ。　よく似合っておるの」

「そりやどうも」

そう答えた美琴が着ているのはいつもの常盤台の制服ではなく、麻帆良学園女子中等部の制服だった。

「ん、なんじゃ？　何か不満でもあるのかね？」

そう聞いてくる学園長だけど、まあ不満というより、

「あっちの方の中学に上がった時から休日の時もほとんど制服で
すごしてたせいか、なんか違和感が・・・」

「フオフオフオ。　そう言うことかね、まあ直慣れるじやろ」

学園長がフオフオフオっと笑うのに対し、美琴は苦笑いするしかなかった。

「さて、そろそろお主が入るクラスの先生が来る頃じゃな」　学

園長がそう言うと、ドアからコン、コンっと叩く音が鳴ってから、

「失礼します」

そう言っに入って来たのは、見た目が10歳の少年であった。

「へ？　こ、子供？」

「紹介しよう。　お主が転入する3－Aの担任であるネギ先生

じゃ」「はじめまして。 今年から正式に英語教師になりましたネギ・スプリングフィールドです」

「は、はい。 こちらこそ」

私も釣られて挨拶したけど、目の前の子が先生ってことに対し未だに思考が追いつかないでいる。 つか、労働基準法は？

ま、まあもしかしたら見た目は子供だけど実は大人かもしれない。 実際、前例を見てるしね

美琴がそう思っているとどこからか『そ、そんな事ないですよ。

先生は立派な大人なんですよ！?』という声が聞こえたが空耳だろう。

. . . . ちなみに、美琴がそう思っている人物は、某不幸少年のクラスの担任で、どう見ても大人には見えない子供先生こと月詠小萌先生のことである。

『ひ、ひどいです』

. . . . 今のも空耳だろう。

「ではネギ君。 案内してくれんかの?」

「はい。 では、こちらです」

そう言われて私はネギ先生に付いていきながら、学園長室を後にした。

教室に向かう途中で聞いてみたら、年齢は今年で10歳らしいけど、ほんとに大丈夫なのかしら? 主に法律とか

そう思ってたら、何時の間にか教室の前にいた。

「じゃあ、少し待っててください」

そう言って教室に入って行ったネギ先生。

そして暫くすると教室から、

「『3年！』」

「『A組！』」

『ネギ先生ーっ（？）』

と言う声が聞こえてきたけど・・・どこか。八先生？

そう思っていると、ネギ先生が自己紹介している。

そして自己紹介が終わると・・・。

「それと、今日から皆さんと勉強する人を紹介します」

ネギ先生がそう言うってから少しの間が空いたと思ったら、スゴイ音量が老化まで響いてきた。

「それじゃあ、入ってきてください」

呼ばれたわね、・・・よし！それじゃあ行きますか！

そう思った私は、これから自分が勉強するであろうクラスに入って行った。

美琴SIDO OUT

刹那SIDO

ネギ先生が転校生の事について話していたが、私は彼女のことを知っているので別段驚く事はなかった。

それ以前に、今は私たちと同室でもあるからな。

私がそう思っている間に彼女が入ってきて、自己紹介を始めた。

「今日から一緒に勉強することになった御坂美琴です。よろし

くお願いします」

一応お嬢様学校に通っていただけあつて挨拶は礼儀正しい美琴。その挨拶を聞いた3ーAの面々はと言うと・・・、

・・・ワアアアアアアツツ！！

一旦は静まり返ったクラスだったが、すぐに騒ぎ出した。

その内の何人かは美琴に近付き、質問をしだした。「どこから来たの？」

「前の学校はどういった所だったの？」

「好きな人とかいる？」

「もしかして、一目惚れでネギ君？」

「な、なんですつてえええつ！！？」

やはり、何時も道理の3ーAであつたが、その中に本来まとめ役の委員会こと出席番号29番雪広あやかもいたので収集がつかない。

「え、いや、あの」

あまりの質問責めとその勢いで御坂さんがうろたえている中、委員会が御坂さんの両肩を持つと同時に揺らし始めた。

「どう言つことか私に説明してくださいませんか！？ ネギ先生の一体ドコを好きになられたかを！ ですがネギ先生を一番に愛しているのはこの私です！？」

「ええうえ？ な、なに？ なんか話が飛びすぎてよくわかんないつてか揺らさないでえ~~~~！！？」

御坂さんを委員会が首がモゲそうなくらいの凄い勢いで揺らしている。

あやかがさらに暴走する前に止める者が現れた。

「はいはい。 委員会ストップ、ストップ、他の皆もね。 転校

生が困ってるよ。・・・ここはこの朝倉和美が仕切らせてもらうよ」

そういつて委員長とこの場を静めたのは出席番号3番の朝倉さんだ。

あの人は魔法や裏のことには直接関わっていないが、報道部でも麻帆良パパラッチと言った異名を持つほどだ。

そのうち魔法の事とかがバレるかもしれないな。

そう思っている刹那だが、近い将来現実の物になるのだから、それはまた後ほど。

「た、助かった」

「さてそれじゃあ、御坂さんだっけ？ 私の質問に答えてくんないかな？」

「え？ え、ええ」

「そんじゃまず一つ「って、一回じゃないの！？」だれも一回だなんて言っていないよ。では、改めて、どこから来たの？」

たしかに言っていないかったな。

「え、えーと。東京の辺りからかな？（実際は3県跨ってるけど）」

「ん」。それだけじゃねー・・・まいつか。それじゃあ二つ目。ズバリ御坂さんの好きな人は誰か？」

「どううええ！！？ い、いないわよ！ そんな人！」 朝倉さんの質問にそう返した御坂さんだっただけその返し方だと、

「あやしいな、そんなに勢いよく否定する辺りが特に」 そう言った朝倉さんの言葉に、

「あ、あははは。な、何の事かしら？」

そう言つて目をそらす美琴だが、朝倉以外にも興味津々といった感じに他の生徒も美琴を見ており、教室に緊迫した空気が漂う。

そんな中ネギはのほほんと、クラスを見ていたが、何かを感じたのか急に出席簿を見だした。

そんな時、教室の扉から生活指導員であるしずな先生が現れて、ネギ先生にある報告をした。

「ネギ先生。今日は身体測定ですよ。３－Ａのみんなもすぐ準備してくださいね」

そう言うしずな先生の言葉に慌てたのか、ネギ先生がセクハラ紛いの発言をした後、自分の言ったことに気付いたのか急いで教室から退室した。

よく見ると、その影で御坂さんがホツとしていた。どうやら、朝倉さんの質問から逃れたようだ。

・・・さて、私も身体測定の準備をせねばな。

刹那S I D O O U T

美琴S I D O

ああ、助かった。あのままだったらホントヤバかった。

でも、転入早々に身体測定って、運が良いのか、悪いのか・・・。そう呟きながら下着姿になった美琴に、

「うわー。美琴って意外と子供趣味？」

「お、お姉ちゃん。いきなりそれは・・・」

と言いながら来たのは見た目はどう見ても中学生に見えなく、会話から姉妹であろう二人。

「よ、余計なお世話よ。・・・ところで、あんた達は？」

まさかいきなり呼び捨てされるとは思わなかったなー、別にいいけど。

「良くぞ聞いてくれました。ボクが鳴滝風香で」

「私が鳴滝史伽です」

「へえー、姉妹なんだ」

「そうだよ。ボクがお姉ちゃんなんだよ」

「ふーん」

それにしても、同じ中学生に見えないわね、この姉妹。そう思いつつ周りを見てみると、

ドーン！ 出席番号14番早乙女ハルナ

バーン！ 出席番号2番明石優奈

バイーン！ 出席番号20番長瀬楓

ズドーン！ 龍宮真名（知り合い）

ドゴーン！！ 出席番号21番那波千鶴

「……なにこのクラス？ 龍宮さんもだけど、なんか中学生とは思えない人たちが多すぎる気がするんだけど、……主に胸とか、胸とか、胸とかが。」

「あは、あははははははh、orz」

「ええ、ちょ。いきなりどうしたのよ!？」

あまりのシヨックに思わずorzの体制をしている美琴と、いきなりの行動に驚いている出席番号8番の神楽坂明日菜であった。

「ありありあ、なんか転校生シヨック受けちゃってるけど?」

「まあ、気持ちはわからなくもないですが」

「まあねえって、あれー? 今日まきちゃんは?」

「さあ……」

原因の一人でもあるから早乙女ハルナがそう言った通り、後一人出席番号16番佐々木まき絵がいるのだが、現在姿が見えない。

「まき絵は今日、身体測定アルからズル休みしたと違うか?」

「まき絵って胸ペタンコだからねー」

そう言って手を腰に当てている風香だが、人の事は言えない。

「お姉ちゃん……言ってて悲しくないですか? ブラもしてないですね……」

そうツツコム史伽であった。

そんな中、身体測定の方は、委員長の番だったが、出席番号17

番の椎名桜子が体重計をいじっていた。

……ちなみにネギは廊下で待っていた。

そんな中、未だにシヨックから立ち直っていない美琴だったが、
『……血まみれの吸血鬼が……』

「うう、ん？ あれ、何の話してるんだろ？」

そう言ってやっと立ち直った私は、話の内容を聞きに行った。

「ねえ、何の話してるの？ 吸血鬼がどうとか言ってたけど」

「え？ ああ、今ある噂が流れててね……」

その後、噂の『桜通りの吸血鬼』の事を聞いた私だけど……、
「いや、それってデマじゃないの？」

「そうよ。んなこと言っただけで早く並びなさいよ」

科学の都市に住んでいただけあって、美琴はその話を信じていなかった。

そんな美琴に、明日菜も賛同する。

「そんなこと言っちゃって2人ともちよつと怖いんでしょ」

「違うわよ！！」

「そうよ！ だいたいあんなの日本にいるわけないでしょ！」

そう言っただけで明日菜が指差した所では、このかが吸血鬼？ どちらかと言えば吸血生物の説明をしていた。そして、このかの説明に震えている鳴滝姉妹と出席番号27番宮崎のどかがいた。

いや、待つて。ここは別世界だし、そう言うのがいてもおかしくないかも……魔法とかもあるし。……それに元の世界（あっちの方）でも似たような出来事に遭遇してたような……？

とそんなことを考える私。ふと顔を上げると、神楽坂さんもなんか考えていた。

「そのとおりだな神楽坂明日菜に、御坂美琴と言ったか？」

そして、そんな考えをしていると誰かに話し掛けられた。

「「え？」」

話し掛けられた方を見ると金髪の少女（？）がいた。さっきの鳴滝姉妹も似たようなもんだったけど。

「おい貴様。今私を見て少女とか思っただろ」

「うえっ！？ い、いえ、別に・・・」

か、勘が鋭い。

「と、ところであなたの名前は？」 「さりげなくはぐらかしたな・・・、まあいい、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」
「マクダウエルさんね。・・・ところで、さっきの話しただと」

「ふ。そうだったな、その噂の吸血鬼は元気でイキのいい女が好みらしい」

「そう、お前たちみたいのな。だから、気おつけていた方がいいぞ？」

そうほくそ笑んだマクダウエルさんだった。

・・・え？ ホントにいるの？ 吸血鬼・・・。

その後、先程話しに出ていた佐々木まき絵が桜通りで寝ているのが発見され、保健室に運ばれていた。・・・だが、この一件はこれから起こる出来事のまだ序章にすぎなかった。

第三章（後書き）

感想、指摘、質問とう、お待ちしております。

御坂妹「後書き短かつとミサカは作者にツツコミを入れます」

第四章（前書き）

「前回のあらすじ・・・」

さて皆さん。 お久しぶりです。

御坂美琴が麻帆良学園に跳ばされてから数ヶ月の月日が流れ、新学期が始まり、彼女の新生活が始まりました。

そんな中、今麻帆良学園にはある噂が流れているのです。

なんと、桜通りに吸血鬼が現れると言う噂が、これは果たして真実なのでしょうか？ それでも、本当にタダの噂なのでしょうか？ 真相は本編でお楽しみ下さい。

それではああ、マギステルファイト！！

ド○ン「レディイイイイゴオオオツツ！！」

美琴「いや、何であんたが言うのよ！！ つか本人だし！？」

ド○ン「ばあああくうねえっ！！ ゴオオオオツ。オ・。インガ
アアアアアツ！！」

美琴「いや、やんなくていいから！？」

第四章

『第四章　桜通りの吸血鬼』

美琴SIDE

朝の一件から数時間後、現在美琴は夜の道を歩いていた。

「はあ・・・まさかいきなり身体測定をやるとは思わなかったな
、まあでも・・・クラスの人達とは仲良く出来そうだからそこら
辺の心配はいらないわね」

・・・それにしても桜咲さんも龍宮さんも何の仕事してるんだ
ろ？

確か外からの侵入者対策として夜に見回りをしてるとは聞いている
けど。

・・・いつそのこと私も手伝おうかな？

私はそう思うと、とある可能性にいたった。

「・・・そうなると、今朝話題になつてた吸血鬼の正体つてもし
かしたら外部からの侵入者の可能性も・・・」

もしそうなら、ほっとくわけには行かないわね。

美琴もとある不幸少年程ではないが、厄介事に首を突っ込んでい
く性質がある所を見ると、意外とそう言った所は似ているのもし
れない。

・・・度の過ぎた野次馬根性とも言えるが。

私がそんな事を思いながら歩いていると、当初の目的地であり、
朝の話題になつた桜通りに着いた。

「さてつと、着いたことだしこれからどうs「あ・・・、桜通り・
・・・へ？」

あれ？ 今の声って・・・。

「「あつー！」」

そう思った美琴は横を見ると、同じクラスメイトである宮崎のどかがいた。

「え、えつと・・・御坂・・・さん・・・ですよ？」 「え、

ええ。 あなたは、確か・・・宮崎のどかさんだったかしら？」

おつかしいな、ここまで近づかれると気づくはずなのに？ 考え事に夢中になってたかしら？

「はい。・・・あの、御坂さんはどうしてここに？」

「ちょ、ちよつと野暮用があつてね。 宮崎さんは帰りの途中かしら？」

実は、噂の吸血鬼を確かめようとしてたなんて言えない。

「・・・宮崎さん怖がつてたしね。」

「は、はい。 あ・・・あの・・・その・・・え」と。

よ、よかつたらいい、一緒に帰りませんか？」

おどおどしながらそう言った宮崎さん。

「・・・まあ、宮崎さんだけだと心配だし、特にこれつといった準備とかもしないからいいか。

「別に良いけど、私も用事があるから途中までだけど良い？」

「は、はい。 ありがとうございます」

そう言つて頭を下げる宮崎さんだけど・・・この人つてな、んか守つてあげたいって気持ちになるんだけど・・・なんでかしら？

そう思いながら、のどかと共に桜通りを通る美琴だったが・・・。

突如、自身が放出している電磁波が何かに反応した。

「・・・ッー！」

すると今度は、ザザア！といった音が聞こえ私と宮崎さんは上を

向いてみると・・・、

そこにいたのは、黒い帽子をかぶり、同じ黒いマントを着た誰かが、電灯の上に立っていた。

「なっ!？」

「ひ・・・!」

いきなり電灯に人が立っている事に、私は一瞬驚き、宮崎さんは恐怖からか、小さく悲鳴をあげていた。

まさか黒子と同じ『テレポーター空間移動能力者』!？

そう考えた美琴だったが、即座に否定する。

なぜなら、ここは美琴が知る学園都市ではなく、さらには超能力の開発もしていないからだ。

て、ことは・・・学園長や桜咲さんが言ってた魔法使いつてことかしら？

そう美琴が考えているとその謎の人物が・・・、

「27番、宮崎のどか・・・それに御坂美琴か・・・」

「悪いけど少しだけ、その血を分けてもらっよ・・・」

そう言うやバサアツとマントを棚引かせながらのどかへと向かっていく。

「キャアアアアアッ!!」

「させるかあっ!」

バチイバチイツツ!!

あのままだと宮崎さんが危ないと思った私は雷撃の槍を放った。
「ッ!!」

バリバリッ! パリン! パリン!

美琴が放った電撃は避けられ電灯に当たり、電球が破裂した。

「あんまり見せるなって言われてるけど、この場合は仕方ないわよね？　……宮崎さん、ここは私に任せて早く逃げ……て？」

とりあえず、私がアイツと戦ってる間に宮崎さんを逃がそうとするが、肝心の宮崎さんから返事がないから確認すると……。

「う~~~~ん」

あまりの恐怖に気絶している宮崎さんがいた。

「ええっ！？　いや、ちよつと！　何で気絶してるのよ！！？」

これじゃあ、逃がそうにも逃がせないじゃない！

「ふふ。なるほど、私と戦っている間に宮崎のどこを逃がそうと言っ魂胆だったんだろうが、この私を相手にそう上手く行くかな？」

「ふん。どこの誰か知らないけど随分な自信じゃない」　まあ、結局宮崎さん逃がせてないけどね。

「ふ、事実を言っただけだ」

「へえ、言ってくれるじゃない？　だったら、その事実を見せてみなさいよ！！」

そう言っ私は再び雷撃の槍を放った。

バチイ！　バチイ！　バチイ！

「ッ！！　チイ、氷楯……」
レフレクシオー

避けられないと判断したのか吸血鬼らしき人が何かを呟き、瓶とフラスコを放り投げた。

バキキキイインッ！！

そんな音と共に私の攻撃が何かに防がれた。

「防がれた！　だつたら・・・」

多分、今防いだのが桜咲さんたちが言つてた魔法なんだと思うけど・・・それを出す前に叩けば！！

そう思いながら次の手を講じようとする美琴だが。

「くっ・・・。驚いたな、跳ね返すつもりが防御で手一杯だつたぞ」

「それだけじゃない、私に傷をつけるだけの威力を出しておきながら息切れを一切していないとは」

「・・・そしてその反応から魔法の事を既に知つてるとみた」

そして、今の衝撃で相手が被つていた帽子が飛ばされその素顔が露わになった。

「なっ！？」

私は相手の顔を見ると、一瞬動きを止めてしまった。　なぜなら・

・・・

「あなたは、マクダウエルさん！？　それじゃあ吸血鬼の正体って！？」

「ふふ、では改めて自己紹介と歓迎の挨拶をしようか御坂美琴」

「私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、真祖の吸血鬼にして、最強の闇の魔法使いだ！」

目の前にいたのが、同じクラスのマクダウエルさんだったからだ。

美琴 SIDE OUT

桜通りの吸血鬼の正体が同じクラスのエヴァンジェリンだと知つた美琴は少なからず動揺していた。　そんな美琴に対しエヴァは・・・、

「・・・（ふふふ。　私の正体を知つて動揺しているようだな？）さあ、どうする？　御坂美琴！　まさかクラスメイトとは戦えないなどとほざくのではあるまい？」

エヴァは内心では動揺していると判断しつつ、美琴を挑発した。
「・・・・・・一つだけ聞いて良いかしら？」

そんなエヴァの挑発に対し、美琴はそう聞いてきた。

「なんだ？ 内容次第では答えてやってもいいぞ」

「じゃあ聞くけど、貴女の目的って何かしら？ 別にただ闇雲に血を吸う為ってわけじゃないんでしょ？」

「ッ！！（ほう・・・・・・意外に頭の回転が良いじゃないか。それに洞察力もある）」

質問を聞いたエヴァは美琴の指摘した事が図星であつたが、それを微塵も出さずに、

「ほう、意外な所を突いてきたな。・・・・だが、その質問に答える気はない」

と言つて戦闘態勢をとつた。

「（まあ、そりやそうよね）・・・・じゃあ、力ずくで答えてもらおうじゃない！」

そう言うや美琴はエヴァに向かって走り出した。

「（ふふ、そう来るか！）おもしろい！ やれるものなら、やってみるがいい！！」

そう言つてエヴァは懷から液体が入つたビーカーを二つ取り出し。

フリーゲランクス・エクセルマティオー

「氷結・武装解除！」

前方に投げ、中の液体が混ざると同時に呪文を唱えた。

「攻撃！？ だつたら避けてッ！！（しまった！ 今、私が避けたら）」

一瞬避けようとした美琴だが、その後ろで未だに気絶しているのどかがいた。

だが、その一瞬の迷いが、美琴の行動を妨害し、行動できない状態になつた。

「だつたら、砂鉄を使つて・・・・ッ！！（つて、この地面じゃ出すのに時間かかるじゃない！？）」

砂鉄で防御しようとする美琴だつたが、地面が土などではなかつ

たので、すぐには出せなかった。

「やば・・・ッ!」

そう言う美琴だが時既に遅く、エヴァの唱えた呪文が炸裂した。

パリイイイン!

「キヤッ!？」

「ほう。あの状況で宮崎のどこを見捨てないとはな、とんだお人好しのようだ」

「だが、その一瞬が命取りになったな」

そう言うて先程の美琴の行動を指摘するエヴァンジェリン。

「そう言うアンタの攻撃は大した事ないわね?」

そんなエヴァに美琴がそう言い返す。

「ふふ。それはどうかな? (なにせ、この魔法はある意味強力だからな・・・)」

内心そう思っているエヴァンジェリン。

「それって、と言う・・・? (あれ? なんかさっきより体が涼しく感じるような?)」

不思議に思った美琴は今の自分の姿を確認してみると・・・、
「へ?・・・ってえええー!」

いつの間にか全裸になっていた。

「な、なによこれえっ!? 何で私、裸になってんのよおー!」
「ーッ!」

そう言いながら胸とかを隠す美琴だったが、エヴァにははつきり見られていた。

「あ、そう言えば宮崎さんは!？」

そう思った美琴はのどかの方を見ると、美琴同様素っ裸にされていた。

「つか、服を脱がすなんてどう言う魔法よこれ!？」

「なに、安心しろ。この魔法は対象の装備を解除するだけの魔

法だから人体に影響はない」

半泣きしながらそう叫ぶ美琴にエヴァが律儀に説明した。

「安心できるかアアアー……ッ!!」

そう叫びながら電撃を撃ち込む美琴だが、エヴァには当たらず接近を許してしまった。

「しまっ!?!」

「心配するな、少し血を貰うだけ」待て……」ム!!」

「えっ?」

美琴の血を吸おうとするのを中断し、後方に跳ぶエヴァンジェリン。

それに対し美琴は、先程の声の主を確認するために後ろを向いた。

「ほう、やっと来たようだな」

「な!?!」

「ぼ……僕の生徒に、何をしてるんですかーっ」

声の主は、杖を片手にそう叫びながら向かって来ている、ネギ先生だった。

なぜネギがここにきているのかと言うと、今朝の一件の時に感じた魔力が気になったネギだったが、仕事に手間取った後、急いでいた所をのどかの事が気になっていた明日菜とこのかに捕まり、明日菜に問い詰められていたところに向かう先から轟音が聞こえ、二人を引き離して先行していったからだ。

「（お二人に魔法がバレちゃうかもしれないけど、今はそんな事を気にしてる場合じゃない!）ラス・テル、マ・スキル、マギステル」

そう考えたネギは、魔法発動の指導キーを言う。

そして……

「風の精霊11人。縛鎖となりて敵を捕まえろ（ウンデキム・スピリテウス・アエリアーレス・ウィンクルム・ファクティ・イニクム・カプトウーラエ）!!」

呪文を唱え、発動させた。

「あまいな。氷楯」

それに対しエヴァは美琴の時にも使った魔法を発動した。

パキキキキインツツ！！

そんな音と共に先程ネギが放った魔法が跳ね返された。

「跳ね返された！？（ということは僕と同じ魔法使い！？）」

・ネギ先生って魔法使いだったんだ・・・」あ、そうだった！お二人共、だい、じょう・・・ぶです、かつて、あわわわ！？す、すみません！！僕は何も見てません！！！！」

「いや。そんなに動揺されると、余計恥ずかしくなるんだけど・・・」

美琴の声を聞いて、そつちを向いたネギが見たのは、二人の裸（片方気絶）だった。

そして、二人の裸を見たネギはもの凄い勢いで謝っていた。

「・・・驚いたぞ、これほどの魔力とはな・・・」

そんな声を聞き、テンパっていたネギはそちらを見ると、

「え？ 君はウチのクラスのエヴァンジェリンさん！！」

先程生じた突風が止み、エヴァの姿を確認したネギが驚いていた。
「漸く気付いたか」

そう言うエヴァだが、右手の人差し指に傷が有り、そこから少量の血が流れていた。

「な、何者なんですか！？・・・僕と同じ魔法使いなのになぜ、こんなことを！？」

あまりに衝撃だったのかネギはエヴァにそう叫んだ。

「ふ、なぜかだって？ それは「ちよつと！速すぎるわよ、ネギ！！」「さつきからすごい音やけど、なんや？」ちつ、余計な奴らが来たか・・・」

「「え？」」

エヴァがそう言い、ネギと美琴が後ろを見ると、明日菜とこのか

がこつちに向かっていた。

「あ、そう言えばお二人の事、すっかり忘れてた！」

「……………（忘れてたんだ）」

「一旦退かせてもらおうか、ネギ先生。それと何故、と言ったな？」

「簡単な事だ、それは私が悪い魔法使いだからさ……！」

二人を確認していたネギに、エヴァはそう言いながら逃走した。

「あ、待て！ 御坂さん、宮崎さんの事お願いします！」

そう言っただけは、逃げたエヴァを追っていった。

その時、エヴァがほくそ笑んでいるのを見事に……。

美琴 SIDE

「え！？ ちょっと」

あ、行っちゃった…………。

そんな事を思っている私だったが、

「たく、バカネギは…………って御坂！？ なにしてるのよ……！」

追いついてきた神楽坂さんから、そんな事を聞かれた。

そして私は、今の状況を確認してみると…………、

1・逃走したマクダウェルさんと、追いかけて行ったネギ先生。

2・現在、全裸の私と、同じく全裸で倒れている宮崎さん。

3・噂になっている吸血鬼騒動。

これらから考えられるのは…………あれ？ これだと、私が犯人、もしくは変質者になっちゃってない……？

「はわわ……。吸血鬼って美琴ちゃんやったん？」

追い付いたこのかが、早速誤解したのであった。

「な！？　ちが、誤解よ！！」

「そ、それより、神楽坂さんと近衛さんは宮崎さんを見ててくれない？」

「今から、真犯人を追いかけなくちゃいけないから」

「ええ、ちよつと御坂さん！？」

「それじゃ」

「ダッ！　ドドドーーーーッ！！」

そう言っつて宮崎さんを預けた私は全速力で二人を追いかけていく。
……全裸のまま。

美琴SIDE　OUT

明日菜SIDE

「美琴ちゃ……うわっはや！？」

「ちよつと！　それよりネギは？」

そう言っつて宮崎さんを私たちに押し付けた御坂さんは、何時の間にか遠くにいた。

「どないすん。アスナ？」　そう聞くこのかだけど……。

「このかは本屋ちゃんをお願い。　私は御坂さんを追いかけるから」

「ダッ！　ドドドーーーーッ！！」

そう言っつて私は本屋ちゃんをこのかに預けて御坂さんを追いかけた。

明日菜SIDE　OUT

「あ、アスナ。　もう。　……あれ？　そう言えば、美琴ちゃんも服着てへんかったよーな？」

のどかを預けられたこのかは、そんな事を考えていた。

「はくしゅん！　うっ、風邪ひいたかな？」

そう言いながら美琴は逃げたエヴァンジェリンと追っているネギ先生を捜しながら走っていた。とある不幸少年と一晚中追いかけてこをした事も有るからか、美琴のペースはそこまで落ちていない。「あーもう。どこまで行つたのよ！あの二人は！！」

しまいにはそう愚痴りだした美琴に凄い速さで近づいてくる人がいた。

「ちよつと！！」

それは先程、このかにのどかを預け、すごいスピードで美琴を追っていた神楽坂明日菜であった。

「はやっ！？もう追いついて来たの？てか何しに来たのよ！？」

「これでも体力には自信あるのよ。後こっちは、一応居候させてる身だから面倒見ないといけないからね」

「それに、一人より二人の方が見つかるでしょ？」

そう言う明日菜に対し美琴は少し考えると、

「・・・まあ、それもそうよね。私が止める義理もないし、

邪魔だけはしないでよね」

「それはこっちの台詞よ！」

そう言つて共同で動く事にした二人だが、

「・・・それより恥ずかしくない？」

「お願い、言わないで・・・」

明日菜の疑問に、顔を真っ赤にしながらそう言つた美琴だった。

一方、エヴァを追いかけているネギはと言うと、先程エヴァが言つた事を考えながらも追い、既にエヴァに追いついてきた。

「速いな。・・・そう言えば坊やは風が得意だったな」

追い付いて来たネギに対しエヴァはネギの能力をそう評価した。

そして・・・、

バサア！

「あ！！」

エヴァは空高く跳んだんだと思ったら、そのまま飛行していた。

ゴオオオオ！

空中に逃げたエヴァに対しネギは、自身の杖を使って飛行する。

「（杖も箒もなしに空を飛んだ！！ 並の魔法使いじゃないぞ・

・）」

道具を使わずに飛んだエヴァにそう判断するネギだが・・・。

「（でも、おかしいぞ？）」

「（凄腕の魔法使いにしてはそれほど強い魔法を使ってないし、それに・・・呪文の発動に魔法薬を使うのも変だ！）」

エヴァの動きにおかしい所があり、それについても考えていた。

「待ちなさい！ エヴァンジェリンさん、どうしてもこんな事をするんですか？」

「先生として、許しませんよー！ それに、悪い魔法使いだなんてどう言うことですか？」

ネギは追いかけてつもエヴァにそう聞く。すると・・・、

「はは、先生は奴の事を知りたいのだろう？」

「奴の話を聞きたくないか？」

突然エヴァがそう聞いた。・・・するとネギの様子が変わった。

「・・・本当にですね？」

そう聞くネギに対しエヴァは少し笑った。

それを肯定と判断したか、ネギは呪文を唱え始めた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！

エウオカーティオ・ウアルキリーアールム
風精召喚！！」

「ソントゥベルナリア・グラディアーリア
剣を執る戦友！！」

ブアアッ！！

すると、ネギの姿を象った風の塊が8つ現れた。

「分身！？（いやあれは、精霊召喚^①サモン・エレメンタル^②か）

「そう判断するエヴァ、そしてネギはすぐさま「捕まえて（アゲ・カピアント）！」と言ってそれらをエヴァへ向かわせる。」

「（風の中位精霊による複製。それも8体同時召喚とは・・・10歳の見習いとは思えない魔力量だな）」

そう思いながらエヴァはヒュン！と魔法薬が入った瓶をそれらに投げつけた。

ガキキキイン！

と言う音と共に、複製体の内の幾つかが当たり、消滅するなか、

「まだだ！（やっぱりこの人は魔力が全然弱い・・・勝てる！！）」

「そう判断し、先程出した複製体に手間取っているエヴァに追いついたネギは・・・」

「追いつめた！これで終わりです！！」

と言った後に「風花・武装解除！！」と呪文を放った。
フランス・エクセルマティオー

ズバアア！「！！」

しまった！と思ったエヴァだが、回避しきれず纏っていたマン
トは無数の蝙蝠となつて霧散し、着ていた服は無数の花びらとなつ
た。

先程エヴァが美琴に放つたのと似たような魔法だが、エヴァは下
着姿になるだけで済んでいた。

「・・・やるじゃないか、先生」

そう言いながら何処かの建物に着地したエヴァと同時に着地する
ネギ。

「こ、これで僕の勝ちですね．．．．約束通り教えてもらいますよ、何でこんな事をしたのか。それに．．．お父さんの事も」
ネギはなるべく見ないようにしながらエヴァにそう聞いた。

「ふ、お前の親父．．．．すなわち、『サウザンド・マスター』の事か？ ふふふ．．．」

そう言ったエヴァに動揺したネギだが、すぐに自分が優勢である事を思い出し、エヴァに先程の質問の答えを聞こうとするネギだったが．．．。

「これで勝ったつもりか？」

つとエヴァが言うと同時に、ズシャン！ と後方から誰かが降り立った。その容姿からエヴァと同じく女性らしい。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

自身が不利な状況にいるはずのエヴァは余裕でいた。

「（新手！？ 仲間がいたのか。．．．仕方ない、二人まとめて）ラス・テル・マ・スキル．．．」

先程現れた人物がエヴァの仲間と判断し、二人まとめてと思ったネギは指導キーを言った。

「風の精霊11人。捕縛となりて敵を捕まえる！」

そしてネギが呪文を唱えると先程の女性が動いた。

ザシャ　びしっ

「サギ．．．あたっ」

ネギが呪文を唱えきる前に接近した女性がデコピンをくらわし、呪文が中断たれた。

「あたた？」

「え、あれ！？ 君はウチのクラスの．．．」

ネギは呪文を中断たれた人物を見て驚いていた。なぜならそこにいたのは出席番号10番の絡繰茶々丸だったからだ。ちなみに茶々丸はペコリとお辞儀をしていた。

「紹介しよう。私のパートナー、3-A出席番号10番『魔法使いの従者』^{ミニステル・マギ}絡繰茶々丸だ」

「え、．．．なっ！？ ええー！ー！？ 茶々丸さんが貴女のパートナー！？」

茶々丸がエヴァのパートナー（ミニステル・マギ）であることを知ったネギは驚いていた。

「そうだ。パートナーのいないお前では私には勝てん」

「な．．．！！ パ、パートナーくらいなくなつて！」

エヴァの言つた事にそう言い返しながらも一度呪文を唱えようとするが．．．、

「風の精霊11人．．．」．．．「！？」

すぐに茶々丸がススウツと接近して．．．。

ムニニ！ 「アヴヴヴ！？」

ネギのほつぺを引つ張つた。

「．．．．．」

一瞬の静寂。

「風の．．．！？ スビシ！」

またも呪文を遮られ、ネギは何で？ と言つた顔をする。

「驚いたか？」

そんなネギにエヴァは．．．。

「元々『魔法使いの従者』とは戦うための道具だ」

「．．． 我々魔法使いは呪文詠唱中、完全に無防備になり、攻撃を受けてしまえば呪文は発動できなくなる」

「そこを盾となり、剣となって守護するのが従者の本来の使命だ．．．まあ、今や恋人探しの口実となつているがな」

「．．．．．つまり、パートナーがいないお前では我々二人には勝てないと言う事さ」

『魔法使いの従者』の説明をし、茶々丸はもう一度頭を下げる。

「（そ、そそそんなーーー）」

『魔法使いの従者』の事を改めて知ったネギは泣きながらシヨックを受けていた中、エヴァは茶々丸を呼んだかと思うと・・・、

「申し訳ありません、ネギ先生」「うぐっ？」

「マスターの命令ですので」

そう言って茶々丸はネギの首元に片腕を使い拘束した。

「うぐぐぐー」

もがくネギだが拘束からは逃れられなかった。

「・・・ふふふ。ようやく、この日が来たか・・・」

エヴァはそう言いながらネギに近づいていく。

「お前がこの学園に来てから、今日と言う日を待ちわびたぞ・・・

・・・

「お前が学園に来ると聞いてからの半年間。お前に対抗できる

力をつけるため、危険を冒してまで学園生徒なら血を集めた甲斐があつたというものだ」

「これで、奴が私にかけた呪いも解ける」

「え・・・？ の、呪い・・・ですか？」

エヴァが言った事に驚いたネギに対しエヴァはさらに答える。

「ああ、そうさ。真祖にして最強の魔法使い。闇の世界でも

恐れられたこの私がなめた苦汁・・・」

エヴァがそう言つと、急にネギの襟元を両手で掴んだ。

「私はお前の父、つまりはサウザンド・マスターに敗れて以来、魔力も極端に封印された挙句、も~~~~15年間もあの教室で日本のノーマルな女子中学生と一緒に勉強させられてるんだよ!!」

そう叫んだエヴァにネギはさらに驚いていた。

そして、咳き込みながら何か言おうとするネギの言葉を遮り、

「だが、このバカげた呪いを解くには、奴の血縁であるお前の血が大量に必要なんだ・・・」

そう言ってエヴァは・・・、

「・・・悪いが、死ぬまで吸わせてもらつ・・・」

「うわあー！ 誰か助けてーっ!!」

ネギの首筋に鋭い歯を近づけ、吸われると分かったネギは誰かに助けを呼んだ。

そんなネギを無視してエヴァは血を吸い始めた。

「あう。 あっああ．．．あ（こ、こんな事になるんだったら．．．誰かパートナーを探しておくんだったよー）」

ちううーっと言う音と共に血を吸われているネギはそう思っていると．．．．．

「コラーッ！ この変質者どもーっ!!」 「やっと見つけたわよ!!」

ドドドドッ!!

「．．．．ん？ なん．．．」

エヴァがなんだ？ と言いきる前に．．．．。

「ウチの居候に何すんのよーっ!! / さっきはよくもやってくれたわねおんどりやあアアアアッ!!」

ガッ ガンッ！ ドオゴオン!!

追っていた二人が追いつき、明日菜が先に二人に回し蹴りをした後、美琴が怒りの跳び蹴りをエヴァに放った。

「あ」 「だあはばっ、．．．グフェ!」

「あだっ!? ．．．．アブブブブブーっ!!」

「．．．．．」

ドンッ！ ドゲシャーーーーーッ!

エヴァは一回バウンドしてから顔面スライディングを、茶々丸は頭をぶつけただけですんでいた。

「（な！？　なんだこの力は・・・！？）くそ、まさか追いついて来るとは・・・ッ！！」

一人は先程戦っていた御坂美琴だろうと思っていたエヴァはそう言って前をむき、目の前の人物の存在に驚いていた。

「な？　・・・か、神楽坂明日菜！！」

「あつ、あれー！！？」

また明日菜も驚いていた。　吸血鬼騒動の犯人が自分のクラスメイトだったからだ。

「あんた達、ウチのクラスメイトの・・・ちよつ、どーゆーことよ！？」

「どーも、こーも。　アイツが今回の騒動の犯人なのよ。　・・・つーか、私としてはお仲間がいたことが驚きなだけど？」

明日菜の疑問に未だに裸の美琴が答える。　二人がそんなやり取りをしている中、茶々丸はお辞儀をし、エヴァは蹴られた所を抑えながら起き上がっていた。

「えつ、そうなの！？　あんた達、何でこんな・・・、しかも二人がかりで子供をイジめるような事をして・・・答えによつてはタダじゃ済まないわよ！」

「言つとくけど・・・私は許すつもりはないけどね・・・」

明日菜がエヴァにそう言い、美琴は体から電気が発生していた。

「あぐっ・・・」

立ち上がったがふらふらの状態になっているエヴァは二人を睨み付けると・・・、

「・・・イ、イタイ。　よ、よく私の顔を足蹴にしてくれたな神楽坂明日菜・・・、それに御坂美琴。　・・・お、覚えておけよー！！」

バツ！

そう捨て台詞を言って飛び降りようとするエヴァと茶々丸に、

「あ・・・ちょ」 明日菜が何か言おうとするが、
「逃がすかあアアッ!!」

その前に美琴が結構強めの『雷撃の槍』をエヴァ目掛けてぶちか
ました。

バリイバリイバリイ!

「ほぺらばびぶべb h s h y g v f s z!!??」 ビリビリビ
リ!!

「マスター・・・」

ヒューン

その雷撃を諸に食らったエヴァは全身黒コゲになって落下してい
った。

「・・・」

美琴の突然の行動に啞然とする明日菜。

「よっしゃあ! 待つてなさいよ? 私の怒りはこんなもんじゃ
済まないんだからね!!」 ダッ!

そんな事を言いながら美琴は追撃しようとエヴァたち同様、下へ
飛び降りていった。

「ちょっ、御坂さん! ここ8Fよ!? それに服は!?!」

「・・・行っちゃった」

再び啞然とする明日菜だが、ネギが泣いていることに気づくと・
・。

「も～～、あんたってば一人で犯人を捕まえようだなんてカッ
コつけて!」

「取り返しのつかない事になってたらどーすんのよバカア!」
そう言つてネギを叱る明日菜だったが・・・

「・・・ん?」

ネギは明日菜を見ると急に抱き着き・・・、

「うわーーーーん！ アスナさーーーーん！！」

もの凄い勢いで泣いた。

この後、明日菜がネギを落ち着かせるのに少し時間が掛かった。

一方、エヴァたちを追撃しようと飛び降りた美琴は・・・、

「あ、あれ？ おつかしいな？ 落ちたとしたらこの辺りのはずなのにな？」

おそらく落下したであろう場所を探していた美琴だったが、エヴァの姿はなかった。

「どこ行つたのかしら？ ……は、はつくしゅん！ ううー。風邪引く前に戻る・・・」

そう言つて美琴は寮に戻つていった。

その頃、エヴァたちはと言うと、

「・・・どうします、マスター」 ドドドド・・・

美琴やネギたちからは見えない上空にいた。

茶々丸は背中から噴射機らしき物で飛んでおり、エヴァは茶々丸の腕に乗っていた。

「ふふ。思わぬ邪魔が入ったが、坊やがまだパートナーを見つけていない今がチャンスである事に変わりはない・・・」

「覚悟しておきなよ先生・・・それに、御坂美琴。私を此処までしたのだから・・・。 奴の血も一滴残らず吸い尽くしてやらねばな・・・」

そんなことを言つて高笑いしているエヴァだが、未だに全身真っ黒コゲのままだった。

第四章（後書き）

感想、指摘、アドバイスとうお待ちしております。

〈熱血！！ 武田道場〉

信玄「皆の者！！ 今回から始まる武田道場へよくぞ参った！ 儂がとう道場の最高責任者であり、師範でもある武田信玄じゃ！！」

幸村「とう道場が一番弟子！！ 天！ 覇！！ 絶・槍！！ 真田幸村見参！！！！」

剣麻「とう道場、二番弟子！ 作者こと清坂剣麻と申す！！」

御坂妹「アシスタントの御坂妹ですつとミサカは何時ものノリで行きます」

佐助「とう道場が門下生（仮）の猿飛佐助（棒読み）つつか俺様の初登場がこんなのかよ」

信玄「さて、とう道場栄えある第1回はこの道場の説明からじゃ。

幸村！ 剣麻！」

『はっ！！』

幸村「まずは某から行かせていただく！ この道場はああ、質問や重大発表、さらにはとあるシリーズとB A S A R Aシリーズ他後から増えるる作品のキャラクターや多作品のゲストの方々をお呼びいたす場であり！！ 某たちの修練の場でもありますううう！！」

剣麻「次は某が、この道場は某がこれから書くであろう作品の後書きもこの道場が開かれるます。 それと我々はゲスト出演をしてみたいので是非お願いいたしまする」

御坂妹「まだストーリーが進んでないと言うのにつとミサカはつかさずツッコミを入れます」

剣麻「以上でありますッ！！ お館様ッッ！！」

信玄「うむ。では今回は此処までじゃッッ！……！」

『はッ！！ お館様ッッ！……！』

佐助「あゝ、やっと終わった」

御坂妹「無視かよつとミサカは……おやつとミサカはある部分に注目します」

初投稿記念 三番弟子 御坂美琴

佐助「……お館様、いつの間に……」

御坂妹「何故かはわかりませんがつとミサカはお姉様に心の底から同情します」

第五章（前書き）

「前回のあらすじ・・・」

さて皆さん。

噂になつていた桜通りに出没する吸血鬼。

その正体はなんと、同じクラスのエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだったのです。

なんとか彼女を退けた美琴とネギでしたが、この後二人に何が起こるのでしょうか？

・・・それは本編にてお確かめください。

それでは！ マギステルファイト！！

レディイイイイ、ゴオオオオオ！！

美琴「なんで私が弟子入りしてるのよオオオオツッ！！」

第五章

『第五章 従者騒動！？ 動物騒動？』

桜通りの一件の翌朝午前8時、神楽坂明日菜と近衛このかは、未だに自分たちの部屋にいた。

「こらーっ！ ネギ坊主。 もう8時よっ・・・いーかげん起きなさい！！」

なぜなら、ネギが未だにベッドの中で丸まっていたらだ。明日菜はネギを起こしており、このかは二人を待っていた。

「あんた一応先生でしょ！？ 先生が遅刻したら生徒に示しがないでしょーが」

そう言っている明日菜だが・・・。

ネギはゴホン、ゴホンと言った後に、

「・・・何か・・・風邪ひいたみたいで・・・」

と言った。そんなネギにこのかは心配していたが・・・。

「もーー」 事情を知っている明日菜はそれが仮病だと分かっていたからか、布団を引つpegがした。

「あっ！？」

布団を引つpegがされたからか、ネギはそんな声を上げた。

「昨日怖い目にあつたのはわかるけどねー、先生のくせに登校拒否してどーすんのよホラッ！」

「あーん。 パンツだけは！！ パンツだけは許してくださいー」

着替えさせようとパジャマを脱がそうとする明日菜に、ネギはそんな事を言っていた。

美琴SIDE

あー恥ずかしがった。昨日はさんざんだったわね。」

結局マクダウェルさんたちを取り逃がしちゃうし、裸だって桜咲さんと龍宮さんに見られたし……。まあ、あの二人ならそうそう喋らないと思うけど、他の人には見られなかったからその辺は大丈夫のはず！……たぶん。

「昨日は災難でしたね御坂さん」

「まったくよ……。ってあれ？ マクダウェルさん来てないわね」

少し強くしたけど、登校出来なくなるほどはやってないしな。」

「ああ、彼女なら……」

「マスターは来ています。すなわちサボタージュです」

「わあ！？ び、ビックリしたー。ってアンタはッ！！」

刹那が言う前に何時の間にかいた茶々丸がそう説明し、いきなり現れた事と昨日の件について美琴が驚いた。

いきなり現れてビックリしたけど、そっちから来たんなら好都合ね……。

「昨日は逃がしたけど、こんどこそ……」

やられっぱなしは、私の主義じゃないし……。裸にされた事、まだ許してないんだからね！

「少し落ち着いてください御坂さん。ここ教室ですから……」

そう言って私を宥める桜咲さんだけど、相手が応じてくれれば。

そう思っている美琴だったが……、

「その件に関してはお断りさせていただきます」

絡繰さんがそう言った。 よっしゃあ！ これで堂々と……

って、あれ？

「な、なんで？」

昨日の件で応じると思ってたのに。

「マスターの命令の中に貴女と闘うことは含まれておりません。

それにもうすぐ授業が始まりますのでお断りさせていただきます」
そう言っぺコリと頭を下げた茶々丸。

「まあ、そう言う事なら・・・別に良いけど」
何かこの人(？)って話しくいねね・・・。

まあ、人って言うより人型ロボットよね・・・なんで周りが気付いてないのか不思議なんだけど。

その後登校して来た神楽坂さんがネギ先生を引つ張ってる感じで連れて来てる様に見えたけど、あの様子と昨日の事を考えると・・・気のせいじゃないわね。

美琴がこちら側に来て初めての授業が始まる中、彼女はそんな事を思っていた。

美琴SIDE OUT

朝の一件から数時間経ち、現在授業中。

そんな中、先生であるネギはというと・・・、

「(あう)。今朝はエヴァンジェリンさんがいない事にホッとしちゃったけど根本的な解決になってないし・・・」

絶賛お悩み中だった。

「(はあぁー・・・新学期早々に大問題が・・・、やっぱり魔法使いにパートナーは必要なんだ。・・・でも、そんなにすぐに見つからないだろうし・・・)」

昨日の一件の事でいろいろ考えているネギだったが、今は授業中。明日菜や美琴他、生徒の何人かがネギの様子に気付く。

「(あちゃ、連れて来たわ良いけど、これじゃあ授業にならないわね・・・私的には別に良いけど)」

「(先生が授業に集中しないってどうよ?・・・まあ、無理もないけどね・・・)」

ネギの様子に対してそう思っている明日菜と美琴だったが、肝心のネギはというと・・・、

「ふう・・・(この中に運命的なパートナーがいたらなあ・・・)」
顔こそ生徒達に向いていたが、頭ではそう考えており、明らかに

ボーツとしていた。

そして、ネギの様子に気が付いた生徒はというと、

「な、何かネギ先生の様子がおかしいよ……?」

「う、うん。ボーツとした目で私達を見て……」

「あんなため息ばかり……」

鳴滝姉妹と教科書を読んでいた出席番号5番和泉亜子がそう喋ると、

↓以下の会話はヒソヒソ話です↓

「ちよつとこれつてもしかしてこないだの……」

「あー、あのパートナー探してるってゆー」

「ネギ先生王子説事件!？」

「じゃあ、まだ探してるの!？」

「えー、うそ(?)」

↓ヒソヒソ話し終了↓

「(いや、なにその噂? パートナーってたしかあの話の中で出てきたヤツよね……魔法って隠すもんじゃなかったけ?)」

クラスのヒソヒソ話しに対し、そう思いながら呆れている美琴だった。

その後、ネギの問題発言にてクラスが一段と騒がしくなり、収集がつかなくなった辺りで授業は終わり、教室を出ようとするネギだったが、ドアにぶつかった後、大きなため息をしてから退室した。
・
・それから数秒後に明日菜が心配になったのか、そんなネギを追いかけて行った。

昼間の屋上にて……一人の生徒がここで昼寝をしていた。

その生徒とは、ネギが悩んでいる原因であるエヴァンジェリンである。眠気を覚まそうと腕を伸ばす彼女だが、すぐにポケッとし

てしまった。

昼は眠い・・・思っていた彼女だったが、

「・・・・・・・・む」

何か感じたのかそんな声をあげた。

「何か来たな・・・・・・・・結界を越えた者がいる。・・・・・・・・学

園都市内に入り込んだか・・・」

彼女は現在、呪いの影響により、学園に張られている結界を抜けて侵入する者を感知できるようになっているのである。

少しボーツとしている彼女だったが、

「（仕方ない。調べるか・・・・・・・・。全く厄介な呪いだな）

めんどくさい・・・・・・・・」

そう言ってテクテクと屋上から出て行った。

美琴SIDE

時間は経ち、今は夕刻。美琴は一人歩きながら少し考え事をしていた。

刹那はと言うと、用事があると言ってそっちの方へ行っている。

「今日のネギ先生のあの様子・・・・。いくら襲われたからって

さあ、取り乱しすぎなのよね」

「・・・・・・・・それにしても・・・・何でかわからないけど、ネギ先生があそこまで取り乱してるのを見てたらイライラしてきたのよね・・・・・・・・」

けどまあ、まだ10歳の子供に取り乱すなつても酷な話だと思っただけ、やっぱりイライラしてくるわねー、ホント何でかしら？・・・・・・・・ってそう言えば、

美琴がそう思うと、ネギが退室した後の事を思い出していた。

切欠は、元気の無いネギを追いかけて行った明日菜の言った内容だった。

『いや、えーと・・・・あの、何かパートナーを見つけられなくて

困ってるみたいなのよ……見つけれないとやばいことになるみたいで……」

この事を聞いた美琴は何の事か察しがついたが、3-A（魔法関係者除く）の面々はというと、

『やっぱり、噂は本当だったんだー！！ 王子の悩みだー！！！！』

とその声を筆頭に自分がパートナーになるという声がクラス内で高まり、その後、なんかんやで《ネギ先生を元気付ける会》を開く事になった。

そんな事を思い出してみたけど……あれってやっぱりマジなんだろうね……。

「ネギ先生ってあのクラスの様子や昨日の事とかを見てると、何かアイツみたいなのよねー」

「……まさか鈍い所も似てないわよね？」

ふとそんな事を考えた美琴だった。

『学園都市』のとあるマンションにて……。

「は、ハクション！？……？ 風邪でもひいたかな？」

そう言っって少し考え事をしていたら……、

「ん？ 何か焦げ臭い臭いがつて、あああ！？ フライパンから黒い煙りがつて何故に火力が最大になってるんだよ！！」

そんなこんなで数分後、真っ黒な野菜炒めが完成した。

その後もキャッシュカードを踏み砕き、担任から補習という名のラブコールを貰った。後オマケで、この後に暴食シスターの噛み付き攻撃が待っている。

「は、ははは……ふ、不幸だああああー……ッッ！！」

そんな叫び声が学園都市内に木霊した。

「……なんか、今アイツの声が聞こえた気がしたけど、気のせいよね」

そう思っていた私だったが、

「…………ん？ あ、そう言えば桜咲さんもなんか言ってたわね」

クラスの騒ぎの事で忘れかけてたけど、朝の時に……、

『御坂さん。 申し訳ありませんが、あの二人の件について私達は学園長からしばらくの間手出し無用と言われてまして、情報位しか手伝うことが出来ません』

『え、ああ。 私なら大丈夫。 だから桜咲さんが謝らなくていいから』

『…………すみません。 いえ、ありがとうございます』
つてな事があつたんだっけ。

その時の事を思い出した美琴は、少し大きいため息をついた。

「桜咲さんの手前にああ言ったものの、何の情報もなしに行くのは経験上やめた方がいいしなー、けどだからってただ見てるだけってのもなんだし……………いつそのことネギ先生と共同戦線でもしようかしら？」

て言っても、あの状態じゃね……………、

「ほう。 つまり貴様はあくまでも私と戦うと言うことか？」

「まあね。 裸にされた事もそうだけど、ただ見てるだけってのは私の性分じゃないのよ」

……………つて、あれ？ 私、今誰と喋ってんだろ？

そう思った私は後ろを向いてみるとそこには、マクダウェルさんと絡繰さんがいた。

「なあ！！ い、何時からそこに！？」

「なに、つい先程からな」

驚いている美琴にエヴァがそう答える。 例によって茶々丸がペコリと挨拶をしていた。

「な、なによ？ 昨日の続きでもやろつって言つの」

「いや。少なくとも、次の満月までは私達は貴様や坊やを襲うことはないからな」

身構えながらそう言った美琴だったが、エヴァがそれを否定しつつそう言った。

「……はい？」

「つまり、どう言うこと？」

エヴァの言った事が予想外だったのか、美琴はそう聞いた。

「ふ。なに、今の私は満月が過ぎると魔力がガタ落ちになっ
てな……」

「ホラ」

そう言って歯を見せるマクダウエルさんだけど、そこに吸血鬼特有の牙は無く、見たのは普通の歯だけだった。

「ご覧の通り、次の満月まで私もただの人間、いま坊やをさらっても血は吸えないのさ」

そう言ってるマクダウエルさんだけどそれって、

「今、さらつと弱点言ってなかった？」

そう言っただけで呆れた目でエヴァを見る美琴。だがエヴァは、それがどうしたと言わんばかりにフンつと鼻を鳴らし、

「どうせ貴様は遅かれ早かれ、刹那の奴から聞く事になるだろうし、そもそも……私は今の状態でもそれなりに出来るからな」
そ、そうなんだ……ん？

納得した美琴だったが、ふと違和感に気付いた。

「ちよつと待ちなさいよ！？」 今の話って要するにネギ先生が襲われない理由の説明であって、私の事について一切話しの中に入っていないじゃない！？」

なんか何時の間にか私もターゲットの中に入ってるし！？

「話したぞ。……貴様が襲われない事についてだが」

「つか、そもそもどうして私が貴女に狙われなくちゃいけないのよ……」

美琴の疑問にエヴァがそう答えたが、納得のいく内容ではなかつ

たのか美琴が叫ぶようにエヴァにそう聞いた。

・・・興奮しているのか、髪に青白い電流がビリビリッと流れている。

「私が貴様を狙う理由だと？ ふふふ。 ふははは、アーハハハハハ！」

エヴァがそう言うのと突然笑い出した。

「なつ、なによ？ いきなり笑い出して」

「ふふふ。 まさか、貴様からそれを聞くとは思わなかったな。

まあいい、答えてやろう」

いきなりの事で驚いている美琴を尻目に、エヴァがそう言う。

「最初は少しの興味だったな。 だが、昨日のはただの偶然だったさ」

「・・・だが、私が貴様を狙う理由はそれではない。 私が貴様を狙う理由とは・・・」

「狙うわけは・・・」

そう言うてしばらく沈黙した後、

「昨日、貴様の攻撃で真つ黒コゲにされた恨みだああああッ
！！」

エヴァがそう言い放った・・・。

「・・・・・・・・・・うえ？」

エヴァの言った事に対し啞然とした美琴はそれだけしか言えなかった。

「いいか！ 次の満月の日に坊や共々貴様を完膚なきまでに叩き潰した拳句、その血を根こそぎ吸い尽くしてやるからな！！ 覚悟

しておけよ!!」

「行くぞ、茶々丸」

「ハイ、マスター」

言うだけの事を言っただけでその場を立ち去るエヴァと、やはりペコリと挨拶してからその場を立ち去る茶々丸。

あまりの出来事にそれらを見送ってしまった美琴は少し沈黙すると・・・、

「・・・ふ、ふ・ざ・けんあああああつ!! それって要するに逆恨みじゃない!？」

そりゃ、私もちよつとやりすぎたかなーとも思っただけさあー、その前にこつちも脱がされてんのよ!？」

雷撃の槍の一発や二発くらいぶちかましたくらゐわアアアア! 周辺に雷撃を撒き散らしながらそう叫んだ。

・・・その後、その周辺にあった電子器具（機具も含めて）が全滅したのは言うまでもない。

美琴SIDE OUT

一方その頃、坊やことネギ先生はと言うと、

「だから心配しすぎだつてばー。ネギ、あの子だって、いきなり取って喰ったりしないって」

「そんなこと言ってもー」

なんとか明日菜が元気付けようとしているようだが・・・特に効果はないようだ。

「とにかく。今度何かあったら私が追っ払ってやるから、元気出さないよ」

そう言う明日菜だったが、

「アスナさんはあの人達の恐ろしさをわかってないんですよ」

経験者は語るというが、明日菜はエヴァ達に会ってこそいるが戦

闘はしていない為、あの二人の恐ろしさを間近で味わっているネギの励ましにはならなかった。

2人がそんな会話をしている中、ネギの後ろから忍び寄る影が・・・、

ガボツ！

「！？」

すると突然、ネギは頭に何かを被せられ、そのまま拉致された。

「……………あ、あれ。ネギ……………」

何時の間にかいなくなった（と言いか拉致された）ネギに明日菜は少し呼びかけたが、その場には誰もいなかった。

……………ちなみに拉致したのは、3-Aの長瀬楓と大川内アキラの2人で、この後ネギは明日菜達が泊まっている寮の大浴場にて『ネギ先生を元氣付ける会』という企画で3-Aの生徒達（一部除く）に逆セクハラされてしまうのである。

……………南無散（ネギに対し）

明日菜SIDE

「ネギーーッ！」

「ちよっと……………ネギ。どこ行っちゃったのよ……………」

まさか、ホントにエヴァンジェリン達に取って喰われたんじゃないでしょうね……………。

そう思っていた明日菜の目の前に見覚えのある人物が、

「ほう、今度は貴様か……………神楽坂明日菜」

エヴァンジェリンと茶々丸である。

「……………あんた達！ネギをどこへやったのよ」

まさか、もうホントに……………、

そう言つて身構える明日菜だったが、

「ん？ 知らんぞ」

「え．．．．．」

あ、あれ？ 違うの？

明日菜はエヴァ達がネギを攫つたと思つていたが実際は、先程美琴と別れたばかりのエヴァンジェリンと茶々丸を、ネギを探していた明日菜が発見しただけである。

「安心しろ神楽坂明日菜。これは御坂美琴にも言つた事だが、．．．．．少なくとも次の満月までは私達は坊やや御坂美琴を襲つたりすることはない」

「え．．．．．？ どういうこと」

全然わかんないし．．．．．何で何時の間にか御坂さんも狙われてんのよ．．．．．つかさつき会つてたんかい。

そう思つた明日菜に対し、エヴァは先程美琴に説明したのと同じように説明した後、明日菜を挑発するような発言をしたがさらに、
「それよりお前、やけにあの坊やのことを気にかけてるじゃないか」

「！」

な、ななななにをいきなりそんな事を！？

そう思いながら顔を真っ赤にする明日菜。

「子供は嫌いじゃなかったのか？ くくつ、同じ布団に寝ていて状でも移つたのか」

そう言つてるエヴァの顔はどこか楽しんでいるように見えた。

「なつ．．．．．か、関係ないでしょ！ とにかくネギに手を出したら許さないからねあんた達！！」

そうよ！ ネギはまだ子供なんだから誰かが見てないと危なっかしいからであつて、そう言つたのじゃないんだから！！

「ふふ。 まあいいがな、仕事もあるので失礼するよ」

そう言つてどこかに行こうとする２人だけど．．．．．

「仕事．．．．．？」

中学生の筈だけど・・・バイトかな？
そう思う明日菜だったが、

キャーーツ（？）

「!？」

ちょ、なによ今の声！？・・・なんか寮の方から聞こえてきた
んだけど。

そう思いながらも明日菜は自分が現在住んでいる寮へと向かった。

明日菜SIDE OUT

美琴SIDE

少し時は遡る。

美琴がエヴァの言った事に対しキレて周りに雷撃を打ちかまして
から数分後・・・。

彼女は今、学園内をふらついていた。

「はあ、結局マクダウェルさん達見失うし、なにやってんだろ私」
つか・・・つい周りの事気にせず電撃ぶちかましちゃったけど大
丈夫よね？

実際、大丈夫ではないのだが・・・今はその話は関係無いので
省略させていただく。

「・・・ん？ あれ？ 桜咲さん」

そう言つて美琴は目の前の人物に話し掛ける。

「あ。 御坂さん、私に何か？」

「ううん、特になにもないけど・・・それよりなんで桜咲さん
がここに？」

確か、『ネギ先生を元氣付ける会』に行ってる筈じゃあ？

そう思っていた私に、

「いえ、私は参加しなかったの」

口に出てたのか桜咲さんがそう答えた。

「ああそうなの・・・結局の所、その会って具体的に何するかしらね」

「さあ、私も詳しくは・・・ところでエヴァンジェリンさんについてなんですが・・・」

そう言って刹那は続けて何かを言おうとするが、

「それって、次の満月まで動かないって話？」

「！！なぜ、それを！？」

先に言ったからか桜咲さんが驚いてるけど、まあ隠す事でもないしね・・・。

「実は・・・」

そう言った後、美琴は先程エヴァから聞いた事を刹那に話した。

「・・・って訳なの」

「そ、そうですか（まさか予測されてたとは）」

美琴の話に対し、刹那はそれ以外に言うことがなかった。

「・・・あ、そうでした。御坂さん、学園長から伝言があ・

・

桜咲さんが何か言う前に『キャーッ（？）』と言う言葉で遮られて最後の辺りが聞こえなかったんだけど・・・、

「な、なに今の・・・」

「私達の寮の方から聞こえてきました。ッ！！御坂さん」

「ええ、もしかすると・・・」

桜咲さんも同じ考えみたいね。

そう思った私と桜咲さんは、寮の方へと走っていくと、

「あれ？ 神楽坂さん？」

私達と同じように寮に向かっていている神楽坂さんに会った。

「御坂さんに、桜咲さんよね？ 何でこんな所に？」

そう聞いてきた神楽坂さんに、

「さつき声が寮の方から聞こえてきたからそれで・・・そっちの方は？」

私が答えてからそう聞き返してみると、

「私はネギを探してたらさっきの声が聞こえて」

なるほど、目的は一緒って事ね。・・・多分、神楽坂さんは何も知らないんだろうけど・・・。

そんな会話をしながら、私達は寮へと向かっていった。

美琴 SIDE OUT

美琴達が寮へ向かっている頃、声の本元で、現在『ネギ先生を元氣付ける会』が開かれている大浴場では・・・、

「キヤー！ー、ネズミーツ！？」

「イタチだよ！」

「ネズミが出たー！！！」

3-Aの面々がそう言いながら風呂場から飛び出していた。

先程までは3-Aの面々がネギにセクハラをしていたが、風呂場に毛むくじらの生物が出現し現在にいたる。

そして、そのネズミやらイタチやと言われていた生物が素早く逃げている生徒に近づき、

パランツ 「キヤ！？」

パラッ 「ひゃっ・・・」 「あうっ・・・」

ネズミ（仮）が通り過ぎた後に、水着が取れていった。

「キヤー！ー！？ このネズミ、水着を脱がすよー」

その後も次々と水着が脱がされていく3-Aの面々。そんな中先程までセクハラをされていたネギはと言うと、

「（なななな、これは一体何事ー！？）」

目を手で隠しながらそう思ってるネギであった。

そして、浴場に近づく足音が聞こえ、

「ネギ！ どうしたのよ！！」

「あんなに騒いで！ なんかあったわけ！？」

「あの、お二人共。 制服着たままですって！？」

そう言いながら浴場に入ってきた明日菜と美琴、そして二人に制服のままと言っている刹那の三人。ただし刹那も制服のままである。

「ア、アスナさん！！ 御坂さんに桜咲さんも！！」

ネギがそう叫ぶと、今まで3 - Aの水着を取っていたネズミ（仮）が新たな獲物を発見したかのように明日菜達に向かってくる。

「！！！」

スパコーーーン

「！？」

明日菜がなぜか持っていた桶でネズミ（仮）の頭部を叩き、

バラツ 「！！！」

ネズミ（仮）が明日菜の制服のリボンとボタンを外していた。

ささつと逃げていくネズミ（仮）。

「な、何よ今の小さいのは・・・」

そう言っただけで行った方向を見ながら明日菜はしばらく啞然としていたが、

「な、なにやってんのよあんだ達！！ 元気付ける会じゃなかったの！？」

美琴の言った事に反応し、そっちを向く明日菜。そこで見たものは、ネギを含む3 - Aの面々が素っ裸になっているのと、それにツッコミを入れている美琴だった。

「ちょ、コラー！　素っ裸で何やってんのよー、ネギまで連れ込んで！」

「いえ、お二人とも。これは誤解っ」

「元気付ける会なんだよーっ！」

「なんで元気付けるのに素っ裸になってるのって聞いてるのよ！

こっちはーっ！！」

「……………」

そう言っただけで騒いでいる面々を余所に、刹那はあまりの状況に口をポカーンと開けたまま啞然としていた。

大浴場での騒ぎから数分後、美琴と刹那は自分達の部屋にいた。

・ちなみに龍宮は今、この場にも先程の騒ぎの時もいなかった。

「それで、さっき言いかけた学園長の伝言ってなに？」

「はい。学園長から明日の夜、私達と夜の見回りに参加するよ
うにと」

「見回りって、他の魔法使いの人も参加してるやつよね？　私が参加して良いのそれ？」

刹那の言った事にそう聞く美琴。

「はい。……実際、学園の魔法関係者の内、何人かは貴女の事を信用していないので、明日の見回りでその疑問を晴らす事になっています」

「ふん。わかったわ。こっちもマクダウェルさんが行動を起こすのが次の満月ってわかったし、正直暇だしね（実際手伝おうかなーとも思ってたしね）」

そう答える美琴。その後、二人は眠りについた。

一方ネギ達の方では、先程の騒動の犯人である生物がネギの知り合いでオコジョ妖精の力モだったり、また騒ぎが起きたり、その力モがなにやら企んでたりしていた。

「熱血！！ 武田道場！！」

信玄「これより、第二回武田道場を執り行っ！」

幸村「うおおおおおー！ー！ー！ー！ 燃えてまいりましたぞおおおおー！ー！ー！ー！」

剣麻「お館様！！ その前にとう道場、初ゲストの紹介を！！！」

信玄「うむ！ 本日のゲストはゼロディアス殿の『海賊戦隊リリカルゴーカイジャーSTS』で活躍しておる」

マーベラス「キャプテン・マーベラスだ」

銀時「どうも。シンケンジャーやってました坂田銀時です」

幸村「おお、お二方、よくぞ参られた」

銀時「たりめだ。コイツを食いたいって言った奴がいるんだからな」

マーベラス「一緒に食おうと思つて来てやったぜ！ それにここなら安気に食えるしな」

そう言つて銀時達が持つてきた物は井の上に大量の小豆がかつた食べ物だった。

幸村「おお！ それが宇治銀時井でござるか！！」

佐助「うげえ！？ 俺様、見ただけで胸焼けが・・・」

御坂妹「まさか本気だったとはつとミサカは驚きます」

信玄「ほう、面妖な食べ物じゃな。儂も一つ食べてみるとしよう」

佐助「ええっ！？ お館様それマジで言ってるの！？」

剣麻「某も井ではなく茶碗でなら頂こう」

御坂妹「まさか作者からそんな言葉が出てくるとはつとミサカは驚愕します」

剣麻「何を言つておる？ 某は前に一度、井の上にお汁粉をかけて食べた事もあるぞ。・・・その時は残してしまつたが」

幸村「なんともつたいない」

銀時「なるほど、だから茶碗」

それから作者、幸村、信玄、マーベラス、銀時に宇治銀時井がわたり、

信玄「それでは!!」

「」「」「頂きます!!／派手に食うぜ!」「」「」

5人は、そう言ってから宇治銀時井を食べた。

・・・その反応は、

幸村「う、美味い!　なんというつまさかああああッ!!!!」

そう言ってがつつき始める幸村。

信玄「うむ。　いささか甘すぎるが、それでも見事な味わいよ」

剣麻「味もさることながら、これは運動した後に消耗した体力も回復しますな」

そう言ってる信玄と作者。

マーベラス「やっぱりうめえな」

銀時「だろぉ、なんで他の奴らはわかんねえのかねえ」

マーベラスと銀時もそんな事を言っていた。

佐助「うそおーッ!?!」

御坂妹「目の前で起きている事が信じられませんか」とミサカは激しく動揺します」

それから各々が食べ終わってから、少しばかり模擬戦をしたが、幸村と銀時は引き分け、作者とマーベラスは作者が負けた。

マーベラス「じゃあな!　なかなか楽しめたぜ」

銀時「俺も楽しめたな」

そう言っ二人は帰っていった。

信玄「それでは、今回はここまでじゃ!!」

幸村「それではこれにて!!」

剣麻「また次回もお楽しみくだされ!!」

第五章（後書き）

感想、質問、アドバイス等お待ちしております。

それとゼロディアスさん。ゲストの登場許可をくれまして、ありがとうございます！！

これからもがんばってください。

第六章（前書き）

（前回のあらすじ・・・）

さて皆さん。

突如エヴァンジェリンに狙われる事となった美琴とネギ。これに対し、ひどく悩んでしまったネギ、そんな彼を元氣付けようと3-Aは元氣付ける会を開きます。しかし、そこで事件が起きたのです！！

この事件は無事解決し、ネギにはパートナー探しの助っ人が、そして、美琴は刹那達と共に夜の見回りに参加することになりました。果たして、ネギはパートナーを見つけることが出来るのでしょうか！？

・・・せれは本編にてお確かめください。

それでは、マギステル・ファイト！！

政宗「Let's Party！！ YAH A！！」

美琴「またあっ！？」

幸村「政宗殿おおおおッ！！ いざ尋常に勝負！！」

政宗「OK！ そのParty乗った！！ 奥州筆頭、伊達政宗。推して参る！！」

幸村「ううおおおおッ！！」

政宗「Y A a a a a a a a a！！」

美琴「こんな所でやり合うなあアアアアアッ！！」

第六章

『第六章 仮契約とその頃と見回りと』

御坂美琴は現在、3-Aの教室にて、刹那から見回りについて詳しい話を聞いていた。

美琴SIDE

昨日起きた大浴場での騒ぎは、ネギ先生のペットであるオコジヨが犯人だと教えて貰ったから、一応その件については解決した。
「……そう言えば。なんか今朝、宮崎さんの様子がおかしかったけど……多分気のせいよね。」

「御坂さん。昨日お話した事ですが、もしかしたら戦闘が起きるかもしれませんからその時は」

「わかってるわ。自分の身は自分で守って事でしょ？」

「はい。私も龍宮も、出来るだけ対処しますが、そこまで保証できません」 「大丈夫よ、これでもロシアの特殊部隊と正面からやりあった経験があるんだから」

戦車も使ってたけどね……それに、結局私は当初の目的は果たせなかったけど。

「そ、そうなんですか……（ひ、否定しようにも、私はそういつた事が出来る人達を知ってるだけに否定できない）」

刹那の言う人達とは、ネギの父親である『千の呪文の男』と言う異名を持つナギ・スプリングフィールドとその仲間の事である。

なぜなら、彼等は特殊部隊所かたった数人で世界中の軍隊と渡り合えるほどの戦闘力を有していたのだから。

「それで、どこを見回るの？」

「は、はい。私達は住宅街と寮の辺りになります。時刻は深夜になりますが、そこまで遅くはなりません」

教室内でそんな話をして大丈夫かな〜っと思いつつ、私は桜咲さんから場所などを聞く。

まあ、クラスのほとんどはバカ騒ぎしてるから大丈夫みたいだけど。

そうして、見回りの件についての話を終え、一日の授業が始まった。

・・・それにしても、授業中に宮崎さんがやけにネギ先生を見てたけど、ホントどうしたのかしら？

美琴SIDE OUT

それから数時間後、授業が終りネギは一人道を歩いていた。

「はー、何とか今日も無事授業をこなせたなー」

「また、エヴァンジェリンさんいなかったし。よかった」

「・・・でも、先生としてはエヴァンジェリンさんのサボリを認めておくわけには・・・で、でも怖いでしょう」

ネギはそう言つと、昨日の様にまた悩みだしたが、

「兄貴、兄貴ー！ーッ！！」

そう叫びながらネギへと向かつて来る人、否オコジヨが一匹。

「あ、カモ君。 何で学校に！！ ダ、ダメだよ大声出したら」

何と、オコジヨが喋ったではないか。・・・実はこのオコジヨ、妖精らしく喋るのである。

ただしオコジヨが喋ってるのを見られると魔法関係がバレる可能性があり、ネギは出来るだけカモが喋ってる所を見られないようにしているのである。 と言う理由から、ネギはカモにその事を言おうとするが・・・、

「大変ツスよ！ 例の宮崎さんが」

例のとは、昨日ネギのパートナー選びの助っ人として来たらしいカモがこれ！と思った候補があると言い、その候補がのどかなのである。

・・・そして、カモはネギに何があつたかを伝えると、

「えーーーーっ！！ 寮の裏手で不良にからあげされてる～～～！？」

そう驚いてるネギは、某ネコ型ロボットが活躍するアニメに出てくる某ガキ大将『の。太あああ～～～～！！』と某金持ちのボンボン『家。うううううう～～～～ツツツ！！』がのどかをから揚げにしている場面を想像していた。

「かつあげっス、かつあげ！」 ネギの言つた事を訂正するカモ。

「な、何でそんな事わかつたの！？」

そうネギが聞くと、

「え・・・えーと、能力だよ。 オコジヨの特殊能力が・・・」

そう答えるカモだが、明らかに今考えたかのような発言である。

「と、とにかく行くよっカモ君！！」

「そーこなつくちゃ兄貴！！」

そう言つてネギは杖に乗り、カモはネギの肩に乗つて、寮の裏手へと向かつていった。

??? SIDE

一方、『学園都市』にある窓の内ビル内にて、

「どう言つことか説明しろアレイスター。 数日前にあつた突然の術式、それも空間に干渉する術式の発動、それと・・・現在消息不明になっている『超電磁砲』御坂美琴の事についてな」

冬服の下にアロハシャツを着た高校生位の少年、土御門元春は目の前の男にも、女にも、子供や老人、聖人や罪人に見える人間、アレイスター・クロウリーにそう聞いていた。

『ほう、どう言つ風の吹き回しだ土御門？ 貴様がそんな事を聞いてくるとは』

「能書きはいい。 早く知っている事を話せ」

珍しがっている様に聞こえるアレイスターに土御門はそう聞き返

す。

『ふ、まあいいだろう。魔術の件、御坂美琴の件。そのどちらも貴様が思っている通りだ。だが、さすがの私も御坂美琴の所在までは知らないがな』

「その言葉を信用するとても？」

『好きに取るがいい』

土御門が言った事に平然と答えるアレイスター。

「……分かった。充分だ」

これ以上は何を聞いても無駄だと判断した土御門はそう言った。

そして、彼がその場から離れてからアレイスターは、

『ふむ、少し予想外の事態だが、計画を少し修正するだけで済む上、幾らか縮める事が出来るな』

そう言つて平然とした態度のままアレイスターはそう言っていた。

??? SIDE OUT

のどかがからあげ……もといかつあげされていると聞いたネギは空を飛んで寮の裏手へと向かつていた。

……そして、寮に着いたネギは飛んだままのどかを探しており、
「いたっ」

のどかを見つけたネギは降りてからのどかの方へ向かつていく。

「宮崎さん！ 大丈夫ですか!？」

そう言つてのどかの心配をするネギだが、

「あ……先生……」

当の本人はと言うと、不良にかつあげされていた様子はなく、髪を髪留めで目が見えるようにしてあり、そして、制服ではなくワンピースを着ていた。

「あ、あの！ 不良のからあげはどこです!!」

「からあげ……定食ですか？」

未だにかつあげをからあげと間違えているネギとネギの言った事

からから揚げ定食と認識しているのどか。

「あ、あれ？ 襲われてたんじゃ……？」

「はあ……？」

「あれー？ おかしいな……」

いまいち会話が成り立っていない二人。そして少しの静寂から……、

「あ……あのー……それでネギ先生……」

「わ、私なんか……パ、パートナーでいいんでしょうか？」

のどかは、顔を少し赤くしながらネギにそう聞いた。

「へ……」

のどかの突然の質問に啞然とするネギと親指をグツ！と立てている力モ。

「力、力モ君！？」

ネギはハツ……と何か思ったのか力モに目を向けた。

「へへっ……すまねエ兄貴……手っ取り早くパートナーの契約を結んでもらうため、ひと芝居たせてもらいましたぜ」

なんとこの騒動は、力モがネギとのどかを契約させるためのものであったのだ。

「力、力モ君騙したね！」

「あ、後押しだよ、後押し！」

ネギと力モはそう言い合っていたが、これらの会話はヒソヒソ話くらいで、のどかには聞こえていなかった。

「あの……一昨日の吸血鬼騒ぎの時にはまた助けて頂いたそうで……」

「え……」

のどかが突然何か言い始め、その内容に少し驚くネギに、

「何だか私、先生に迷惑かけてばかりですいません……それに一昨日は御坂さんにも」

「い、いえそんなコトないですよ」

続けざまに聞いたのどかの言葉を即座に否定するネギ。

「だから……お返しに……ネギ先生のお役に立てることなら何でも……」

「が……がんばりますから、何でも言ってくださいね……」

顔を赤く染めながらニコって笑うのどか。その笑顔はとても可愛らしかった。

「み……宮崎さん……」

ネギはその言葉と笑顔に少し顔を赤くした。

「フフ……俺の読みは間違ってたな」

「ど、どういうコト!? カモ君」

カモが突然そう言ったのでネギはその理由を聞く。

するとカモは、パートナーは互いが信じ合い、いたわりあえる関係が重要である事、のどかが現在クラスの中で一番ネギの事を好きになっている事を話した。

「え……ええっ!? み、宮崎さんが僕のことすす好つ……
……!? そ、そんな僕困るよ……」

ネギがかくなくリテンパっているとカモが、

「契約!!」
バクティオー

「わ」「キャ」

そう叫び、魔法陣が出現する。

「なつ……何コレ!? 魔法陣!？」

ネギは魔法陣の出現に驚き（それでも魔法関係は一応隠しつつ）、

「ん……先生……これは……? この光……な、何だかドキドキ……します……」

のどかはそう言っていたがその後、ネギも同じような事が起きた。

「これがパートナーとの『仮契約』を結ぶための魔法陣っス」

カモがそう説明し、ネギは仮契約について聞くと、カモが契約と『魔法使いの従者』の関係を説明する。

仮契約とは、本契約のできない魔法使いが行う契約で、本契約に比べると活動時間に制限がつくが何人でも契約できるようになっている。

魔法使いの従者の説明は割合させていただきます。

そしてカモがネギに一番簡単な方法であるキスを急かせるがネギは、

「だ、だめだよ！ それに宮崎さんだってこんな騙したみたいな格好で……」

そう言つて正論を言つたが、

「キ、キスですかー……？」

「わ、私も初めてですけど……ネギ先生がそう言うなら……」

なんと、本人が了承してしまったのである。

「そ、それに……私も何だか胸がドキドキしてー……」

のどかはそう言つと、顔をネギに近づけ、口を少し開けた。

「えっ……ええ……っ！？」

のどかの突然の行動に狼狽するネギ。

それを後押しするカモ。

それにうろたえているネギだが、のどかの方から動き、キスまでもう少しの距離に近づいて……

「よ、よっしゃー！ 行け……兄貴！！ ほらブチューー！

これで俺っちも晴れて無罪放免……！」

そう言つて日本とイギリスの国旗のついた旗を振り回しているカモ。その後ろから、

「コラ、このエロオコジヨ」

「！？」

明日菜がカモを上から取り押さえ、そのせいか魔法陣も消えた。

「アッアスナさん！？ これは、あのそのっ……」

明日菜の突然の登場にうろたえているネギだったが、

「ああっ宮崎さん」

のどかが気絶したためそっちの対処に移った。

その後、明日菜からネギの姉であるネカネからの手紙の内容と、カモが来た理由を言った。・・・その内容は下着ドロ二千枚と言う2000の技を持つ男に比べると果てしなくしょうもない理由で捕まり、そこから脱走、立派な魔法使い候補生の使い魔になって追っ手から逃れようとしたということだった。

その後カモから、妹のために盗んだと言いつけた後、ネギ達の元を離れようとするが、その話にネギがカモも苦労していたんだと思ったのかその行動を止め、月給5000円でペットとして雇うということ、この騒動は解決した。

美琴SIDE

ネギとカモが改めて信賴関係を築いてから数時間後、美琴は刹那と龍宮と共に深夜の住宅街を歩いていた。

「・・・・・・・・暇ね」

「あの・・・私達は暇な方がよいのでは？」

私の言った事に桜咲さんがもつともな事を言った。

「そりゃそうなんだろうけどさあ」

こつも暇だとねー、まあ・・・本当は私って狙われてるから暇じゃないんだろうけどね・・・・・・・・。

「なに、すぐに暇じゃなくなるだろ・・・」と言った側から来たぞ！ 森の方角からだ！」

そう言った龍宮さんだけど・・・、森の方ってたしかここから目で見える距離じゃないわよ！？」

「とにかく急ぐぞ！」

「わかった！」

美琴がうるたえている間に先行する二人。

「あつ！！ ちよつ！ 私をおいてかないでよ！？」

そう言っただけは先に行つた二人に追いつくべく、夜の街を駆け抜

ける。

追いついてみると既に戦いは始まっていた。

侵入者を確認してみると、おとし話とかでよく見る鬼と、何処かの特撮に出てくる骨が描かれている全身タイツの集団。ぶっちゃっけシ○ッカー戦闘員がいた。

……何故にシヨ○カー？

それらを桜咲さんは長い刀で、龍宮さんは両手の拳銃で、それぞれ相手をしている。

「ちよっ！？ 侵入者って人じゃないの！？」

『イーーーーッ！ イーーーーッ！』

私がそう叫ぶと、私の存在に気付いたかのか、侵入者の内何人（？）かがこっちに来た……ってあんた等かい！！

「まあ、四の五の言ってる場合じゃないわよね……そんなじや、いつちよ行きますか！」

そう言って私は前方で繰り広げられている戦いの場へと走り出した。

美琴SIDE OUT

夜の麻帆良学園の一郭で繰り広げられている戦いは激しさを増していた。

「神鳴流奥義……斬岩剣！！」

ズバンッ！ 『グオオオッ！？』

「そこっ！！」

ザザンッ！ 『グアアッ！』

刹那が長い日本刀を鞘から抜き放ち一閃。鬼の内1体を斬り裂き、

その勢いのままさらに2体の鬼を斬り捨てる。

『なんや嬢ちゃん、神鳴流かいな！　こら呼び出されたかいがあったちゅうもんやな』

そんな刹那に鬼の1体がそう言つて笑っていた。

何故か関西弁だったか……。『ほんなら、ワイも行くとしますかいっ！』

そう叫びながら棍棒を振り上げる鬼だが、

フォン……。ガキン！

『な、なんやとっ！？』

「たあああ！」

ズバババンツ！

『ゲウオアアアッ！？　ワイここだけかいな~~~~』

刹那に得物を両断され、そのまま斬り倒された。

そして、別の所では……、

ドガガガガンツ！

『ぬおおおっ！　っ、強い』

龍宮が両手の拳銃で次々と鬼を撃ち抜いていたが、弾切れになったのか、マガジンを抜いた。

『今だ！　弾切れならどうしようも出来まい！』

そう言つて接近する鬼だったが、

フォン　カシャン　『な、なに！？』

どういった神業を使ったのか、銃を持ちながらマガジンの中に放り投げ、そのまま同時に装填し、

ドガガガガンツ！

再び接近してきた鬼たちを撃ち抜いていった。

「ふっ、私をあまり舐めないことだな」

そう言っただけで笑む龍宮だった。

そして、追いついた美琴はというと……、

「はあああっ！　ちえいさーっ！」

ドゴンッ！　『イイーッ！？』

ヒュン……ドォゴン！

『イイーッ！！？』

回転キックを戦闘員の内1人(?)に当て、その戦闘員はそのまま他の戦闘員を巻き込みながら吹っ飛ばされるが、

『イイーッ！　イイーッ！』

再び他の戦闘員が突撃してくる。

「つかなんで私だけあんた達なのよッ！　だあもう！　うざっ
たい！！」

そう言った美琴は電撃を周辺に撒き散らした。

バリバリバリッ！

『イイイイイイイッッ！？』

痺れている声もそんな感じだったが、周辺にいた戦闘員はその場に崩れ落ちていった。

ただし……、

『イイーッ！！』

さっきよりさらに数を増した戦闘員達が襲ってきた。

「ちよつ！　どんだけいんのよっ！？」

そう叫ぶ美琴だったが、戦闘員はさらに数を増していき、美琴に襲い掛かる。

「…………上等じゃない。　そっちがその気なら全員叩きのめしてやるわよっ！！」

ブウワアアアン！

『イ、イーーーーー！？』

美琴はそう言つと、砂鉄を大量に発生させる。さすがの戦闘員もコレには驚いたようだ。

「砂鉄！？　あれだけの量を集めてどうするんだ？」

発生した砂鉄に刹那がそう考えていると、

「くらえエエエツ！」

『イーーーーーッッッ！！』

砂鉄がまるで大量発生した蝗の如く、次々と戦闘員を飲み込んでいった。（ただし、木の何本か巻沿いで切り株と丸太にしていたが）

「す、すごい」

「なるほど、あれが超能力か……まさかあれだけの砂鉄を難なく操れるとはな」

美琴の力に各々にそう述べている2人だったが、その間にも敵を倒しているのだから流石としか言い様がない。

それから数分と立たないうちに辺りにいた敵は全滅していた。

「んん」。　結構早く終わったわね」

そう言つて手を伸ばしている美琴。

「そうですね」

そう答える刹那だったが、

「いや…………どうやらまだの様だ」

「…………へ？　どう言つこと？」

そう聞く美琴だったが、

『その嬢ちゃんの言つ通りや』

「！！！」

その声を聞いた美琴と刹那が、聞こえた方を向くと、そこにはまだ大量の鬼がいた。……さすがにシヨツ。ー戦闘員はいない。
『これだけの数を相手に消耗してる嬢ちゃんらで防ぎきれるかな？』

「くつ、増援か！」

「どうもここが本命だったらしい……どうする？　こちらも援軍を待つか？」

そう言って臨戦態勢をとる2人に、

「……二人とも、少しだけ時間稼ぎしてくんない。で
きるだけ一直線上に」

美琴がそう言った。

「！！　なにか考えでも有るんですか！？」

刹那がそう聞くと美琴が頷く。

「しかし、無茶な注文をするな……貸し一つだ」

「わかりました」

『作戦会議は終わりか？　ならば……そろそろ始めさせてもらおう！』

そう言って敵は分散しながら美琴達へ向かって来るが、

「はあああ、神鳴流奥義、雷鳴剣」

バリイ！

「逃がさん」

ドガガガガンツ！

『ぬがあああつー！』

刹那と龍宮が各々の攻撃でそれらを美琴の言った様な一直線上に

する。

そして、美琴は制服からゲーセンのコインを一枚取り出し、ピンツと指で空中に投げ、弾いた手に電気を纏わせながら構えを取った。

・・・そして、

「いつけえエエエエエッ!!」

人差し指の所まで落下してきたコインを敵のいる方に飛ばした。

ドゴーーーーーッ!!

「ゲウオオオオオオオオッ!!?」

飛ばされたコインはまるでオレンジ色のゴク太いレーザー光線のようになり、音よりも速いその光は、一直線上に駆け抜けていき、その線上にいた敵を薙ぎ払って行った。

この技こそ、美琴が学園都市にて、通称『超電磁砲』と言う名で呼ばれる由縁となった技、読んで字の如く『超電磁砲』である。

実際のレールガンは超強力な電磁石を使い、弾丸を撃ち出す兵器であるが、彼女はそれを自身の能力で人差し指と親指の間に強力な電磁場を発生させ、撃ち出す技であり、彼女が使える技の中で一番強力な攻撃である。

「なッ!? なんちゅう威力や!! 気も魔力も使ってへんちゅうのに」

「せやけど、さすがに全滅まではいかせへんで!!」

美琴が放った超電磁砲から逃れた鬼がそう言ったが、

「悪いが・・・これで終わりだ」

ドガガガガン!

「はああッ! 神鳴流奥義・・・百烈桜華斬!!!!」
ズガガガガガン!

『又ギヤアアアアアアアッツッ!!』

刹那と龍宮がそれぞれ残った敵を打ち倒した。

「……………どうやらこれで本当に終わりのようですな」

「ああ……しかし『超電磁銃』か。私の知っているそれとは比べ物にならない威力だ」

「あはは、まあ私の場合『銃』じゃなくて『砲』だけだね」

「いや、どっちもレールガンって言うてますからわかりませをよそれ」

ようやく終わったのか戦闘態勢を解く3人。

「それにしても……侵入者ってあんなにあるもんなの？」

「まあ、たまにだな」

「その大体が、式神として召喚されている場合が多いので、術者を倒せば終わります」

「先程の奴等も式神だったようですし、誰かが術者を倒したみたいですな」

「式神って……なに？」

オカルト
基本魔術サイドなどの話に疎い美琴がそう聞いてくる。

「それは戻りながら刹那に聞くことだな」

「待て、龍宮。私が教えるのか!？」

龍宮の言った事に刹那がそう言い返すが、

「ふ、お前の方が詳しいだろ？」

あつさり言い返された。

「うつ!!…………それはそうですけど……」

そう言った結果、結局刹那が折れ、寮に戻りながら美琴に式神と気について教えたが……、

「キヤア、何これ可愛い……」

「あわわあ……ッ!? 本体助けて……っ!」

物の試しに刹那が召喚した自身の分身……『ちびせつな』に美琴が反応し凄いい勢いで抱き締めていたが、力が入りすぎているのか

凄く苦しそうなちびせつな。

「あの・・・ちびせつなが苦しそうなのでその辺で」

刹那がそう言々と美琴は渋々ちびせつなを解放した。

「苦しかった」

そう言つて刹那に飛びつくちびせつな・・・別に怖かったわけではないようである。

「あ、あはは・・・ご、ごめんね」

そう言つてちびせつなに謝る美琴。

「ところで桜咲さん。さっきの話に出てた氣つて私も使えるのよね」

そう刹那に聞く美琴。

「確かに出来ない事もないですが・・・氣の力というのは扱うために長年の修業を有しますので、早々早くには・・・」

「そ、そうなんだ・・・でも出来ないわけじゃないのよね？」

「まあ、確かにそうですが」

「だったらやるわよ。この能力（力）だって自分の力で手に入れたのよ・・・だから桜咲さん・・・私に氣の使い方を教えて！」

美琴はそう言つて刹那に頼み込んだ。

「み、御坂さんがそこまで言うのなら・・・ですけど、私もまだ修行中の身ですし、私自身は神鳴流が主流ですから、それ程多くは教えれません」

「・・・それでも良いなら引き受けます」

刹那はそれに対し、美琴にそう言った。

「・・・ありがとう。それから私の事、これから名前で呼んでくれない？ 私も桜咲さんの事、名前で呼ぶから」

「私は構いません」

刹那は美琴の言つた事に少し笑いながらそう返した。

「それじゃあ、明日からお願いね刹那」

「わかりました。こちらこそ美琴さん」

2人はそう言いながら寮へと向かっていった。

「熱血！！ 武田道場！！」

御坂妹「それではこれより熱血 武田道場を行いますつとミサカは代理進行を行います」

佐助「えゝ、旦那やお館様、作者は？ ．．．って方もいるだろうけど．．．実は．．．」

佐助が何か言おうとする前に、チュドオーンッ！！と言う爆音が鳴り響いた。

爆音のした方を見ると、

信玄「ぬうおおおッ！！」

謙信「はあああッ！！」

ガガガキン！ ガキン！ ガキン！ ガキン！

お館様事武田信玄と、軍神と呼ばれている信玄の永遠の宿敵『神速聖将』上杉謙信が激しくぶつかり合っていた。

ガキン！ ギギギギッ！

謙信「また、うでをあげましたね．．．かいのとら」

信玄「お主ものお、軍神よ」

幾合かの鏖迫り合いをしている中、そんな会話をする二人．．．すると、

チュッドオオオオオーンッ！！

信玄と謙信の衝突音よりさらに大きい爆発音が聞こえてきた。

謙信「いまのは・・・どくがんりゅうとかいのわこの」

信玄「ふふふ、あ奴め、宿敵との戦いで猛っているようじゃのう」
そうして、距離をとった二人は、

謙信「では、わたくしたちも」

そう言つて長刀にて居合の構えをする謙信と、

信玄「うむ。悔いの残らぬよう戦おうぞ!!」　そう言つて斧状の軍配を構えなおした信玄は、再び激突する。

一方違つ所では、真田幸村と独眼竜と呼ばれている『奥州筆頭』伊達政宗が凌ぎを削っていた。

幸村「うおおおおッ!!　烈火ア!!」

ブォン!

ガガガガッ!!

幸村は連続突きを繰り出すが、政宗はそれを時に避け、時に刀で捌き、

政宗「DEATH FANG!!」

お返しとばかりに政宗が三本の刀で斬り上げる。

幸村「ぬうおッ!?　まだあまだあ!!　大車りいいいん!!」
その攻撃を受け止めた幸村だが、空中に浮き上がってしまうが、そのまま回転し、槍に炎を纏わせ、政宗へと向かう。

政宗「MAGNUM STEP!!」

それに対し、政宗は刀に電気を纏わせ、幸村目掛けて突進していった。

チュウドオオオオオーーンッ!!

二人が激突し、再び爆音が鳴り響く。

政宗「HA!　腕を上げたんじゃないか?　真田幸村」

幸村「貴殿こそ!」

「この幸村、燃える心を押さえきれぬ!!」

政宗「上等！ だったらこのPartyをもっと楽しもうぜ!!」

幸村「伊達政宗えええええッッ!!」

政宗「真田幸村ああああッッ!!」

そして、奥州の独眼竜と甲斐の若虎は、己が宿敵に打ち勝とうと
激突する。

佐助「つな感じで宿敵同士やり合ってるって訳」

やれやれと言った感じで佐助が説明した。

美琴「な、なんかすごい事になってるわね・・・」↑（弟子入りに
ついて文句を言おうと来た美琴）

御坂妹「ちなみに何故、こうなってるかというのとミサカは説明
します」

佐助「実はさあ・・・この前やった武田漢祭りの時に、軍神と独眼
竜を呼んだわいいものの、結局暇になったから、宿敵同士と言う事
もあって・・・」

御坂妹「ああしてやり合ってると言う事ですってミサカは説明しま
す」

「ちなみに作者は片倉小十郎に鍛えてもらってますってミサカは
追加報告をします」

佐助「にしてもさあー、いくら増築したからってああ暴れられると
この道場吹っ飛んじまいそうだぜ」

御坂妹「とりあえず、この道場の増築の際に使用されたと思われる
設計図を発見しましたってミサカは報告します」

佐助「んー、どれどれ」

そう言って設計図を見る三人。・・・すると、

『な、なんじゃあこりゃあーッッ!!ノってミサカは驚愕しま
す』

佐助「た、建物に使われてる素材に・・・」

美琴「なんで超合金ニューZαが使われてるのよ!?!」

御坂妹「まさか光子力エネルギーが使われているとはっとミサカはおののきます」

ちなみに、増築したため、現在の道場は凄く大きくなっているだけでなく、建物に超合金ニューZαが使用されています。

佐助「あつ！　なんで増築したかは、銀風さんが書いてる『混沌学院』の作者の感想を読めばわかるからね」

御坂妹「さりげなく他作品の宣伝をしましたねっとミサカはツッコミを入れつつ、お姉様は文句を言いに来たのではっとミサカは疑問を持ちます」

美琴「いや、あれを見た後じゃあねえ……」

そう言つて美琴が見ているのは、未だに戦闘を続けている四人と、修行をしている作者と教えている小十郎だった。

御坂妹「確かに」とミサカは納得しつつ、これで今回の武田道場は終了です」とミサカは告げます」

佐助「そんじゃまた次回」

チュウドオオオオオオオー！ンツツツ！！！！

最後に一際大きい爆音が聞こえた。

第六章（後書き）

感想、指摘、アドバイス等、お待ちしております。

第七章（前書き）

「前回のあらすじ……」

さて皆さん。

力毛君の目的は脱走による追っ手から逃れることでした。

のどかとネギを仮契約させようとする力毛君でしたが、それは明日菜によって阻止されましたが、結果的に力毛君は追っ手から逃れることが出来ました。

そんな中、御坂美琴はというと、夜の見回りに参加してでの初戦闘を行い、その後、刹那から気の扱い方を教えてもらえることになりました。

果たして、彼女は気を扱える用になるのでしょうか？

それは、本編で確認してください。

さて！ 今回は、エヴァンジェリンの従者茶々丸とネギ先生の対決！！

果たしてネギは茶々丸に勝つことが出来るのでしょうか！？

それでは！！

マギステル・ファイト！ レディィィ・ゴオオオ！！

謙信「びしゃもんでんのごごは、わたくしにあり！！」
美琴「そ、そうですか……」

第七章

『第七章 修業と発狂とVS茶々丸』

早朝、麻帆良学園のとある場所。・・・そこに御坂美琴と桜咲刹那がいた。

「ではまず美琴さんには、気を感じてもらいます」

「感じてもらうってどうやってよ？ 気合でも入れるの？」

刹那の言った事に対しそう聞く美琴。

「それもあながち間違っていないですね」

「はいッ！？」 美琴は刹那の言った事が信じられないと言った感じだったが、そんな美琴に、

「そもそも気とは、人体に秘められている生命エネルギーであり、自然と体得できるものであるため、一般の人でも使える人もいます」

「ですが・・・それでもやはり、厳しい修練をしないことには体得はできません。そこで、美琴さんには気を感じてもらう必要があるんです」

刹那がそう説明する。

「へー、・・・なるほど」

そう納得する美琴。

「では、私の動きに合わせてください」

「わかったわ、えーと、・・・こうね」

刹那がそう言って両足を半歩開き、目を閉じて肩の力を抜く。それに合わせて美琴も同じようにした。

「最初はこうして自然の流れを感じるように、自身の気を感じるんです」

「・・・・・・」

そうすると、刹那の周りにうつすらと光る何かが覆う。美琴も少ししてから、刹那ほどではないが、同じようにうつすらと光る何か

が覆われる。

「で、できた・・・」

美琴がそう思うと、プスンといった音と共に光は消えた。

「えっ！？　なんで!？」

そう驚く美琴に、

「さすがにいきなりできる様な物ではありませんから」

「むしろ、美琴さんは凄い方なんですよ。　いきなり気を感じれる人なんて滅多にいませんから」

刹那がそう言っただけを説明する。

「そ、そうなんだ・・・まあ、でも私の場合、能力使う時も集中してるから、そのおかげかもね」

「それでも充分凄いですって・・・では授業に遅れない程度に練習してみましょう」

それからしばらくの間、美琴は気を扱い練習をしていたが、時刻は今から行かないと授業に遅れるほどになっていた。

「それでは、今日の特訓はこれまでという事で」

「あれ？　授業後もやるんじゃない・・・」

「そうしたいんですけど、私も用事がありますから」

美琴の問いにそう答える刹那。

「そう、わかったわ・・・それじゃあ早く行きましょ刹那」

「そうですね。・・・ああ、それから、気を感じる事はどこでもできますから暇な時に練習しておいた方が良いでしょう。一応、気を出せるようになってますけど・・・まだ不安定ですから」

「それはわかってるけど、ありがとう刹那」

二人はそう話しながら女子中等部へ向かっていった。

「（・・・そう言えば、ここに来てからしばらく経つけど、黒子大丈夫かしら？　・・・まあ、初春さんや佐天さんもいるから大丈夫よね・・・たぶん）」

美琴も少し余裕が出来ていたのか、走りながら後輩である白井黒子の事を考えていた。

ん。 ホントどこ行っちゃったんだろうね」

「そうですね。 こっちでも調べてるんですけど・・・手掛かりが無いんですよ」

そう言っている二人の表情もどこか暗い。

「そつか・・・でも、御坂さんなら大丈夫だよきつと」

「それもそうですね。 なんとってあの人は7人しかいないレベ
ル5なんですから」

「ですから、私達も出来る事をやりましょう佐天さん」

「うん、そうだね。 よし！ 暗い雰囲気終わり！！ がんばつ
ていこーっ！」

暗い気持ちを振り切り、そう言いながらも美琴の無事を祈っている二人に対し、

「ううお姉様あああああッツッ！！！！ 黒子をお見捨てにならないでくださいましいイイイイイッッ！！！！」

「他のお人の者にならずに、私だけの・・・私だけのお姉様でいてくださいですのおおおッツッ！！！！ そしてお姉様を誑かすあの類人猿に死の鉄槌をおおおッツッ！！」

そう言って発狂している黒子は端から見ても全然大丈夫ではなかった。

「・・・・御坂さん。 帰ってきたら大変だろうな」

「・・・・そうですね」

そんな黒子に呆れつつ、美琴の心配（貞操の意味で）をする二人であつた。

「ツツ！！・・・な、なに？ 今の悪寒！？（く、黒子じゃないでしょうね・・・）」

「どうしたんですか？ 美琴さん？」

そんな悪寒を感じている美琴だった。

・・・・ちなみに、某不幸少年も似たような悪寒を感じていた。

ネギSIDE

授業も終わって現在、部活に入っている人以外は特に暇な時間帯。茶々丸は茶道部での活動を終え、現在帰宅途中であった。エヴァはと言うと、用事が出来たため、現在、茶々丸は一人で帰っている。

それとある草むらの中でネギと明日菜、それにカモの二人と一匹が見ていた。

ううゝゝゝ朝の一件から勢いで茶々丸を倒す事になっちゃったけどゝゝ先生として良いのかなゝゝ。でもやらないとこのままじゃ教師失格になっちゃうしゝゝ、どしよゝゝゝ。

「茶々丸って方が一人になった！ チャンスだぜ兄貴！！ 一気にボコツちまおう！」

「ううえッ！？ だ、だめー！ 人目につくとマズいよゝゝゝも少し待ってー」

「なゝゝゝ何か辻斬りみたいで嫌ねゝゝゝ。しかもクラスメートだし」

ネギがそんな事を考えている中、カモが襲撃しようと煽ったため、さらに混乱することとなり、明日菜も少し嫌そうにしていた。

ゝゝゝゝちなみに、明日菜とはおでこではあるが、一応仮契約をしている。

「でもまあゝゝゝあんたやまきちゃん達を襲った悪い奴らなんだし何とかしなくちゃゝゝゝゝゝん？」

「うえーん うえーん あたしのフーセン あたしのフーセン」

明日菜がそう言っていると、泣いている小さな女の子がいた。茶々丸が上を向くと木に引っかかっている風船があった。

「ゝゝゝゝゝゝ」

バシャッ！ 「！！」 びくうっ

するとどうだろう・・・茶々丸の背中からブースターのような物、
というかブースターが出現し、

トトトトトトトト・・・

そのまま上昇し、木に頭をぶつけながら女の子の風船を掴み、

「わーーーーー」

「お姉ちゃんありがとー」

女の子に風船を渡してあげた。

「・・・・・・・・」

その様子をポツカーンとして見ていたネギ達。

「飛んだ・・・？　そ、そー言えば茶々丸さんってどんな人な
んです？」

「え」と・・・あれ？　あんまり気にした事なかったな・・・」

「いや、だからロボだろ？　さすが日本だよなー・・・ロボが学
校通ってるだなんてよう」

啞然としている二人にカモがそう答えた。

「じゃ、じゃあ人間じゃないの！？　茶々丸さんって！　・・・

・へ、変な耳飾りだと思ってたけど・・・」

「ええええええ！？」

「うおおい！！　見りゃわかんたろお！？」

「い、いやーホラ私・・・メカって苦手だし・・・」

「僕も実は機械は・・・」

「そーゆー問題じゃねえよお！？」

茶々丸がロボットだと言う事に気付いていなかった二人にそうツ
ツコンだカモだった。

その後もネギ達は茶々丸を尾行していたが・・・結果は、困って
いるお婆さんを助けたり、街の人気者だったり、川に落ちた子猫を
助けたり、人目のつかない所にいた野良猫達に、エサをあたえたり
していた。

「・・・いい人だ」 「・・・」

それらの行動に感動しているネギと明日菜。

「ちょっ・・・待ってください二人とも！！ ネギの兄貴は命を狙われたんでしょ！ しっかりしてくださいよう！！」

「と、とにかく。 人目がない今がチャンスっす！ 心を鬼にして、一丁ボカーっとお願ひします！」

「で、でも・・・」

「・・・しょーがないわねー」

そう言って渋々了承した二人。・・・そして二人は、茶々丸へと向かった。

・・・同時刻、暇になった美琴はと言うと、コンビニで雑誌を立ち読みした後、学園をふらついていたが・・・偶然、子猫を見つけた。

「わあ、かわいい」

そう言って手を出す美琴だったが・・・突然何かに反応したかのように猫は逃げてしまった。

「・・・」

しばらくそのままの格好で固まっていた美琴だったが、

「・・・わかってたわよ・・・こうなる事位私だってわかってたわよ・・・」

そう言ってしばらくの間、Orzの格好のまま落ち込む美琴だった・・・。

その後も懸命に犬や猫などの動物に触ろうとする美琴だったが、結果は全滅だったそうなの・・・。

エサを与え終えた茶々丸が片付けをしている途中に何かに気付いたか後ろを向く、そこにはネギと明日菜が申し訳なさそうに立っていた。

「・・・こんにちはネギ先生、神楽坂さん」

「……油断しました……でも、相手はします……」

茶々丸はそう言っただけでゼンマイを外した。

「茶々丸さんあの……僕を狙うのをやめていただけませんか？」

未だに罪悪感があるからか、ネギはそう茶々丸に聞くが、

「……申し訳ありませんネギ先生」

「私にとってマスターの命令は絶対ですので」

茶々丸はそう言っただけでネギの言った事を断った。

「ううっ……仕方ないです……（ア、アスナさん……じ

ゃ、じゃあさつき言っただけで……）」

「（うまく出来るかわかんないわよ）」

「……では茶々丸さん」「……ごめんね」

「はい」

罪悪感を持ったまま構えるネギと明日菜にそう言っただけで臨戦態勢をとる茶々丸。

「神楽坂明日菜さん……いいパートナーを見つけましたね」

茶々丸がそう言うと、ネギも覚悟が決まったのかある呪文を唱えた。

「行きます！！ 契約執行10秒間（シス・メア・パルス、ペル・

デケム・セクンダス）！！」

「ネギの従者『神楽坂 明日菜』（ミニストラ・ネギイ、カグラ

ザカ アスナ）！！！」

ぶわっ 「んっ……」

すると明日菜からそんな声が漏れたかと思うと、一気に茶々丸へと近付いていく。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

明日菜が動いたと同時に、ネギは魔法発動の指導キーを唱えた。

「（何コレ、体が羽根みたいに軽い……これが契約の効果

ってこと！？」

明日菜がそう思いながら茶々丸に接近し、右手で攻撃しようとするが、

パシンッ！

茶々丸がそれを左手で払い、右手で反撃しようとするが・・・、

「えいつ！」　ビッ！

その前に明日菜は左手で追撃をし、茶々丸は反撃を中断し、右手で止めるが、明日菜はそのままデコピンをした。

「！？　はい！　素人とは思えない動き」

茶々丸は明日菜の攻撃に対し、そう評価する。
ぱしっ

「わたたっ！？」

すると、間抜けな声をだしながら明日菜が後方に下がり、茶々丸は離れる際に隙が生まれ、

「光の精霊１１柱・・・集い来たりて・・・」

その隙にネギが呪文を唱えているが、未だに躊躇っている素振りがあつたが、カモの言葉を思い出し、

「ううつ・・・魔法の射手、^{サギタ・マギタ}連弾・光の１１矢^{セリエス・ルーキス}！！」

目をつぶりながら呪文を茶々丸に放った。

「・・・！！」

それに反応する茶々丸だが・・・、

ゴオオッ！！

「追尾型魔法至近弾多数・・・よけません」

自身の状況と目の前に迫り来る攻撃を分析し、避けきれないと判断した茶々丸は、

「すいませんマスター・・・、もし、私が動かなくなったらネ

「このエサを……」

この場にいないエヴァに謝罪と頼み事を言っていた。
すると、それに気付いたネギが……、

「や……やっぱりだめーッ」

「戻れ!!」

そう叫び、先程放った魔法にそう命じた。

ギャ　ギャ　ぐんっ

ドカカカンッ！　「うひゃーっーん!？」

すると、魔法はネギの方に戻っていき、ネギの周辺に集まるかのように激突し、ネギはそれに巻き込まれた。

「!!」　「ネ……ネギ!？」　「ア……兄貴ーッ!

!」

突然のネギの行動に茶々丸は驚き、明日菜と物陰で見ていたカモは叫んでいた。

「キャーッ。　ちよつとネギ大丈夫っー!？」

「ア、兄貴ーッ、何で矢を戻したりしたんだよーッ!？」

そう言っただけ、ネギの心配をする明日菜と、先程の行動について聞こうとするカモだったが、

「きゅっっっ」

当のネギは攻撃の衝撃で完全にのびていた。

「……」

しばらくその様子を見ていた茶々丸だったが、

ドウッ!!　「キャアッ」

ブースターを展開し、そのまま飛んで行ってしまった。

「あ……あ……っ、逃げられちゃった。　兄貴イ、魔法の

盾で緩和できるからって、今のは無茶ッスよお」

「ま……魔法が思ってたより強くて……や……やっぱり

茶々丸さんは僕の生徒だし……ケガさせるわけには」

「ちょ．．．．．アンタ、バカじゃないのーっ！？」 保健室
保健室ーっ」

こうしてネギ&明日菜VS茶々丸の戦いは幕を閉じた。

ズシャ

「．．．．．ネギ先生」

「ネギ・スプリングフィールド．．．」

ロボットである茶々丸の心に、何かを残して．．．。

??? SIDE

先程のネギ達の戦いを、遠くから見ている者が二人いた。片方は顔に刺青をし、白衣を着て、両手にグローブを着けた男と、もう片方は、ローブで体全体を覆っている人物だった。

「あゝあゝあゝああ．．．大奮闘かと思つてたが．．．やっぱ未だガキか」

「にしても驚いたぜ．．．第三位がこっちに来てるとわよ」
刺青の男はそう言つて、双眼鏡を、ネギ達から肩を落として歩いている美琴に向けた。

「これもアンタの計画に入つてた事か？ ええ？ 魔術師さんよ」

男はそう言つて横の人物に聞く。

「フン。 本来なら『幻想殺し』を先に連れて来る予定だったが、計画の中に『超電磁砲』がいるのでそこはたいした問題はない」

魔術師と呼ばれた人物はそう言つて答えた。

この人物こそ、美琴をこの世界に跳ばした張本人であつた。

「ああそうかい．．．んじゃ、テメエの要望聞いてやつてるんだ。 俺の要望も聞いてもらうぜ？」

そう言つて魔術師に聞く刺青の男。

「……あの件か？ 別にかまわん」

そう答える魔術師。

「だが理由は何だ？ 特に意味もなくあの者を呼ばせるなど……
・下手をすれば我等の計画に支障をきたすぞ」

「ああ？ 心配すんなや……俺で片あ付けるからよ。理由はアレだ。借り返してえだけだ」

「アイツにああ、一回ぶつ殺されてるからなく、俺がアイツをブチ殺さねえと気が済まねえんだよ」

魔術師の問いにそう答える男。

「復讐か？ だが、貴様の事だ。他にも理由があるのだろう？
木原数多」

「まあ、そんな所だよ……待つてろよ」アクセラレータ一方通行、今度は俺がテメエをブチ殺して、地獄に送つてやつからなあ」

そう言つて顔を歪ませている男の名は木原数多。

かつて『学園都市』の闇の一つであった非公式工作組織『ハウンドドッグ獵犬部隊』を率いていて、学園都市最強のレベル5一方通行に殺された男である。

「行くぞ。貴様は奴等と合流しろ。我は貴様の要望を果たしてから行く」

「へいへい。わかつてるよ、そこんところしく頼むぜ？」

そう言つたやり取りをした後に、魔術師と木原数多の姿が、突然その場から消えた。

「熱血！！ 武田道場！！」

信玄「これより、第四回熱血！！ 武田道場！！を執り行ふ！！」
剣麻「それでは！ 本日のゲストの紹介を、本日は亀鳥虎龍殿が書かれています『銀魂ライダーディケイド』より、仮面ライダークウガに変身をする御坂美琴殿でござる！！」

ミニ美琴「来てやったわよ」

御坂妹「まさか本当に来るとはつとミサカは驚きます」

美琴「わあっ！？ 小さい頃の私がいる！！」

ミニ美琴「好きでこうなつたんじゃないわよ！！ 早く解毒剤を寄越しなさいよ！！」

劍麻「何故、ゲストの美琴殿が小さくなっているのかは、銀魂ライダーデイケイドの某の感想を読めばわかります」

御坂妹「お断りさせていただきますつとミサカは小さいお姉様の要望を拒否します」

ミニ美琴「へー、そう・・・アンタがそう言うなら！」

そう言つてミニ美琴が構えを取ると、腰にベルトが出現し、

ミニ美琴「変身！！」

そう叫ぶと、ミニ美琴は仮面ライダークウガに変身した・・・ただし、

美琴「ホントに変身した！？」

幸村「おおう！？ 何と面妖な！？」

信玄「うむ。 かし・・・」

ミニクウガ「力ずくで、奪い取る・・・って何で変身しても小さいままなのよおおおっ！？」

御坂妹「ププツつとミサカは笑いを堪えます」

ミニクウガ「アンタわー、今に吠え面かかせてやる！！」

そう言つて御坂妹に突撃するミニクウガ。

御坂妹「さすがに小さいとは言えライダーの攻撃を受ける訳には行きませんつとミサカは冷静に分析しつつ、逃亡をはかります」

ミニクウガ「あっ！？ 逃げるなああああッ！！」

そう言つて逃亡した御坂妹を追いかけに行ったミニクウガ。

美琴「ああ、ちよつと！？ 私あの二人追いかけてくるから」

そう言つて二人を追いかけに行ったこっちの美琴。

幸村「お館様、よろしいのですか！？」

信玄「ハッハッハッ、たまにはこう言うのも有りじゃろっ」

そう言って観戦する事にした信玄と幸村、それに作者。

ミニクウガ「食らえエエエツ!!」

御坂妹「何の!　っとミサ力は盾を使います」

佐助「うげえっ!？」

美琴「さ、佐助さん!?　ああもうっ!　アンタもいい加減大人気ないから、早く解毒剤を渡しなさい!」

御坂妹「お断りしますっ」とミサ力は逃亡しながらそう答えます」

美琴「・・・そう、じゃあしかたないわね・・・」

美琴はそう言つと、強力な電磁波を発生させると、

御坂妹「ミサ深刻な力ミ電波障害サカミのネットワークがサカミサ力断線ミサ緊急力ミサ復旧作業を力ミサ力ぶくぶく」

突然そんな事を言いながら御坂妹は立ち止まると、

ミニクウガ「もらったあアアアアツ!!」

そう叫び、ミニクウガはライダーキックを放った。

御坂妹「グハアッ!？」

その攻撃は見事に命中した。

美琴「アンタもおいたがすぎるからよ」

美琴はそう言つて電磁波を止めた。

御坂妹「ふふっ、所詮量産型ではお姉様に勝てないのですねっとミサ力は呟きます・・・ガクッ」

御坂妹はそう言つて気絶した。

その後解毒剤を飲んだ御坂美琴だったが効果が現れるまで時間がかかるようである。

ミニ美琴「じゃあね、ここの私。　ホントに助かったわ」

美琴「それじゃあね、向こうの私、旅の無事を祈ってるわ」

そう言つて二人の美琴が各々にそう言つと、ミニ美琴は自分の世界に帰っていった。

信玄「それでは、今回はこれまでじゃ!!」

佐助「・・・盾にされた俺様は無視かよ、そりゃあないぜ・・・

トホホ、ガクッ」

空蝉の術を使う間もなく盾にされた佐助はそう言って気絶した。

第七章（後書き）

感想、質問、指摘、アドバイス等、お待ちしております。

御坂妹「ひどい目に合いました」とミサカはまだ痛むお腹を押さえながらそう言います」

第八章（前書き）

「前回のあらすじ……」

さて皆さん。

茶々丸と戦ったネギと明日菜は、ネギの突然の判断で、敗北してしまいました。

……しかし、その戦いを見ている者達がいたのです！！
果たして、彼等の目的はいつたい……、それがわかるのはしばらく先になりますので、お楽しみくだされ。

それでは！！ マギステル・ファイト！！
レディイイ、ゴオオオオ！！

御坂妹「それではお楽しみくださいつとミサカは軽く会釈します」
小美琴「私を元に戻せエエエエエエツツ！！！」

第八章

『第八章 逃走と新たな来訪者』

茶々丸との戦いから翌日、ネギ達は寮にいた。

「兄貴、ヤバイよ！ 何であの茶々丸って口ボに情けをかけたんスか！？」

「昨日あそこで仕留めておけば万事解決！！ こっちの勝ちだったのに」

「とにかく茶々丸^{ヤッ}を逃がしたのはマズイッス！！ 昨日までは奴ら油断してたけど、兄貴にパートナーがいるってのを奴がチクつたら絶対二人がかりで仕返しに来るって！！」

カモはそう言っ、ネギに昨日した事について聞いてから、その後の危険性を懸命に説明していた。

「・・・で、でもカモ君。 やっぱり茶々丸さんは僕の生徒だし・・・」 そう言っ、ネギは昨日の事を説明するが、

「甘い！！」

ネギの言っ、た事に対し、カモはその一言をおもいつきり叫ぶ。

「兄貴は命を狙われてんでしょう！？ 奴ア生徒の前に敵ッスよ敵！！」

カモはそう言っ、て怒りながらも、ネギをさとすようにそう言っ、た。

「ちよつとエロオコジヨ、そこまで言うことないんじゃない」

さすがに言い過ぎだと思っ、た明日菜はカモにそう言っ、た。

「カモッス姐さん！！」

そう言っ、て先程明日菜の言っ、た事を訂正するカモ。・・・しかし、明日菜の言っ、た事は、見事に的を得ている表現であつ、た。

「エヴァンジェリンも茶々丸さんも二年間私のクラスメートだったんだよ？ あんま話した事なかったけど」

「本気で命を狙つたりとかまでするとは思えないんだけどなあ・・・」

二年間同じクラスだったからか、明日菜はそう言ったが、

「甘い！！ 姐さんも甘々っスよ！ 見てください俺っちが昨晚まほネットで調べたんすけど……」

カモは明日菜にそう言うってから、前足を使って、パソコンのキーボードを器用に叩いた。……オコジョがパソコン使っているのはシュールな光景ではあったが。

……すると、

「あのエヴァンジェリンで女、15年前までは魔法界で600万ドルの賞金首ですぜ！？ 確かに女、子供を殺ったって記録はねーが、闇の世界でも恐れられる極悪人さ！！」

カモはそう言うってパソコンの映像を明日菜に見せる。そこにはWANTEDと言う文字の下にエヴァの顔写真とバツ印の入った数字が書かれてあった。

「なんでそんなのがウチのクラスにいるのよ！？」

明日菜がもつともな疑問を言うが、

「そいつはわかんねーけどよ……」

カモもそこまではわかっていなかった。

その後カモと明日菜がこれから興るもしれない事を話し合っていると……

ダッ！ ガラッ 「あ！？」

ネギが突然上着と杖を持って窓を開けると、

「うわああ~~~~ん！」

泣きながらどこかへ行ってしまった。

「ネギーーーーーーッ！？」「兄貴ーーーーーッ！？」

ネギの逃走に明日菜たちは各々に叫び、

「あ、あんたがあんなこと言うから！」

「姐さんだつてーーーーっ！」

明日菜がカモの責と言い、カモは明日菜もと言い合った後、

「と、とにかく追うのよ!」

「合点だ!」

そう言っただけで一人と一匹は、逃げ出したネギを追いかけて行った。

・・・その頃、学園都市では、御坂美琴が消息を断ってから数日が経過していた。

そんな中、学園都市のとあるマンションにて、

「・・・と言う訳でお姉様オリジナルの搜索をアナタにも手伝って貰いたいのですが」とミサカは第一位に搜索協力を要請します」

そう言っているのは瞳と頭のゴーグルを除けば、美琴にそっくりの人物、美琴の体細胞クローン妹達シスターズの一人である御坂10032号、通称、御坂妹である。

「あア!?! いきなり来て、何言っただけか? それ以前に、何で俺が第三位を捜すの手伝わねエといけねエんだ?」

そう言っている男は、学園都市最強の超能力者（レベル5）、第一位一方通行である。現在、彼はとある事情から、能力を使うのに制限時間が設けられているが、それでも強さは変わらず・・・むしろ、厳しい戦いを潜り抜けて来たからか、制限が付く前より戦闘能力が上達していた。

そんな彼は現在、『アンチスキル警備員』に所属している黄泉川愛穂が住んでいるマンションにて、妹達の司令塔である打ち止め（ラストオーダー）と、妹達とは別に生み出された番外個体ミサカワーストと共に居候をしている。・・・後一人いるのだが、今は関係ないので割合させていただく。そして一方通行は、めんどくさそうにそう聞き返していた。

「面白そうだし、ミサカ参加したいな」

そう言っただけで来たのは妹達の悪意的な思考・感情を抽出する番外個体だ。

「テメエ等だけで行って来るんだな。俺は行かねエぞ」
そう言っただけで一方通行は番外個体をあしらう。

「へへ、ミサカ達が不良に襲われちゃうかもよ? それでも良

いのかな？」

笑いながらそんな事を言っている彼女は、美琴にこそ劣るが、それでも大能力者（レベル4）であり、御坂妹も異能力者（レベル2）ではあるが、妹達は、美琴の軍用量産型とも呼ばれており、そんなじよそこの不良（レベル0）など軽く捻れるのだ。

・・・そう、とあるレベル0の男のような妙な力でもない限り。

「テメエ等がんなのにやられるか？　むしろ殺る方だろオナ」

それがわかってからか一方通行はそう言つと、

「では上位個体はつとミサカはさりげなく追求します」

御坂妹からそんな言葉が出てきた。

「あん？」

一方通行は怪訝そうな顔をする中、

「実は先程、同じようにあのクソ上司にも説明したら『じゃあミサカがお姉様を見つけるってしまったミサカはミサカはお姉様探索に乗り出してみたり』と言って飛び出して行きましたよつと、ミサカはあのちっこいののマネをしながら説明します」

そう言つて説明する御坂妹。

「あんの、クソガキイ・・・」

そうつめく一方通行だった。

一応打ち止めも強能力者（レベル3）だが、容姿も性格も幼い彼女が一人で出歩くのは、いささか危険である。

実際、彼女は二度程そう言つた事に遭遇している。

「しょうがねエ、クソガキ捜すついでに、第三位でも捜してやるかア」

そう言つて杖を付きながら玄関へと向かう一方通行。今の彼は、能力を使わない場合、歩く際にも杖を使わなければいけない体になっている。

「そう言いつつも捜そうとするのですねつとミサカは素直ではない一方通行に対し、そう述べます」

「ホント、ミサカもそう思う」

「るッせエぞオ、テメエらア！！ とツとと捜し行くぞ！」

そうして美琴（後打ち止め）を捜しに行った三人だったが、結局美琴は見つからず、・・・その代わりに、

「痛い痛い痛い！！ ってミサカはミサカは貴方のそれやめてほしいって痛ああいゝゝッ！！」

美琴を小さくしてアホ毛を付けた容姿の少女。妹達の司令塔である打ち止めはしっかりと見つけていた。現在は一方通行がお仕置きとして両手で頭をグリグリしている。

「しかし、これだけ捜して上位個体しか見つからないとはミサカは思案します」

「それは良いけど、アレ、止めなくて良いの？」

番外個体はそう言って一方通行の方に目を向ける。

「見てないで助けてーってミサカはミサカは救助要請を発令してみたり！！」

打ち止めや番外個体からそう言った言葉を聞き、しばらく考える素振りをする御坂妹だったが、

「放って置きましょうとミサカは要請を無視します」

数分も経たず、冷静にそう言った。

「あ、そう。 まあミサカもどうでも良いけどねー」

番外個体も助ける気はないようである。

「下位個体のまさかの裏切り！？ ってミサカはミサカはまさかの事態に仰天してみたり！！」

・・・それから数分後、一応打ち止めはお仕置きから解放された。

「ううゝ、頭がジンジンするゝってミサカはミサカの目に涙を浮かべてみる」

打ち止めはそう言って頭を押さえている。

「元はと言やア、テメエが勝手に飛び出したからだろオが」

「ミサカは一生懸命お姉様を捜していたのにこの仕打ちはあんまりだ！！ ってミサカはミサカは憤慨してみたり」

一方通行がそう言うのと、打ち止めはそう騒ぐが、一方通行はそれを全く見ていなかった。

「（にしても、こんだけ学園都市中捜して見つからねエってこたア、学園都市にはいねエのか？ 何がどうなってるやがんだア？）」「一方通行が考え事をしている中、打ち止めが「ねえねえ、聞いているの？ ってミサカはミサカは貴方の服を引っ張りながら聞いている」と言いながら一方通行の服を引っ張っていた。

・・・そんな中、

「知りたいか？ 一方通行」

突然そんな声が聞こえ、一方通行は「あん？」と言って声のした方を向くと、そこには黒いローブを着た人物が目の前に立っていた。

「なんだ、テメエ？」

「まあ、じきに貴様の疑問は晴れるだろうがな・・・」

そう言うや何か呟くと、一方通行達の中心から黒い渦が発生した。「なッ！？ ンなるオ！」

一方通行は首筋のチョーカーに触れようとするが、その前に黒い渦に吞まれ、渦が収まると、一方通行達は目の前から消えた。

「・・・あの男の要望は果たした。 我も奴等と落ち合うとするか」

そう言うのと、黒いローブの人物の周辺に突風が吹き荒れる。・・・

・それが止むと、先程の人物は何処にもいなかった。

美琴 SIDE

一方、一方通行達が捜していた美琴はと言うと、刹那と共に気の練習をしていた。

「気の扱い方がだいぶ良くなってますね」

刹那は、全身が薄く光っている美琴を見ながらそう言うが、

「そうは言っても、刹那に比べたらまだまだよ」

私は自分より大きな光に包まれている刹那にそう言った。

「それでも、美琴さんは凄いですよ。まだ教えてから一日しか経ってないのに、そこまで上達しているんですから」

「あ、あははは・・・ま、まあね！」

まあ、昨日あんだけやったからね。

美琴の言う昨日とは、道端にいる猫や犬とかの動物に触ろうとしたが・・・結局自身の能力によって逃げられ、寮に戻ろうとしていたが結局戻らずに、ほとんどやけっぱちで気の練習を行っていたのだ。

「って言っても・・・まだ体を覆う位しか出来ないし、それにしたって刹那のに比べたら小さいじゃない」

「まあまだ始めたばかりですから」

いやまあ・・・そうなんだけどさ・・・。

二人がそのような会話をしていると、

キュウウウウンッ！

二人の近くで黒い渦が突如発生し、周りに突風が吹き荒れる。

「なによこの風・・・！！ あれって!？」

私が追っかけてた奴が出した黒い渦！！

「美琴さんの時と同じ現象!？」

まさか私みたいに誰か跳ばされてきたんじゃ!？

私がそう思っていると、渦と突風が止み、刹那と一緒にその中心を見たら・・・、

「なっ!？ あ、一方通行!!？」

学園都市最強のレベル5、一方通行がその場に立っていた。

「あア?・・・!! テメエ第3n「ああゝお姉様だゝってミサカはミサカは目的の人物を発見したから、すぐさま突貫してみたり!!」」

そう言いながらこっちに向かってくるのは、私を小さくして、アホ毛を付けた様な容姿の少女、打ち止めだった。

「ら、打ち止め！？ アンタもいたのぐふうおあがッ！？」

打ち止めは飛び付く積もりだった様だが・・・ちょうど美琴の鳩尾辺りに頭が命中し、美琴はスカートの中丸出しのまま地面に倒れた。

「美琴さん！？ だ、大丈夫ですか！？」

「お姉様生きてるゝってミサカはミサカは揺すってみる」

「いえ、残念ながらお姉様はたった今、社会的に死にましたとミサカは報告します」

刹那は倒された美琴の心配を、その張本人である打ち止めが美琴を揺すっている中、さり気なくそう言っているのは美琴とほぼ同じ容姿である御坂妹だった。

「な・・・なにすんのよいきなりッ！！」

そう言いながら勢いよく起き上がる私だけど・・・まだ鳩尾辺りが物凄く痛い。

「おお！ お姉様生きてたーってミサカはミサカは大はしゃぎ！

」

「いえ、どうやらまだ死んでるようですとミサカは捲り上がっているスカートを指します」

「ッ！！！！？」

美琴は顔を赤くしながら急いでスカートを押さえるが、後の祭りではあった。周りに美琴達意外いなかったのは不幸中の幸いではあったが。

「・・・ちなみに、スカートの下は短パンだった。

「相変わらず短パンですかとミサカはお姉様の進歩の無さに対し、そう述べます」

「う、うるさい！ 良いでしょ、私の勝手なんだから！！ つか、何でいるのよ！？」

「先程からいいましたが？ とミサカはお姉様の問いにそう答え

ます」

そう言い争っている美琴と御坂妹と、それを見ている打ち止めだったが、

「……つうかよオ、テメエ等状況わかってンのか？」 それらを呆れながら見ていた一方通行と、

「それより、ミサカはここがどこか知りたいんだけどな？」

先程から周りを見回していた番外个体がそう言い、

「こ、これはいつたい……」

刹那は、あまりの状況に啞然としていた。

美琴 SIDE OUT

……それからしばらくして、現在学園長室。

そこで一方通行達は、現在の状況を把握していた。

「なるほどのお、つまりお主達は美琴ちゃんと同じ所から来たと言う事じゃな？」

「あア、そうなるらしいな」

学園長の問いにそつけなく答える一方通行。

「はい。現在、世界中に散らばっている妹達からの連絡が取れない事が物的証拠になっていますとミサカは報告します」

それを補足するように御坂妹が答える。

「そ、そうなのかね。それでのお、美琴ちゃん……この美琴ちゃんそっくりな子達は美琴ちゃんの親戚かなにかかね？」

そう言って学園長は御坂妹と番外个体、そして現在学園長の頭に乗っている打ち止めの事を聞いた。

「ねえねえ、この頭の中はどうなってるの？ ってミサカはミサカは叩きながら聞いてみる」

「あんま、叩かないでくれんかのお」

「え」と、それは……」

何処か言い難そうな美琴だったが、

「まあ、複雑な事情のようじゃし、美琴ちゃんから話すまで待つ事にするかの」

学園長が美琴の様子を見てそう言った。

「……ありがとうございます」

「ずいぶんとぬりイ事で」

一方通行からそんな事を言われたが、

「フオフオフオ。まあそう言うでない。……ところ

でお主達、学校に通わんかね？」

学園長は特に気にする事なくそう聞くが、

「俺にンなもんはいらねエよ」

「ミサカもいくきな」

「はいはい！ ミサカはい「必要ねエ」うわーい！ ミサカの意見が即答速攻大否定！！ ってミサカはミサカはやけになっ
てみたり」

「これこれ、頭の上で暴れるでない」

そう叫んで暴れる打ち止めをやりわりと注意する学園長。

「ミサカはまだ保留と言うことでつとミサカはさり気なく答えま
す」

その後の話し合いの結果、一方通行と番外個体は学校に入らず、
夜の見回りには参加する事となった。

く熱血！！ 武田道場！！く

信玄「これより、第五回熱血！！ 武田道場！！を執り行うつ！！」
剣麻「今回は、某達の鍛錬と、最後にある発表があります！！」
信玄「幸村！！ 剣麻！！ 見事、修練を乗り越え、漢を研ぐのじ
やッ！！！！」

幸村「ぬっおおおおおッッ！！ 果たしてみせまするぞオオオオオオッッ！！！」

剣麻「うおおおおおッッ！！ お館様ッ！！ 本日の修練はいつた
い！！？」

信玄「本日は軽く熱き漢達の荒波に揉まれる武田式百人組み手じゃ
！！！」

信玄がそう叫ぶと、道場に合計二百人の武装した漢達（武田軍の
熱き漢達）が幸村と作者に襲いかかって来た。

幸村「皆様方！！ お相手仕る！！！」

剣麻「いざ！ 参ろうぞッ！！」

そうして、幸村と作者の修練が始まった。

佐助「あゝ、旦那達の代わりに俺様と」

御坂妹「ミサカが説明しますっ」とミサカは本編に出れた喜びを胸に
抱きながら、司会をします

小美琴「ちよっと！！ いい加減私を元に戻さないよ！！」

御坂妹「では発表しますっ」とミサカはちっこいお姉様を無視して進
行を行います

小美琴「ふざけんなアアアアアッッ！！」

小美琴の叫びが道場内に木霊する。

佐助「その内容とはズバリ、御坂妹、打ち止め、番外個体の本編内
での名前募集」

御坂妹「ミサカ達のこの作品においての名前を決めるので、読者の
皆さんからも募集する事になりましたっ」とミサカは説明します

佐助「この三人にこの名前をつて方は遠慮なく感想と一緒に投稿し
てくれ」

御坂妹「ちなみに期限は、だいたい次回の話が投稿されるまでです
っ」とミサカはさらに説明します

佐助「んじゃあ本日はここまで！」

御坂妹「ご応募、お待ちしておりますっ」とミサカは最後に閉めます

小美琴の叫びを軽く無視して終わらせた二人。

・・・ちなみに、本日の修練である百人組み手は、幸村は見事達成したが、作者は最初の百人はクリアしたが、お館様のかけ声で復活（その際、二人にも気合が入ったが）後の百人組み手で五十人倒せたが、そこで力尽きたのであった。

剣麻「そ、某・・・まだ・・・まだ、未熟・・・であった・・・ガクッ」

第八章（後書き）

感想、指摘、アドバイス、募集等お待ちしております！！

第九章（前書き）

く 前回のあらすじ・・・く

ちて皆さん。

エヴァンジェリンの事を詳しく知ったネギ。彼はその事に対し、泣きながら逃げてしまいました。

「……果たしてネギは立ち直ることが出来るのでしょうか！？」

一方、美琴の方でも驚くべき事が起きました。何と彼女の目の前に黒い渦が発生し、学園都市にいた一方通行達と会合したのです。

これは偶然なのでしょうか？ 必然なのでしょうか！？

「……それは神のみぞ知る。」

オ！！！！

甲。「マーーーーン・ゴオオオッ!!!」

「ファイーーーーー。ブラス。アアアアアッ!!!!」

小美琴「ここでそんな使うなアアアアアッ!!!!」

第九章

『第九章 決まった覚悟と土地案内』

エヴァンジェリンの話を聞き、逃げ出してしまったネギだったが、そんなネギは現在空から落下し……、

バsshャーーン

「わーん!？」

……川に落ちた。

ネギSIDE

うつ、ちよつと考え事しちゃってたから低すぎたことに気付かなかったよ……。

「ハッ……杖!？ しまった僕の杖どこ!？」

杖がない事に気付いたネギは川から出て杖を探していたが、

「あああ、僕の大事な杖がどっかいつちゃった!？」

「こ、こんな山奥で杖がなくなったら……僕ほとんど魔法も使えないし……か、帰れなくなっちゃうよーっ!？」 わーん

！ 僕の杖どこいつちゃったのーっツ!？

そう叫びながら必死に杖を探していたネギだったが、

ワォーoooooooooooo

うえっ!？ な、なに今の声……も、もしかしてオオカミ!？

「あわわわ!？ 助けてお姉ちゃん!？ あうっ!」

走って逃げようとするネギだったが、慌てていたからか転んでしまった。

「うつ……うええっ……アスナさ……」

しまいに泣き出してしまったネギ……そんな所に、

ガサツガサツガサツ

「ひつ．．．!？」

な、何!? も、もしかしてオオカミがつ!?

怯えている僕を余所にこっちに來たのは．．．、

「!？．．．．．あ．．．」

「――おや？ 誰かと思えば．．．」

「ネギ坊主ではござらんか」

「な、長瀬さん!？」

僕の生徒である長瀬楓さんだった。僕は知ってる人だったからか、

「うわ~~~~ん。 助かりましたー！ッ!！」

泣きながら、つい跳び付いちゃいました。でもよかったよ、うわーん!

「おとと、よしよし．．．生徒落ち着くでござるよ」

．．．それから、僕が泣き止んだ後、長瀬さんに連れられて小さい滝がある岩場にいた。

そんなネギは現在、服を乾かしているからか、バスタオルを巻いているだけである。

「へー、土日は寮を離れてここで修業をしてるんですか．．．
くちゅんっ」

「そーでござるよ」

そう答えた長瀬さんは、

「ちなみに何の修業かは秘密でござるニンニンっ」

そう言ってるけど．．．．．ニンジャの修業じゃないのかな？

．．．ニンニンって!

「ネギ坊主はこんな山奥で何を？」

僕がそう思っていると、長瀬さんがそう聞いてきた。

「．．．．．」

僕が黙っていると、

「まあ、話したくなければいいでござるよ」

「いえ、あの．．．」

長瀬さんがそう言うってくれたけど・・・、僕の杖どこに行っちゃったんだろう・・・いつもなら目を閉じるだけでどこにあるかぐらいはすぐにわかるのに・・・。

「・・・やっぱり僕がダメ魔法使いだから、杖も愛想を尽かされちゃったのかな？」

「・・・」

ネギがそう思っている中、楓は何かを考えていた。

「・・・そんなふうに僕が考えていると、

「ネギ坊主。しばらく拙者と一緒に修業でもいてみるか？」

突然長瀬さんがそう言った。

「・・・それからお腹がなった僕に長瀬さんが岩魚を獲るって言うて近くの岩場に案内され、

「ほら、あのへん」

そう長瀬さんが指差すとそこには、

「うわー、一杯いる」

そう僕が言うほど魚が一杯いた。

「岩魚は警戒心の強い魚で、足音をたてれば逃げちゃうでござる」

「へー、じゃあどうやって・・・」

僕が長瀬さんにそう聞くと、

「これでござるよ」

そう言うて長瀬さんは何かを取り出す。・・・あれってくな

い？ たしかニンジャが使ってる道具だった気がするけど・・・。それを長瀬さんが指に三本挟み、それらを一気に投げたら・・・、

ビシュッ！　ぱしゃっ

三本とも魚に刺さった。

「ほい三匹」

「う、うわあーっ！　すごいすごい！　僕にもやらせてくださいーっ！」

そう言って長瀬さんから二本借りたけど、

「えい、えいっ！ あ・・・あれ？ 飛ばないなあ」

全然飛ばずにおちていつちゃった。 ど、どうして!？

「んーホレ、もっとこうしてポポーンと？」

そう言った長瀬さんは、一回跳んで、岩を足場にして高速回転しながら跳んでからまた三本投げたけど、

「そんなコトできませんよっ!!」

「いやーでもすごいなー、さすが^{ジャパニーズニンジャ}二本忍者です!!」

「何の話でござるかな」

そう言って口笛を吹いている長瀬さんだけど・・・ニンジャじゃないのかな？

「次は山菜採りでござる」

「へー、でも山菜採りならできそう!! がんばれおなか・・・」

僕は鳴っているおなかにそう言った。そうして山菜採りが始まったけど・・・、

「16人に分身すれば16倍の速さで採れるでござるよ」

長瀬さんがそう言って16人に分身して山菜を採ってるけどって!？

「うわあああ~~~~!!? ニンジャだーっ!!」

やっぱり長瀬さんってニンジャだよなっ!？ 分身できるってやつぱりニンジャだよな!？

それから採った山菜と魚を食べてるけど、でも本当にスゴイなー長瀬さん。

・・・もしかして僕のパートナーになってくれるかなあ・・・。

一瞬そう考えるネギだったが、

待つて待つて!! 僕のバカ! パートナーと言っても結局、戦いの道具として頼ってるだけじゃないか・・・。

僕が原因のもめごとに僕の生徒をそんな形で巻き込んでいの？

昨日アスナさんに頼んだのだったて・・・。

「ううつ・・・」

そう思っていると、

「ホレ、ネギ坊主。行くでござるよ」

長瀬さんがそう言っ僕の頭に手を載せた・・・・・・・・へ？ 行く
ってドコに？

「午後の修業は、夕飯の食料探しナリよ」

「えーっ・・・また、御飯探しですか！？ ナリ！？」

「山での修業は、食料集めが主でござるよ。ニンニン」

そう言いながら長瀬さんは飛び降りていった。

それから美味しいキノコがあると云って高い崖を登ったり、蜂の
巣を採ったら熊に襲われたり、また川魚を獲ったりしていたら、何
時の間にか夕方になってたけど、

「うひゃーっかれたー。 汗と汚れでドロドロですよー

ー」

「フロでも入るかネギ坊主」

僕の言った事に長瀬さんがそう云うけど・・・・・・・・、

「えっこんな山奥で！？ 僕おフロは・・・」

特に髪の毛洗うのが苦手なんだけど・・・。

「あいあい」

そう思っいて夜になると・・・・・・・・、

「わーっ露天風呂ですねー」

僕の言った事に「あい」って長瀬さんが答える。 いや、それ

にしても・・・、

「あーっ、いい気持ち」

髪の毛洗わないならこんなおフロ也大歓迎だなー。

「・・・よかった。 元気になったようでござるな」

「え・・・」

僕がそう思っいたら長瀬さんが突然そう云ったけどそれってど
ういう・・・、

「ようやく笑顔を見せたござる」

「あ……」

そう言つて長瀬さんがニコつて笑つと、僕は先程の言葉の意味に気付いた。

……すると、

「はいでは、拙者もフロに入らせてもらおうかな」

そう言つて服を脱ぎだす長瀬さん……つて!?

「え」

思わず絶句する僕だけどその間にも服を脱いでいる長瀬さん。

「いえっあの、僕出ますから!」

「まあまあ」

僕がそう言つて出ようとするが、脱ぎ終わった長瀬さんが入ってくる。

「あつダメ長瀬さん!？　ここせまいんですから!」

「はっはっはっ、良いではないか」

僕はなんとか長瀬さんを止めようとしたけど……、

ザバーツ

「あうー……っ!？」

……ダメでした……うう、僕先生なのに。

「い……湯でござるなネギ坊主」

「……」

現在楓の前に座るように入っているネギは、恥ずかしいのか顔を赤くしていた。

「……でもスゴイな」。長瀬さんはまだ中3なのに……

……

僕がそう言つと長瀬さんが勘違いしたのか胸の事を聞いてきたけど、それを訂正してから僕は長瀬さんの凄い所を言つたら、

「ハハハ、それを言つたらネギ坊主こそ10歳で先生をがんばつてるではないか」

長瀬さんはそう言うけど・・・、

「いえ、そんな。僕なんか全然ダメ先生ですよ。・・・」

今日だって故郷に逃げ帰ろうと思ったくらいで・・・」

「はあ・・・情けないです」

そう言っている自分が本当に情けなくなってきた。

「おやおや、また落ち込むでござるか」

「・・・思うにネギ先生は今まで何でも上手くやって来れたけど・・・ここに来て初めて壁にぶつかったでござるな」

「それでどうしていいかわからず戸惑っているのでござろう?」

落ち込んでいる僕に長瀬さんが突然そう言ったけど、それが見事に的を射ていた。

「そ・・・そのとおりです!」

す、スゴイ! 僕の考えを読むだなんてさすが忍者だ。

「ははは、ネギ坊主はまだ10歳なのだからそんな壁の一つや二つ当然でござるよ」

「例え逃げ出したとしても情けなくなどないでござる」

僕がそう思っていると長瀬さんがそう言って頭を撫でながら抱いてくるけど、わわ、む、胸がーーーーーッ!?

「で、でも・・・」

ネギは不安がるが、

「・・・安心するでござるよ」

そんなネギに楓がそう言って、

「辛くなつた時には、またここへ来ればおフロくらいには入れてあげるでござるから」

「今日はゆつくり休んで、それからまた考えるでござるよ」

楓が月を見ながらそう言った。

「・・・長瀬さん・・・」

それから少しして、楓が床に伏せっている中その横でネギは、自分が今まで上手く行っていた事にいい気になっていた事に気付き、いざ問題がぶつかりと自分は逃げる事だけ考えていた事を悟り、新

任で入った時明日菜に『わずかな勇気が本当の魔法』と言う言葉の意味を改めて理解した。

そして夜が明ける頃、ネギは先に起き、自分の杖のある場所をサ
ーチしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・あつた！

！ 僕の杖！

ネギが杖の有る場所を確認すると杖が一人でに動き、ネギの所へ
向かって行った。

バシンッ！

「ありがとう、僕の杖」

僕は飛んできた杖を掴むと、杖にそう言う。

「よし」

「ありがとう長瀬さん。 僕・・・・・・・・何とか一人でがんばって
みます」

僕は長瀬さんのいるテントに向かってお礼を言ってから杖に跨り、

タッ ヒュッ！

助走をつけてから空を飛んで行く。

そんなネギが飛んで行く姿を見ている者がいた。

「（行くでござるか・・・）」

先程まで寝ていた筈の楓が起きており、ネギを見送っていた。

「フフツ、魔法使いって本当にいるんでござるなーーーー、拙
者も人のコト言えんでござるが。 ニンニン」

そう言って楓はもう一眠りをするのであった。

僕が寮に帰ろうとしている中、

「あーーーーコラ！？ ネギーーーーー！！」

「兄貴ーーーーー!!」

「え………」

突然聞き覚えのある声が聞こえた。

「降りて来なさいこのバカネギーツ!!」

「ア、アスナさん!? 何で!?!」

下を向いて見るとアスナさんとカモ君がこっちに向かって叫んでいた。……でもホントどうして!?!

「あんたのせいで一晩中、山の中さ迷ってたのよーッ!! ウキ
ーーーーッ!!」

「飛び出したつきり連絡をしないで……あーもー心配させて!
!」

「いいかげん降りてこーい!!」

アスナさんが叫びながらここにいる理由を話した。

「はわわ、ごご、ごめんなさ……い!!」

そう言っただけは二人におもいつきり謝った。

「兄貴ーーーーー! よかったーーーー! 助かったよ……俺
達が……」

そんな中、カモ君がそう言っていた……二人とも本当にごめ
んなさい!?!

ネギSIDE OUT

ネギの覚悟が決まってから数時間後、美琴は御坂妹、打ち止め、
番外個体の三人に麻帆良学園内を案内していた。刹那も案内する事
になっていたが、学園長が話があると行ってこの場にはいない。

「……ここが今私が通ってる麻帆良女子中等部」

「おおつとミサカはミサカはしゃいでみたり!」

「学校ならこちらにもあるだろうとミサカは上位個体の異常なは
しゃぎっぷりにそう返答します」

美琴の説明にアホ毛をすぐ動かしながら打ち止めがそう言って

いるのに対し、御坂妹は呆れながらそう言っていた。　「……
にしても、一方通行は来なかったわね」

「おねーたま的には良かったんじゃない？」

「……どう言う意味よそれ？」

番外個体が言った事に対し美琴がそう聞く。その間に打ち止めが
走ってどこかに行こうとするのを御坂妹が押さえつけていた。

「だつてさ」。　ハワイの時はあやふやになっちゃったけど、ミ
サカ達を10000人近く殺してたんだし。それっておねーた
まを10000回近く殺してるようなもんじゃない？」

「……別に私はアイツ（一方通行）を許したわけじゃない
し、今でも許せないでいる」

美琴はその後「けどね」と言うと、

「それは私自身にも言える事だから、ただ一方的にアイツを恨む
のはお門違いとも思ってるのよ……。それに、一人位アイツを許
さないでいる人間がいても良いんじゃない？」　美琴はそう続けて
言った。その間に打ち止めが校舎内に入ろうと走り出し、御坂妹が
後を追っていた。

「ふーん、まあミサカは悪意がある方が好きだからそれでも良い
んだけどね」

「あんたってホントいい性格してるわよね……。ほら早く行くわ
よ」　そんな会話をしながら打ち止め達の方へ行く美琴と番外個体
それから彼女達は図書館島等、麻帆良学園のだいたいの場所を回り、
彼女達は今世界樹の所にいた。

「ほわ……でか……いつてミサカはミサカは大いに驚いてみたり」
「ミサカもさすがにこれは予想外でしたとミサカは上位個体と
同じ意見を述べます」

そう言つて打ち止めと御坂妹が世界樹を見上げており、番外個体
はその周りを見て回っている。

「ちよつと上からの眺めを堪能してくるってミサカはミサカはよ
じ登ってみたり」

「それじゃあミサカが先に登っちゃおうかな」

よじ登っている打ち止めに番外個体がそう言って登り始める。

「ぬわぁッ!? 妹に負けてられるかってミサカはミサカの登る速度を速めてみたりってはヤッ!!!?」

打ち止めが登る速度を上げたが、体格と登り型のせいか番外個体の方が速く登っていた。

「むがーッ!! ってミサカはミサカはこれでもかと木を登ってみる!!」

そう叫びながら登って行く打ち止めと、それを軽く流しながらすいすいと登っていく番外個体だった。

「……行ってしまったねっとミサカは上位個体達を無視する事にします」

「……そうね……ところで、あんたはどうすんのよ?」

美琴が御坂妹にそう聞く。

「どうするとは? とミサカはお姉様に聞き返します」

「学校よ。 昨日聞かれた時あんただけ答えが合間だったでしょ

?

「……」

「こう言っちゃんだけどさあ……あんた行きたいんじゃないの?」

「……ミサカにもわかりませんっとミサカは自信の迷いを告白します」

美琴がそう聞くと黙っていた御坂妹がそう言う。

「……」

それを聞いた美琴が何か考えると、

「それだったら尚更行くべきじゃない? 悩んだりするんならまずやってみて、それから悩みなさい。 まずはそこからよ……私でよかつたら相談に乗るから」

美琴がそう言った。

「……ではあの人を振り向かせるには何をすれば良いのでしょ

うつとミサカはお姉様に問います」

すると御坂妹がそう言つて、ビシリッ！つと一瞬時が止まった。

「……ほう。あんたはいきなりそれを言うか……訂

正しとくわ。アイツの事以外なら相談に乗つて上げる」

「チッ！ つとミサカは舌打ちします」

「まったく。ホントこの子（御坂妹）といいあの子（番外個体）
といい、いったいなにをどうしたらこんな性格になるのかしら……
……とにかく！ やる前からウジウジ悩むんじゃないわよ美己^{みこ}」

「ではそうさせて貰いますつとミサカはお姉様の助言を素直に聞
きます……ところで先程の名はいつとミサカは疑問を
持ちます」

「ん？ ああ、あんたの名前。いつまでも御坂妹じゃまずいで
しょ？ だから御坂美己。それがあんたの名前よ」

御坂妹改め美己が美琴に聞くと、美琴がそう答えた。

「御坂美己……ミサカの名前……」

「なによ？ 不満でもあるの？」

「いえつとミサカは否定します」

二人がそんな会話をしていると、

「ずる……い！！ つてミサカはミサカの名前が欲しいってミ
サカはミサカはお姉様に駄々をこねてみたり！！」

「それはミサカも同感するけど、どう？ おねーたまも愉快に木
登りしてみる！？」

何時の間に戻つて来たのか打ち止めがせがみ、番外個体が携帯を
構えながらそう言った。

「あんた達何時の間に戻つて来たのよ！？ つかそこ！ 何気に
ケータイカメラスタンバイすんな！！ 私が登つてる所を撮る気満
々じゃない！！」

「ふっふっふつとミサカはミサカは不適に笑ってから答えよ「ミ
サカネットワークから傍受したんでしょつとミサカは上司の言おう
とする事を答えます」先に言われた！！？ つてミサカはミサカは

ショックを受ける！！」

「何気におねーたまのスカートの下が目的だったりする」 打ち止めが何か言おうとする前に美己に先に言われ、番外個体は笑いながらそう言う。

「余計いやよ！！　つか登らないから！！」

「へーい。　そんな事言ってどうせ下は短パンでしょ？　恥ずかしがらずにレッツゴー！！」

「するかアアアアー……ッッ！！」

美琴がそう叫び、その後少し息を整えてから、

「とりあえずあんた達の名前も考えるからもう少し待つてなさい！！」

「わーいミサカも名前貰えるよーってミサカはミサカははしゃいでみたり」

「へー。　おねーたまそんな事言っちゃって良いんだ？」

打ち止めがはしゃぎ、番外個体がそう聞く。

「どうしてよ？」　「つまりそれってミサカ達全員の名前を考えるって事になっちゃったりするんだよね」

番外個体が口元を歪めながらそう言った。

「……………え」

その意味に気付いた美琴はついそんな声を漏らす。

「そうなりますと全9970人のミサカの名前を考える事になります」とミサカは補足説明します

「んなっ！？」

美己の言った事に再び絶句する美琴。

「（だ、大丈夫よ！　たしか妹達は世界中に散らばってて学園都市にるのは5、6人だったはず……………そ、その位なら何とかなるわね」

そう考える美琴だったが、

「おねーたまはお忘れかな」。　ミサカ達にはミサカネットワークがあるんだよね」

「それと途中から考えている事を口に出してますよつとミサカは補足します」

「ちなみにミサカがおねーたまの言った事録音しておいたから」
その考えは無駄に終わった。

「だあッ!？」

再び絶句する美琴だったが、

「・・・だったら、あんた達事その録音機丸コゲにすれば言い話しじゃない!!」

そう言っている美琴の周りには電気が発生しているが、

「あれも録音機ですが？　つとミサカは上位個体を指差しながらお姉様に言います」

「・・・え？」

美己の言っている意味がわからず啞然とする美琴。

「お姉様、ミサカも名前欲しいってミサカはミサカは目に涙を溜まらせながらそう聞いてみる」　「うつ・・・」

それにうるたえる美琴・・・、

「わ、わかったわよ。　妹達全員の名前考えてあげるわよ」

結局、彼女は妹達全員の名前を考える事になった。・・・ちなみに録音済み。

「・・・ところでおねーたまに別に全妹達の名前考えなくてもいい事話さなくていいわけ？」

「どうせ上位個体が暴露するでしょつとミサカはちっこいの行動パターンを読みます」

「あ、それミサカも思ってた」

そんな会話が有ったとか無かったとか。

く熱血！！ 武田道場！！く

信玄「これより、第6回熱血！！ 武田道場！！を執り行う！！！」
美己「どうも皆さん。 本日から御坂妹改め御坂美己ですっとミサ力は挨拶をします」

幸村「おお！！ 妹殿に名前が付いたのでござるか！ おめでとうございまする！！！」

小美琴「いいかげん私を元に戻してもいいわよね？ 何でこのままなのかしら？」

打ち止め「おお！ お姉様がミサカみたいになってるってミサカはミサカは驚いてみたり」

幸村「ぬおおツ！？ 美琴殿が二人ツ！！??」

剣麻「ここでゲストの説明をさせていただきもうす！ 本日のゲストは本編から打ち止め（ラストオーダー）殿をお呼びいたしました」

打ち止め「ヤッホーっとミサカはミサカは挨拶を試みたり」

美己「さて、本日は名前決めの延長についてですっとミサカは説明します」

打ち止め「まさかの無視！？ ってミサカはミサカは驚愕してみたり！！」

佐助「えゝ、実は残りの打ち止めと番外個体の名前を決めるのを、エヴァ編終了まで延ばすことになりました」

美己「と言うわけで、ご応募お待ちしておりますとミサカは決まり文句を言います」

これにて閉幕・・・、

剣麻「待たれよおおおおおツツ！！！」

「幸村殿！！ 修業のお相手、お願いいたしまする！！！」

幸村「良かろう！！ いざ尋常に・・・」

そうしてお互いの武器を構えると、

『勝負ッ！！！！』

そう叫びながらお互いに近付いていき、

チュッドオオオオンッ！！

激突した。

劍麻「とうッ！　せいッ！！　デエエイヤアッ！！！」

作者が刀を振るい、

幸村「ぬおおりやああああッッッ！」

幸村がそれを受けながら、

二本の槍で攻撃する。

信玄「フッフッフ、二人共猛っておるわい」

佐助「アチチチッ!? 勘弁してくれよ」

小美琴「作者もこの作品内でだんだん人間離れしてきたわね……」

L

打ち止め「おお」とミサカはミサカは目をキラキラさせながら観戦してみたり」

美己「……しかし、あれだけ暴れて壊れないとはずっとミサ力は超

合金ニユーZ α の頑丈さを評価します」

各々がそう言っている間に、

劍麻「行くぞ幸村殿！！ 新必殺技『一連！ 速刀斬！！』」

作者がそう言って二本の小太刀を抜きながら間合いを積めて行く。

幸村「ならばッ！！ 火炎車あああああッッ！！！」

幸村がそう叫びながら二本の槍に炎を纏わせ、回転しながら前進していく。

-
-
-

そして、

チュツドオオオオーンツツ!!!

両者の技が激突し、

剣麻「ぬううおおおおあああああああ——ツツ！」

「！！！？？」

作者がそう叫びながら吹っ飛ばされ、道場の奥まで飛んで行った。
信玄「これにて閉幕じゃ！！」

第6回熱血！！ 武田道場！！ 完！！

『ちよっ！？ こんな終わり方あり！？ / っとミサ力は驚きます
/ ってミサ力はミサ力は叫んでみたり！？』

第九章（後書き）

感想、指摘、アドバイス、アンケート等お待ちしております!!

打ち止め「うう、初めてのゲスト登場の扱いが適當すぎるよ」って

ミサカはミサカは嘆いてみる」

美己「ちなみに作者はしばらく気絶するだけですみました」とミサカは報告します」

第十章（前書き）

前書き、ゝ熱血！！ 武田道場！！ 前回のあらずじ説明！！
小美琴「つと言っわけで今回からこういった始まり方になるわ」

美己「前はネギ先生が立ち直るのと、ミサカの名前をお姉様が付けてくれましたね」とミサカは説明を行います」

小美琴「まあ、そのせいでとんでもない事になったけどね……
まあその変わりにやっ解毒剤を飲んで元に戻るけど」

美己「このままちっこいままに入れていいのにとミサカは心でそう思います」

小美琴「本音だだ漏れたつつの……それじゃあ『とある麻帆良の超電磁砲』始まるわよ！！」

第十章

『第10章 風邪と夢と新事実』

休み明けの朝、御坂美琴は現在、自分の席にて項垂れていた。

「あ、あのー美琴さん？ 昨日からずっとですけど・・・何かあつたんですか？」

美琴の状態に心配してか刹那がそう聞くが、

「あーうん。 いやねー 9970人も名前考えなきゃいけなくなつてさあーもうどうすりゃいいのよ」

「きゅ、9970人って・・・そんなにどうしたんですか・・・」

美琴の返答に啞然としながら刹那がそう言った。 昨日全妹達の名前を考える事になった美琴だったが、数が数だけに途方に暮れてしまったのだ。

「あははは・・・ちよつとね（まさか自分のクローンに名前を付けることになったただなんて・・・事情を説明しなきゃわかんないわよね・・・）」

「あ、そう言えば刹那はどうなの？」

美琴は苦笑いしながら誤魔化し、その後声を低くしながらも刹那にそう聞いた。

「・・・なにがですか？」

刹那も美琴に合わせて声を低くしてそう聞く。

「昨日聞きそびれたけど・・・その、あの子達の事・・・刹那も気になってると思うて・・・」

「・・・その事ですか・・・確かに気にならないと言えばウソになります・・・ですが、その事は学園長同様美琴さんが話してくれるまで待つつもりです」 美琴の言おうとする事を察した刹那がそう言った。

「（それに……私にそれを聞く資格はない……私には……）」

心の中でそう思いながら。

「……ありがとう刹那」

刹那の顔色が優れない事を気にするも美琴は礼を言った。

一方ネギはと言うと、明日菜がバイトに行っている間に学校へと向かっていた。

「あ！ ネギ君おはよー（？）」

「あれ？ 今日は早いじゃん」

「おはようございますネギ先生」

「おはよーございます！ 今日も元気にいきましょう！」 ネギは生徒達に挨拶してから校舎へと向かって行った。

「……あら、何だか今朝はいつも以上に元気でりりしいですわネギ先生……？」

「あはは、何かあったんかなー？ やる気がみなぎってるよー」
あやかと裕奈が各々にそう言っている中、ネギは教室に向かう途中に、果たし状と書かれた紙を取り出しながら歩いていく。

「（こないだ僕の方から茶々丸さんに仕掛けたコトでエヴァンジェリンさんが報復に来るのは間違いない！）」

「（でも僕、これ以上誰にも迷惑はかけたくないし……）」

「（……僕一人でも何か手はあるはずだ……。とにかくまずは逃げずに立ち向かうんだ！）」

ネギがそう思いながら歩いていると教室に着いた。そしてネギは少し怖じ気付きながらも……、

「……おはようございますっ！ エヴァンジェリンさんはいますか！？」

意を決してドアを開け、挨拶をしてからエヴァの名前を呼んだ……
……が、

「あ……ネギ君おはよー」

「お、おはよーございますー」「おはよーです」「おーす」

「？）」

「エヴァンジェリンさんならまだ来てないですが」

のどか、ハルナ、鳴滝姉妹が挨拶をして、夕映がそう答える。

「へ・・・あ・・・そうですか・・・」

「何や力ぜでお休みするて連絡が・・・」

そう言つて保険委員である亜子から手紙を貰うネギは少し啞然としていた。

「（へー、またサボリかと思つたら風邪か・・・ん？ 吸血鬼つて風邪ひくのかしら？）」

その話を聞いていた美琴がそう思っていた。

「（うーん？ 魔法使いで吸血鬼な人が力ぜひいて寝込むわけないよなあ・・・またサボリかな・・・でも仮病で呪いから逃れられるのかな・・・？）」

「ハア、ハア、間に合つた・・・ん？」

「うーん」

ネギが何かを考えている時に、ネギとこのかが先に行つてしまつてここまで走つて来た明日菜とその肩に乗っていたカモが教室に入つて来た。

「（・・・ん？ ネギ先生もなーんか考えているみたいね・・・！）」

一方ネギの方を見ていた美琴がそう思うと、ピンつと何かを思いつくつとそれと同時に、

「よーし」

「あつ、ネギ。どこ行くのよ」

ネギが何かを思いついたのかどこかへ走つて行つた。

「何よアイツ。 妙に元氣がいいわね・・・エヴァンジェリンのことは大丈夫なの？」

「（うーん？ 昨日帰つてから顔つきが違つてたからな・・・何か考えついたんスカねー）」

「ネギ君土日はさんで元氣出たなー（？）」

明日菜はネギが走って行った方向を見ながらそう言い、カモはネギが何か考え付いたかと考え、このかが純粹にネギが元気になった事を喜んでおり、楓もどこか嬉しそうだった。

「……………ネギ先生授業どうするんでしょうね美琴さん。……………美琴さん？」

行ってしまったネギに対し美琴にそう聞く刹那だったが……………美琴からの返事がないためそっちを向くと……………

「……………あれ？ み、美琴さん？」

……………何時の間にか美琴の姿がどこにも見えなかった。

ネギSIDE

その一方、飛び出したネギはと言うと……………

「えーと……………この名簿によるとエヴァンジェリンさんは寮とは別の所に住んでるのか……………」

「ふん。だから寮で会わないと思ったらそうだったんだ……………」

「はい。僕も今知りました」

……………ってあれ？ 僕は誰と話してるんだろう？

そう思い、声のした方を向くと、

「ヤッホー、ネギ先生」

そこにいたのは御坂美琴さんだった。

「み、御坂さん！？ だ、だめじゃないですか！ 授業はどうしたんですか！？」

「それ先生にもいえる事だと思うんだけどまあ……………サボっちゃった」

「あうっ！？」

うっ、そう言えば僕も授業をほっぽり出しちゃったんだ。ど、どうしようっ！？ でもだからって生徒のサボりを肯定するのも先生としてどうかと……………。

「まあ私もマクダウエルさんには少し用があるから、ついていかせてもらうわよ先生？」

「だ、ダメですよそんなッ!？」

それじゃあ御坂さんに迷惑がかかっちゃう!!

僕がそう思い何とか御坂さんを止めようとするけど・・・、

「へへ、クラスメイトのお見舞いに行っちゃダメなわけ?・・・

・それともマクダウエルさんは吸血鬼だから危ないって言いたいのかしら?」

「え・・・?」 僕は御坂さんの言った事に啞然とする。

「私知ってるのよねへ。・・・先生が魔法使いだって事」

「え・・・えへへへへへへッ!!??」

な、ななな何でバレてるのぉーッ!?! ど、どとどうしよう!?! 記憶消さないと!?!

「そりや目の前であんなの見せられたら誰だつてわかるわよ」

「・・・あッ!?!」

テンパってた僕に御坂さんがそう言う・・・。そ、そう言えば御坂さんにはバッチリ見られてたのすっかり忘れてたよ!!?!?

「大丈夫よ。 誰にも言つてないし、言つつもりもないから」

「ほ、ホントですか!?!?」

「え、ええ(つて言つても刹那や龍宮さんの事は言わなくてもいいわよね・・・)」

よ、よかったー、僕オコジョにならずにすんだよ!!。美琴がそう思っている中、ネギはオコジョにならずに済んでホッとしていた。

その後歩きながら、御坂さんから学園長から魔法の事を聞いたつて教えてもらったけど・・・。まさか御坂さんも魔法関係者だったなんて・・・。

「まあ私もマクダウエルさんから狙われてるから少し気になったのよ(さすがに全部話すのはまだ早いわよね)」

「へへ、そうだったんですか」

僕だけじゃなかったんだ．．．．それにしても御坂さんって授業の時と接し方が違うような？

「それで？ マクダウェルさんは何処に住んでるの？」

「あ、はい。 えゝと、学園都市の桜ヶ丘4丁目29．．．あ、ここみたいです」

僕がそう言っ見てみると、

「へえゝゝ 案外素敵な家だなア．．．」

「そうね．．．．てつきり幽霊屋敷にでも住んでるかと思ってた」

僕等が各々に思った事を口に出してから、

「あのー．．．．こんにちはー、担任のネギですけどー家庭訪問に来ましたー」

「クラスメイトの御坂美琴ですけど、お見舞いに来ましたー」

僕はそう言ってカランコロン、と呼び鈴を鳴らすけど、

しゝゝゝゝゝゝゝん

．．．．あ、あれ？

「ちよつと。 誰かいないの？ おつかしいわね．．．？」

御坂さんがドアを開けながらそう言っただけどあれゝおかしいな．．

．？

二人がそう思いながら家に入ると、人形が沢山置いてあつた。

「わわっ！？ 中は結構ファンシーだ。 どころが吸血鬼なんだ！

？」

僕がそう驚いていると、

「．．．．．」

惚けている御坂さんがいた。

「あの．．．．御坂さん？」

「え？ あっ！ ほ、ホントよねゝ、何処が吸血鬼なのかしら！？」

僕が話しかけると御坂さんが誤魔化すように言ってるけど．．．．

・もしかして御坂さんって可愛いもの好きなのかな？

「……どなたですか？」

ネギがそう思っていると突然後ろから声かけられ二人そろってギクツと驚く。

「……ネギ先生……御坂さん……こんにちは……マスターに何か御用でしょうか」

「うわっ！？　びつくりした！　ち、茶々丸さんですか！！」

「ホントにびつくりしたわよー（……あれ？　ここまで近付かれたら気付けるのにおつかしいわね？）」

後ろを向くと何時の間にか茶々丸さんがいた。

「あ、えーと……こないだはどうもすみませんでした」

「いえこちらこそ……」

僕はこの間の事を茶々丸さんに謝ると、茶々丸さんからも謝られた。……僕達から挑んできたんだから茶々丸さんが謝る必要なんてないのに……。

「（この間って、なにをしたのよ……）」

そんな二人の会話を聞いていた美琴がそう思っていた。

「……ところでマクダウエルさんは？」

「あ、そうでした！　エヴァンジェリンさんは！？」

僕と御坂さんの疑問に、

「……マスターは病気です」

茶々丸さんがそう答えてくれたけど……、

「病気って……マクダウエルさんって吸血鬼……よね？」

「そ、そうですよ。不老かつ不死である彼女が力ゼなんてひくわけないでしょう」

「……そのとおりだ。私は元気だぞ」

僕達が各々にそう言つと、そんな答えが返ってきた。

ネギSIDE OUT

「よく来たな・・・ハア、ハア・・・魔力が十分でなくとも貴様等ときひよっこ共をくびり殺すコトくらいわけではないのだぞ？」

「「エ、エヴァンジェリンさん！！／マ、マクダウェルさん！！」

「マスター。ベッドを出ては・・・」

上を向くとそこには寝間着姿のエヴァがいた。ネギと美琴が各々にそう言つと、その後ネギが懷から果たし状を出し、それを彼女に見せた。

「？・・・何だソレは？」

「（今時果たし状つて・・・）」

「は、果たし状ですっ！僕ともう一度勝負してくださいっ！！」

「そ、それにちゃんとサボらずに学校に来てくださいっ！！このままだと卒業できませんよっ！？」

「だから呪いのせいで出席しても卒業できないんだよ」

ネギは一生懸命に話すが、それに対しエヴァが学校にいかない理由をもう一度説明する。

「ーまあいい。じゃあここで決着をつけるか？私は一向に構わないが・・・」

「・・・いいですよ。そのかわり、僕が勝ったらちゃんと授業に出てくださいね！！」

エヴァはそう言つと、右手に魔力を集め、左手に試験管を持つ。それに対しネギも杖を構えた。

「・・・なんか忘れられてる気がする・・・ん？」

美琴はエヴァの様子に少し違和感を覚える。

「あの・・・マスター」

茶々丸がエヴァに話しかけるが、当の本人には聞こえておらず、ゴゴゴ・・・と効果音のようなものが聞こえ、彼女が笑い戦闘が始まると思った次の瞬間・・・、

ぼてっ……ゴッ！ カシャン、カシャーン！

「わ~~~~っ！？ 何~~~~っ！？」

「ええ~~~~ッ！？ ちよつとー……ッ！？」

エヴァが倒れた。その際に頭を床にぶつけ、試験管も落ちて割れた。

それに驚くネギと美琴。

「うわっすごい熱！？ カゼって本当だったんですかー！？」

「2階のベッドに寝かせてください。マスターはカゼの他に花粉症も患っていますので」

「何で吸血鬼が病気にかかっているのよ！？ 話し聞く限りじゃそうだったのにかからないんじゃないかなかったの！？」

ネギと茶々丸がエヴァを運んでいる間に美琴がそう叫んだ。

ネギ達は2階に着くとエヴァをベッドに寝かした。

それから数分、ネギ達はエヴァを見ていたが、

「……な、何かすごく苦しそう」

「そうね。これ見てる限りだととも吸血鬼には見えないわね」

「……無理ありません」

「魔力の減少した状態のマスターの体は、元の肉体である10歳の少女のそれと変わりありませんので」

ネギと美琴はエヴァの容態を見て思った事を口に出し、茶々丸が二人に現在のエヴァの状態を説明した。

「そ、そうなんですか？」

「それってつまり今は普通の人間と大差ないって事？」

「そうなります」

ネギが半場納得し、美琴が茶々丸にそう聞く。

茶々丸はその質問に答えてから、

「ネギ先生、御坂さん……私、これからツテのある大学の

病院で良く効く薬をもらってきますのでその間マスターを見ていて頂けませんか？ ネコにエサをやらねばいけませんし」

「ええっ！？ ぼ、僕がですか！？」

「私もッ！？」

エヴァの事を二人に頼み、それに驚くネギと美琴。

「はい・・・先生にならお任せできると判断します」

「わ、わかりました。なるべく早く帰ってきてくださいねー、僕、この後授業ありますからー（ぼ、僕は敵なのに・・・何考えてんだろこの人・・・いや口ボ・・・？）」

ネギがそう思いながら承知すると茶々丸はお辞儀をしてから家を出るが、

「ちょっと待ちなさいよ！？ 何で私もなのよッ！！ さっきのだって先生しか当てはまらないじゃない！？」

美琴が叫ぶように茶々丸にそう聞く。

「先生だけでは大変そうなので、御坂さんにも手伝ってもらおうと思いついて、せれに御坂さんにもお任せできると判断しました」すると茶々丸がそう答えた。

「・・・あ、あんたがそう言うなら別にやっても良いわよ」顔を赤くしながら美琴がそう答えた。

そうしてエヴァの看病をする事になったネギと美琴。しばらく様子を見ていると、

「うう・・・ケホケホッ！」 エヴァが咳き込みをした。

「あ、あわわっ！？ 大丈夫ですかエヴァンジェリンさん！ ま、まいったな僕の治癒魔法擦り傷にしか効かないし・・・」

ネギが慌てていると、

「ハアハア・・・のどが・・・」

エヴァが苦しそうにそう言った。

「のどが渴いたんですね。 御坂さん！ 飲み物の方をお願いしても良いですか！？」

「わかった。 少し待ってて！」

ネギが美琴に頼み、彼女は飲み物を取りに行った。

「はいどうぞ水です!!」

「うう~~~~ん」

ネギは美琴が持ってきた飲み物の内、水を飲ませようとするがエヴァは飲もうとしなかった。

「あれ……？ 飲んでくれないなあ」

「それじゃあお茶は？ コーラとかも持ってきたけど……」

結局エヴァはそのどれも飲まずその結果、

「うえーん。 僕の血は少しだけにしてくださいよー」

「（あ、やっぱり吸血鬼なんだ……）」

ネギの血を飲ませる事になり、美琴はそれを見てエヴァが吸血鬼である事を再確認する。

「うう……あつい……」

すると今度は暑そうにする。よく見ると窓から日光が彼女に当たっていた。

それを何とかすると今度は汗でパジャマが濡れ、体が冷えたのか寒そうにしている。

「き、着替えさせないと!？」

ネギが顔を赤くしながらそう叫ぶと、

「それは私がやるから先生は着替え持ってきて!!」

「は、はい!」

「さてと、つてうわ!? なんかスゴイ下着ね……まあ黒子の方がもつと凄かったけど……」

美琴がエヴァの体を拭いてからネギが持ってきた服を着せる。その際ネギは目を隠していた。

「よし……落ち着いた」

「そうね……まさか看病する事になるとはね……」

「そ、そうですね……本当は対決しに来た筈だったんですけど……」

ようやくエヴァが落ち着き、一息を付く二人。そしてネギはエヴァの寝ている姿を見て、何故彼女が真祖になったのか、そもそも彼女の実年齢はいくつなのか、何故自分の父親であるサウザンド・マスターに呪いをかけられたのか、そしてその関係とはなどの疑問が浮かび……、

「ううつ何かいろいろ気になってきた。昔の写真でもないかなー」

気になったのか昔の写真などを探すネギ。

「いや、何やってんのよ先生」

そんなネギを呆れた目で見ている美琴だったが、実際は彼女もエヴァの事が気になっていたりする。……そんな中、

「やめ……ろ……」

「うひいっ!？ ご、ごめんなさい別に悪気は……!」

「大丈夫よ。寝言みたいだから」

そんな声が聞こえ、ネギがびくついたが、美琴はエヴァを見てそれが寝言だと判断する。

「サ……サウザンドマスター……待て……や、やめろ……」

エヴァのその寝言を聞いたネギが今エヴァが見ている夢にサウザンドマスターが関係している事に気付くと、何かを思ったのか、

「ラス・テル・マ・スキル・マギス」はい、ちよっとストップ「
つてうえっ!？」

指導キーを唱えようとするネギだったが、美琴がそれを中断させる。

「み、御坂さん!？」

「何やろうとしてんのよ？」

ネギは美琴に今やろうとした事を話した。

「……や、やっぱり女の子の夢を覗き見るのはいけない事ですよね……」

「別に止めないわよ」

「でも僕は父さんの事が……ってはい？」

ネギは美琴の言った事が自分の思っていた事と違ったからか啞然とする。

「その変わりに、私もそれに関わらせてもらっからね」

止めるどころか、自分から関わってきた。……その後ネギは再び指導キ―を言ってから呪文を唱える。

「夢の妖精女王メイヴよ（ニユンファ・ソムニー・レーギーナ・メイヴ）、扉を開けて夢へといざなえ（ポルターム・アペリエンス・アド・セー・メー・アリキアット）……………」

ネギが呪文を唱え、魔法が発動する。

すると景色が変わり、部屋からどこかの砂浜に変わっていた。

「へー、これがマクダウエルさんの夢ね……………って、何でいきなり裸になってるのよー……ッ!？」

「えーと、こう言った仕様みたいなんです……………」

「仕様みたいじゃないわよー、一応見えてないけど恥ずかしい事に変わらないからねコレ!？」

美琴が叫んでいると、隣にいたネギが説明するが、それに納得しない美琴……………そうしていると夢の中のエヴァが現れたが、その姿は幼児体型ではなく、大人の身体付きをしており、左手に操り人形とかで見かける棒を持っており人形が一体その横に並ぶ様に立っていたが、

「こっ……………これは……………昔のエヴァンジェリンさん……………!？」

「ちょッ!? 今と全然違うんですけど……ッ!! 何よ!

あの羨ましい体型は!？」

現在の彼女と、あまりに違いすぎている為か二人そろって驚いていた。

「ついに追いつめたぞ『千の呪文の男』この極東の島国でな」

「今日こそ貴様を打ち倒し……………その血肉、我がモノとしてくれる」

サウザンド・マスター

「『人形使い（ドールマスター）』『闇の副音』『不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトウ）』『エヴァンジェリン……恐るべき吸血鬼よ』」

二人が驚いている間に話は進み、対峙しているフードの人物、声から男であろう人がそう言う。

「己が力と美貌の糧に何百人を毒牙にかけた？　その上俺を狙い、何を企むかは知らぬが……」

「あ……」

ネギはそのフードの男が誰だか検討がついたようでそんな声が漏れる。

「……あきらめろ。　何度挑んでも俺には勝てんぞ」

そのフードの下から見える顔はネギを成長させたような顔だった。

「こ……この人がサウザンドマスター！？　15年前の僕のお父さん！？　か、かつこい……っ！！」

「（へへ、あれがネギ先生の父親。　何かいかにも魔法使いって感じね）」

ネギがフードの男が自分の父親即ち『サウザンド・マスター』ナギ・スプリングフィールドであると確信するとそう叫び、美琴はそう思っていた。

「スゴイ！！　イメージどおりだ！！　まさに最強の魔法使いだわーい（？）」

「（あゝあ、あんなに喜んじゃって……ま、無料もないか……今まで会ってない自分の父親の事だもんね……私は別にそう思わないけどね……どうせ今頃何処かの国で酔っ払ってるんでしょうし）」

娘にそんな風に思われている美琴の父親御坂旅掛はと言うと、某不幸少年の父親と共に絶賛暗闘中^{マネゲーム}だったりする。

美琴がそう思いネギが興奮していると、エヴァから先に動いた。

「パートナーのいない魔法使いに何ができる！？　行くぞチャチャゼロ！！」

「アイサー御主人」

エヴァの横にいた人形チャチャゼロと共にナギとの間合いを詰める。

「えーとこの辺だっけ・・・」

それに対しナギは何かを確かめているようだがこれといった動きを見せない。

「フ・・・遅いわ若造！ 私の勝ちだ！！」

そう吼えながら手に魔力を込めるエヴァ。

「と・・・父さーーーーーん！？」

ネギも父親の行動が予想外だったのか叫んでいる。このままではナギがやられる・・・と思われる次の瞬間、

ズボッ！ 「！？」

ドパーーーーーンッ！！ 「うわあっ！？ アブッ！！」

水入り落とし穴に落ちた。しかもニンニクとネギ入り。

「「ええーーーーーッ！！！！」」

まさかの落とし穴にそう叫ぶネギと美琴。

「ふはあッ！？ なっ・・・これは！？」

「落トシ穴ダ御主人」 「見りやわかるッ！」

エヴァが漫才のようなものをしていて、「ふははは」っと笑いながらニンニクとネギを追加していくナギ。

「なアッ！？ ひっ・・・ひいーーーーー！？ 私の嫌いなニン

ニクとネギ~~~~~！？」

「いつ・・・いやあ~~~~っ！！ や、やめる~~~~っ！！」

「オチツケ御主人」

人形であるチャチャゼロにツッコミを入れられるエヴァ。

「フフ・・・お前の苦手なものはすでに調査済みよ」

そう言いながらかき混ぜているナギ・・・見ててかなりシュールな光景である。

「あッああッダメー！？ あうっ！！」

「アアッ御主人ノ幻術解ケター！」

エヴァがそんな叫び声を上げていると、ボンツという音が聞こえると大人の姿から現在と同じ姿である幼女の姿に変わったつと言っより戻った。

「あ、やっぱりそっちの姿が本物なのね・・・」
さり気なく納得している美琴。

「わははは！ 噂の吸血鬼の正体がチビのガキだと知ったらみんななと言っかな」

「やめろーバカー！ツー！！」

ナギが笑いながらさならにニンニクなどを追加していく。

「・・・ね、ねえ？ アレがあんたの父親で良いのよね？」

「あ・・・あれ・・・なんかイメージが・・・」

あまりの光景に美琴がネギにそう聞き、ネギもイメージと違った父親の行動にただそう言うしかなかった。

「ひっ・・・ひきよう者ー！！ き、貴様は『千の呪文の男』だろ！？ 魔法使いなら魔法で勝負しろー！！っ！！」

エヴァが少し水を飲みながらもそう叫ぶと、

「ー！やなこった。俺は本当は5、6個しか魔法知らねーんだよ。勉強苦手だな」

「魔法学校も中退だ！ 恐れ入ったかコラー！！」

「なっ・・・」

「えっ・・・ちよっ・・・」

「ま、魔法使いとして良いのそれ！？」

ドヤ顔でとんでもない事を言ったナギ。そんな彼に対しエヴァとネギが驚愕し、魔術などのオカルト系に疎い美琴もそんな彼にツッコミを入れた。

「お、おいサウザンドマスター！！ 私の何がイヤなんだ！？」

「だから俺、ガキに興味ないってば」

「歳なのか！？ 歳なら百歳越えてるぞ私！！」

「じゃ、オバハンだなー」

「オバハン言うなーっ！」

「オチツケヨ御主人」

エヴァとナギがそんなコントのような事をしていると、

「なあ、そろそろ俺を追うのはあきらめて悪事からも足を洗ったらどうだ？」

「やだっ！！」

ナギがエヴァにそう提案するが、彼女は速攻で断った。

「そーかそーか、それじゃ仕方ない。 変な呪いをかけて二度と悪さのできない体にしてやるぜ」

「うつ・・・何だこの強大な魔力は」

ナギから膨大な魔力が発生し、その強大さに対しエヴァは嫌な予感がするのさ寒気を覚えており、

「確か麻帆良のじじいが警備員欲しがってたんだよな。 えーと

マンマンテロテロ・・・長いなこの呪文」

するとナギはそんな事を言いながら懐からあんちよこを取り出し、適当な呪文を唱え始めた。

「ば・・・バカやめろ！！ そんな力でテキトーな呪文を使うな！！ たっ・・・助けて、誰か助けてー！！っ！？」

エヴァが泣きながら誰かに助けを呼んだ。

「あっ、やめッ・・・ひどいぞ！？ サウザンドマスター！！」

「御主人ピーンチ！」

「あッ！ いやッ！？」

インフェルナス・スコラスティクル
「登校地獄！！」

「いやー！！ん！？ 好きなのにー！！」

そうしている間に呪文が完成し、現在進行形でかけられている呪いをかけられたのである。

「ううあああッ．．．！！？」

その最後の辺りでエヴァは跳ね起きた。

「ハアハア．．．ま．．．また．．．この夢か．．．．．」

「うわつと!？」

夢から覚めたエヴァは周りを見渡すと寝ているネギと美琴がいた事に、夢で見えていたナギとネギを間違え、叫び声をあげる。

「何だこいつか。何でこんな所に．．．しかも御坂美琴もいるとは．．．．．ふん．．．殺れと言っているようなものだな」

エヴァはそう言つて二人寝顔ふたひかのうつこネギのを見ていると、

「（ちっ．．．二人がかりで私の看病をしていたのか．．．．．

）」
自身の状態と、今の現状を見て、エヴァはその考えに至った。

「は．．．．しまった寝てた．．．！！？ 大丈夫ですかエヴァさん!？」

「ああ、大丈夫だよ」

「ううゝん．．．ん？ いけない、寝てたみたいね．．．．あ、マクダウエルさん起きてたんだ」

飛び起きたネギはエヴァの心配をし、エヴァもそれに答える。その間に美琴も起きたようだ。

「今日のところは見逃してやる。カゼは治ったからさっさと帰れよ」

「あ．．．．はい．．．．」

エヴァの言つた事に啞然とするネギだが、

「そ、そうね。それじゃお大事に．．．．（感づかれる前に逃げよ．．．．．にしても、ネギ先生の父親ってあんな感じだったのね．．．．どこかアイツに似てた気がしたけど．．．多分気のせいね）」

美琴がそう思いながらエヴァにそう言つと、ささつと部屋から出て行つた。

「そ、そうですね。　じゃあ今日はこれで・・・果たし状も今日
はとりあえずしまっておきますね。　で、では」

ネギはあたふたしながらそう言っただけでさっさと帰ろうとするが、

「ん・・・？」

エヴァは何か違和感を覚えたらしくネギをじつと見ている中、

「（うひゃゝゝ色々見れちゃった・・・でもあれがホントに
父さんなのかなー）」

ネギがそう思っていたが、

「・・・オイ貴様。　何故寝ながら杖を握っていた
んだ？」

エヴァがその違和感に気付きネギにそう言っただけで、ネギはギクツと
硬直した。

「まさか・・・きさま・・・私の夢を・・・？」

ネギのその行動によりエヴァは何が起きていたか察し、もの凄い
殺気が彼女から発生した。

「何を見た！？　どこまで見たんだ言え貴様ーーーーッ！！」

「べ、別に何も・・・」

「嘘をつけーーーーッ、き、貴様らは親子そろって・・・ハッ！
？　まさか奴（御坂美琴）も見てたのではないだろうな！？　殺す
！　やっぱり貴様は今殺すーーーーッ！！　その後奴も殺してやるー
ーーーーッ！！」

「うひひーーーーッ!?」

エヴァの家からそんな騒ぎ声が聞こえ、それを帰ってきた茶々丸
が外から聞いており、

「先程すれ違った御坂さんのおっしゃったとおりマスターが元氣
に・・・よかった」

そんな事を言っていた。

「・・・ちなみに先に逃げた美琴はというと、そのまま授業を
サボり、コンビニで漫画雑誌を立ち読みしていた。

「（・・・ネギ先生、あんたの事は忘れないわ・・・）」

心の中でそう思いながら……。

「熱血！！ 武田道場！！」

信玄「これより！ 第7回熱血！！ 武田道場！！を執り行っ！！

本日は僕の古い友人を呼んでおる」

幸村「おおっ！！ お館様のご友人でありますか！！」

信玄「フフ・・・今にわかる。 剣麻よ！！」

剣麻「ハッ！！ わかりましたお館様！！ いでよ、次元のオーロラ！！」

作者がそう叫ぶと銀色のオーロラが発生し、その向こうから人影が、

江田島「わしが男塾塾長江田島平八であーーる！！」

オーロラから出現した人物がそう叫ぶと、道場が揺れる。

美琴「な、何よ！？ この揺れ！？」

美己「どうやらあの人物の声の振動のようですつとミサカは原因を解析します」 やつと元に戻った美琴の疑問に美己が答える。

美琴「マジ！？」

信玄「よく来たな平八よ。 相変わらず元気そうじゃのう」

平八「フッフ、それはお互い様であろうて」

そう、この人物こそお館様の友人であり、男を磨く男塾の塾長・

・江田島平八である！！

剣麻「それではゲストも来たところで、幸村殿！！ お相手お願いいたす！！」

幸村「わかりもうした！！ この幸村ッ！！ 全力でお相手いたす！！！！ 行くぞオ！！！！」

そうして始まった幸村と作者の組み手は・・・・幸村の勝利に終わった。

信玄「本日はここまでじゃ！…！」

完！！

美琴「いや何でそこはしよるの！…？」

第十章（後書き）

剣麻「感想！ 指摘！ アドバイス！ 打ち止めと番外個体の名前
決めアンケート等、待っております……！」↑（吹っ飛ばされて
から復活した）

平八「わしが男塾塾長江田島平八であ……る……！」

第十一章（前書き）

「熱血！！ 武田道場！！」

前回のあらずじ詳細！！

美己「前はエヴァンジェリンの昔の夢でしたねつとミサ力は最後ネギを見捨てて一人で逃げたお姉様に聞きます」

美琴「ちよっ！？ 人聞き悪いこと言わないでよ！ そ、そりゃあ罪悪感がないっていつたらウソになるけど・・・」

番外個体「それじゃあおねーたまにはちよつとしたお仕置きをしなきゃあねえ？」

美琴「・・・へ？ ってちよっ！？ 何でそうなのー」

ふにああああああああー！！！！！！！！！！

美己「それではお姉様の悲鳴をBGMに『とある麻帆良の超電磁砲』スタート！」

第十一章

『第十一章 麻帆良学園大停電！？ 戦いの前準備』

ネギと美琴がエヴァンジェリンをお見舞いに行ってから一日後の
3-A教室にて・・・、

「ところでさー、美琴は昨日授業すっぱかして何してたわけ？」

「そうそう、私も気になってた」

「そういえば昨日ゲーセンにいたよね？」

「え・・・いや・・・あの・・・。。き、昨日はちょっとね」

美琴が柿崎美佐、釘宮円、椎名桜子の三人からそういった事を聞かれていた。

「そう言えばネギ君も昨日の朝いなかったけど・・・もしかしてネギ君と何かイケナイことでもしちゃった？」

「何でそうなるの！？ してないからね！！」

その話に入ってきたまき絵がからかうように聞き、美琴が速攻で否定するが・・・、

「な、なんですってえええええー！！ツ！！？ ネギ先生に何をしでかしたのですか美琴さん！！ 説明してくださいまし！！！！」

「ムフフ。マンガのネタになりそうな話ね〜?」

「これはスクープの予感、さあ話した話した!」

「だから違うつてばあ〜〜〜!! お願いだから揺らさないで〜!?
視界が揺れるう〜〜〜!?!?」

ネギの事となるとほぼ確実に暴走する委員長ことあやかにスゴイ勢いで揺すられている中、ハルナと朝倉の二人からも質問される美琴がそう答える。

「……ちなみに昨日の美琴のその後は、コンビニで漫画雑誌を立ち読みした後、ゲーセンに行き超電磁砲の弾補充と時間潰しをしてから、夜の見回りに参加といった流れであつた。(その際に刹那と龍宮に事情を説明している)」

余談だが、その時の見回りは、特に何も出て来なかった。

その後、一段と騒がしくなり結局、鬼と呼ばれている新田先生が止めに入るまでこの騒ぎは続いたが……。なんやかんやでクラスに馴染んで(毒されて?)きている美琴だった。

「……………それからしばらくして、英語の授業が始まる頃、ネギは教室に向かう中、

「(ーーーう〜〜ん……。昨日、あの後エヴァンジェリンさんの風邪大丈夫だったかな……。?)」

頭の中ではそんなことを考え事をしていた。

「あ?来た来た」

「起立ーーーーっ」「礼！」

「あ、どーもー。英語の授業始めま〜す」

「（でも昔、ほんとにサウザンドマスターはあんなだったのかなあ？ エヴァンジェリンさんに詳しく聞けばいいんだけど・・・・無理だよなあ・・・）」

授業を始めようとする際もそんなことを考えていたネギだったが、

「ーーーーん？」

ふと、教室のある一点に違和感を覚え、そこに注目してみると・・・、

「ふん」

いつもはサボっている筈のエヴァンジェリンがそこに座っていた。

「う、うわあっ！！ エ、エヴァンジェリンさん〜〜！！？」

その事にびつくうつと驚くネギ。

「な、何ですか！？ 果たし状のコトなら今はダメですよっ！？ 放課後ならいつでも・・・！！？」

「ネ、ネギ先生どうなさったんですの」

「落ち着きなつて。 何わからんことを・・・」

「（いや、まあ驚くのもわかるけど。・・・それにしてもマクダウェルさんが授業に出るなんて、ネギ先生にしたのかしら？）」「

あまりの衝撃にてんぱっているネギにあやかがそう聞き、和美が落ち着くように言っている中、美琴がそう思っていた。

「・・・昨日世話になったからな。 授業くらいは受けてやろうと思っただけだ。 どーせ校内にはいるんだし」

そんなネギにエヴァがそう言っただけで説明する。

「（校内にいたんだ！？・・・ってそういえば呪いって『登校地獄』って名前だったわね）」

「え・・・？ あ！・・・そーなんですか！？ ほんとですか！ ありがとうございますっ！！」

エヴァの説明に美琴がそう驚きつつも納得し、ネギも一瞬驚いたが、すぐにそう言っただけで喜んでいた。

「か、風邪はもう大丈夫なんですか！？」

「・・・ああ。 まあな・・・うざい・・・」

「（そっか。 よかったー。 あれから考え直してくれたのかな）。 やっぱり勇気を出してぶつかって行って良かったー」

ネギがエヴァの体調を聞き、エヴァがそう答えるとそう思い、
・ご機嫌になったのか教科書のテキストを自分で読むと言い出し、
本当に言い始めた。それに便乗する3-Aの面々（一部）。

「（へー・・・何があったか知らないけど、あのエヴァンジェリンを授業に來させるなんてスゴイじゃん）」

「（うーん・・・あの賞金首のエヴァンジェリンがそー簡単に改心するとは思えないっすけどねえ）」

そんな中で明日菜がそう思っていたが、カモはそう考えていた。

「そう？」

「（何か裏があるんじゃない・・・）」

続けてそう言っているカモだが、現在彼（？）がいるのは明日菜の肩の上だったりする。

「（つつーかあたしの肩に乗ってんじゃないわよ!? ネギのペットでしょ!?!）」

「（いーじゃないスカ! 姐さん!!!）」

そんな会話をしている一人と一匹だが、隣の席にいる美佐に「カワイーねそれ」と言われていた。

エヴァ SIDE

全く、少し授業に出ただけであんなにはしゃぎおって……。放課後、コンピューター室にいるエヴァがそう思っている中、その目先では、茶々丸が何等かの作業を行っていた。

「……………どうだ？」

私が茶々丸に聞くと、

「予想どおりです。やはりサウザンドマスターのかけた『登校の呪い』の他に、マスターの魔力を抑え込んでいる『結界』があります。この『結界』は学園全体に張り巡らされていて、大量の電気を消費しています」

「ふん。10年以上気付けなかったとはな……………」

茶々丸の言った事に私自身に対し悪態を述べる。……………しかし、まさかとは思ったが、こんな仕掛けがほどこされていたとはな……………。

「しかし……………魔法使いが電気に頼るとはなー。えーと……………ハイテクってやつか？」

時代も変わったと言えば変わったものだな。

「私も一応ハイテクですが……………」

……………。

「まあいい。おかげで今回の最終作戦を実行できる訳だ……………」

な？」

「そうです」

話を強引に進めようとそう聞くエヴァに、茶々丸がそう答える。

「よし。急遽製作したアレも完成している。予定どおり今夜決行するぞ……フッフ坊やの驚く顔が目には浮かぶわ。クククク……」

それに御坂美琴のমনা。……奴の事だ、私が動けば奴も動くだろうて。

……まあ、動かないなら動かないで私が直接叩き潰すまでだな！

「ハハハハハ！！ あーおかしい。アーツハッハ！！」

私はそう思うと、おもわず物の上に立ち、大笑いをしていたが、これが笑わずにいられるか！

これでやっと忌々しい呪いからおさらばできるのだからな！！

「……………」

そうやって私が笑っていると、茶々丸が私のことをジッと見ていた。

「ん？ どうした茶々丸。何か気になることでもあるのか」

「い、いえ……あの……その……」

茶々丸が言い難そうにしているがどうしたというのだ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・――申し訳ありませんマスター」

私がそう思っていると、少し間を空けてから茶々丸が謝罪をした。

「ネギ先生はすでにパートナーと仮契約を結んでいます」

「何！！ それは聞いていないぞ！ 何故黙っていた！！ 相手は誰だ！？」

私は茶々丸の言った事に驚き、その相手について、茶々丸に聞くとする。

茶々丸が黙っていた事もそうだが、その前に坊やが誰と仮契約をしたのかは確認せねばな。

「・・・・・・・・ 相手は神楽坂明日菜です。 何故、報告しなかったのかは・・・・・・・・ 自分でもわかりません・・・・・・・・ 申し訳ありません」

茶々丸がパートナーの名前を言った後にもう一度謝罪をしたが、

「ふん。 しかしまあいいか。 もはや奴にパートナーがいようといまいと関係ないからな」

「マスターどうか・・・いかなる罰も受けます」

「・・・・・・・・ いやいい。 今夜はお前がいないと私も困る」

茶々丸の言った事に私はそう答える。 私に隠し事をしていた事

は気に入らんが、その程度の事で貴重な戦力を減らすのはマズいな。

「マスター……」

「開始まで5時間だ。行くぞ茶々丸」

「あ、マスター」

茶々丸が何か言おうとしているが、今は取り合っている隙は……、

ガッ！

びたーーーーん！ 「へぶうつ！？」

エヴァがそう思っていると足を引っ掛け、……顔面をぶつ
けた。

エヴァ SIDE OUT

……エヴァが顔面をぶつけた後に吠えてからしばらく経った頃、美琴は刹那と共に歩いていた。

「へー。メンテナンスのために、今日の夜8時から深夜12時までの間、停電させるのね」

「ええ。 と言っても私達は見回りを行いますかね」

「なるほど。まあ何時侵入者が来るかわからないもんね」

「はい。ですが今晚は私と龍宮で回りますから、美琴さんは寮でおとなしくしていてください」

刹那が美琴にそう言つと、

「わかつたわ」

「そうですか……ってええっ!？」

美琴の言つた事に驚く刹那。

「何驚いてるのよ……」

「い、いえ、てつきり一人で見回りに行くつと言い出すと思ってましたから……」

「さすがの私もそこまで無鉄砲じゃないわよ（……鋭い。言わなくてよかったー）」

刹那にそう言っている手間、そんな事を思っている美琴だった。一方ネギは、明日菜と木乃香と別れ、寮の周りの見回りを開始していた。

……そして夜の8時近くになると、

《——こちらは放送部です……これより学園内は停電とな

ります。 学園生徒の皆さんは極力外出は控えるようにしてください。
・・・ザザッ・・・」

といった放送が入り、時計台の針が8時を指すとフツ！っと学園中の明かりが消えた。

・・・そんな中、麻帆良女子中等部学生寮から、

キヤーキヤー♪

ワーーー！（？）

・・・と言った騒ぎ声が聞こえていた。

「・・・なんか不気味な空ねーー」

「そやなー」

そんな寮内にいる明日菜と木乃香は、カーテンから空を見ており、各々にその口に出していた。

「じゃ寝るねこのか」

「うん。 おやすみアスナー」

その後カーテンを閉め、そう言ってから各々のベッドに入り、床に伏せた。

・・・そんな中、

「・・・よし。 誰もいないわね。 まあ、刹那の言った事もあるから・・・私は寮の周りを見回るとしますか」

刹那が言った通りに、そう言って寮を出る美琴だった。

「封印結界への電力停止ー！。 予備システムハッキング開始・
・成功しました。 全て順調・・・これでマスターの魔力は戻
ります・・・」

一方、エヴァの家にて茶々丸がそうっており、・・・西洋の
塔を連想させる建物の天辺にエヴァンジェリンを大人にしたような
女性が立っており・・・ニッと笑っていた。

同時刻大浴場にて、

「キヤーーッ！」

「いやーん！」

「あちゃー！消えちゃったよー！」

「あーん、まだおフロ入つとるのにー！」

そう言っていたのは明石裕奈と和泉亜子である。二人の他に大河
内アキラと佐々木まき絵がその場にいた。

何故、彼女たちが浴場にいるのかは・・・、

「まき絵が無理矢理おフロ入るなんて言うからだよー！」

裕奈が言ったように、まき絵が風呂に入ろうと言ったからであっ
たが・・・、

「あ・・・う・・・」

「どうしたまき絵？」

アキラが言うようにまき絵の様子が、どこかおかしかった。
・・・すると、まき絵の頭の中に、

《行け、我が下僕^{しもへ}》

その言葉が流れてきた。

「まき絵大丈夫・・・」

そう言つてアキラがまき絵の肩に手を置くと、まき絵がそれに答えるように、振り向いて笑みを浮かべるが・・・その口元に、本来在る筈のない鋭い牙が現れていた。

美琴SIDE

うーん。特に異常はないみたいだけど・・・。

「・・・それにしても何だろうこの感じ・・・。何か、嫌な予感がするわね」

美琴がそう思っていると・・・、
・・・ん？ 電磁波に反応が2つ・・・ってヤバッ！？
このままだと鉢合わせじゃない！ どこかに隠れなきゃ！？
美琴がそう思うと辺りを見渡し、近くにあった木の後ろに隠れ、

「――」

「そ、そうなんですか。でも、ダメじゃないですか！ 生徒の外出は極力控えるようにってさっき放送で……………」

「そんな事より、そのオコジヨ！ その魔力とか言っの出して
る奴のこと知ってるの？」

私は先生の言おうとしている事を遮って、肩のオコジヨに聞いて
みた。

その後すぐに「カモッス！！」ってツッコまれたけど…………。

「いや分からねえけどかなりの大物だ…………まさかエヴァンジ
エリンの奴じゃ……………」

「ええっ！？ そんなまさか！ 彼女はもう更正して…………！
！」

いや先生…………授業来ただけで更正したって思っのもどうかと
思っわよ…………。

「だから兄貴は甘いんだって！ そんな簡単に奴があきらめるハ
ズないだろ！！」

私がおっている事をオコジヨも思っただみたいで、ネギ先生にそ
う言っっていた。

「あ…………あれ？ あれは……………」

っくか先生、ほとんど聞いてないし…………ん？ あれって…………

・・・。

そんな力モの話を片手間で聞いていたネギが何かに気づき、そのネギの様子に呆れていた美琴もまた、電磁波に何か反応し、反応した場所を見てみると。

・・・するとそこにいたのは、先程まで風呂に入っていたまき絵が、全裸で立っていた。

「ま・・・まき絵さん~~~~っ!? なっ、なな、ダメですよ！ 裸で外出しちゃ・・・!!!?」

「そうよ佐々木さん！ 誰かに見られたらマズイって!?!」

美琴達がまき絵の格好に対し、慌てながらそう言っていると・・・

「ーーーーネギ・スプリングフィールド・・・エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさまがきさまにたたかいをもうしこむ・・・」

そんな2人を無視し、まき絵がそう言い始める。

「えっ・・・!」

「10ぷんごにだいよくじょうまでこい」

「ちよっ・・・それって宣戦布告!? 何で佐々木さんが!!!?」

「ななっ・・・何でまき絵さんがエヴァンジェリンさんのことを・・・!!!?」

まき絵から聞かされた事とその内容に驚きと疑問を持つ美琴と、顔を赤くしながら驚いているネギ。

「それと御坂美琴……きさまにエヴァンジェリンさまからこ
とづてがある………きたければこいだそうだ………」

「なっ!？」

まき絵のその言葉に美琴が驚いていると、

「わかったぜ兄貴に嬢ちゃん! あいつエヴァンジェリンに噛ま
れたことがあるだろ!! 真祖に噛まれたら操り人形だべ」

カモがまき絵の今の状態が分かったのか、ネギと美琴に説明した。

「えっ………うそ!？」

「マジで!？」

その事に2人が驚愕している最中、

「じゃーね。 まってるよネギくん? ……あと美
琴ちゃんも」

まき絵はそう言って仰け反るように後方へ跳んでいた。

「まき絵さん!？」

「つつか私はオマケ扱いかい!?!」

各々にそう叫んでいる中、まき絵がどこからか新体操で使用されるリボンを取り出し……。「アハハハ」っと笑いながら建物に在る棒や突起物にリボンを巻き付け、その反動で飛んで行くという、およそ人間離れした技を使つて去つていった。

「「な」 あっ……………!!?」

「な……………な……………」

「リ……………リボンで……………!!?」

「人間技じゃねえ。 半吸血鬼化してるぜあの姉ちゃん」

あまりの出来事に開いた口がふさがらないネギと、目の前で起きた事が信じられないとばかりに啞然としていた美琴を余所に力モがそう言った。

「そ、そんな……………! あの時僕がまき絵さんを診た時は魔力の残り香だけでどこにも異常は……………!!」

「エヴァ（やつ）の魔力が封じられてるつてのが逆に仇になったんだよ! 潜伏していて兄貴にも気付けなかったんだ!!」

「どーやったかはわからねえけど、とにかくこの停電でエヴァンジェリンの魔力が復活したんだぜ!? マズイぜ兄貴!!」

力モのそんな言葉を聞いたネギは、自身の油断によって自分の生徒を危険な目に遭わせてしまったと考えている中。

……………厄介な事になってきたわね!。

私がそうおもつてるとオコジョ……………じゃなかった力モが先生に

状況は不利だから神楽坂さんに来てもらうよう言ってて、先生もそれを了承したのか携帯を押してたけど……。

「……………いや。そうはいかないよカモ君。……………こは、僕一人で行く！」

何を思ったか、突然そう言いだした。

「え……ええ……っ!? 何バカなこと言ってるんだよ兄貴! ! !」

「確かに。それはちよつと無謀ね」

まあ、私が言えた事じゃないけど……………。

「大丈夫。実はこの時のために昨日から用意はしてあったんだ」
先生はそう言って、どこからか袋を引きずって来た。

「どこにそんなモンを……………」

「用意って何時の間に……………。つか、どこに隠してたのそれ」

「いやでも兄貴!! ほら嬢ちゃんからもなんか言ってくれよ! !」

ネギが持つて来た袋を見て各々にそう言つと、それでもカモが思ったのかネギに言いつつ、美琴にも止めるよう聞いてきた。

そう言われてもねー。まあ、このまま黙つてると十中八九私も

部屋に戻るよう言われるだろうから、先手を……って先生準備終わってもう浴場の方へ向かうとしてるし！！？

「ちよつと待ちなさい！！ 私のこと無視して話進めようとするんじゃないわよ！！！」

私はそう言つて先生の前に立つ。

何か横でカモが「いや嬢ちゃんも俺つちのこと無視してんじゃん！？」って叫んでいるけど、うるさいから無視しておこー。

「御坂さん！？ 止めても無駄ですよ！！ これは僕一人の問題なんです！！」

どうも私のさっきの行動が、先生には引き止めようとした様に見えるみたいね。

「別に止めないわよ。でも、その前に………行くんだつたら私も連れて行きなさい！！」

「そうそう………って何考えてんだよ嬢ちゃん！？ それに兄貴も！ いくら装備を整えても奴には勝てねーよ考え直せ！！」

美琴の言つた事に驚きながらも2人に対し、カモがそう叫ぶ。

「………ハッ！？ ダ、ダメですよ御坂さん！！ 生徒を危ない目に遭わせる訳にはいきません！！」

一瞬啞然としていたネギがハッと気付き、美琴にそう言うが、

「先生には悪いけど、私にもあの子に狙われてるからそうもいかないのよね。それにさあ、1人で行くよりはマシでしょ？」

「うっ……で、ですが……」

「だいいち、相手には茶々丸さんもいるでしょ？ それこそ１人で行ったら前回の二の舞になるんじゃない？」

「うぐっ……で、でも」

よし、後もう一押し！

「先に言つとくけど、無理矢理でも付いてくから」

「あうっ！？ ……わ、わかりました。 ですが、絶対無茶しちゃダメですからね！！」

「よっしゃ、そうこなくっちゃね！！」

ああ、忘れる前に言つとかないとね……。

「一つ言っておくけど、今の先生に何言つても無駄よ？ ……
…かく言つ私もただかね！ 行くわよ先生！！」

私は力モにそう言つと、先生の乗ってる杖の様なもの……てか杖よねコレ……に乗る。

「あ！ は、はい！！」

ネギがそう答えると、美琴を乗せて大浴場へと向かった。

「ああ！？ 兄貴と嬢ちゃんのわからず屋ーーーー！！ もう

知らねえよ!!」

置いてきぼりにされたカモが、2人に対しそう叫んだ。
カモのそんな叫びを聞かず、エヴァの待つ大浴場へと向かっているネギと美琴。

「……………にしても来なければ来いですって？
……………上等よ、行ってやろうじゃない!!」

大浴場へと向う途中、美琴はそう思っていた。

第十一章（後書き）

剣麻「皆様、お久しぶりです。 個人的な理由がいろいろあり、更新が遅れました。 今度からは最低でも1ヶ月以内には投稿していきたいと思っておりますゆえ！！ ご了承くだされ」↑スタボロで逆さ吊り状態

剣麻「後、おまけコーナーである『熱血！！ 武田道場！！』は前書きだけにしました。 もしかしたらおまけコーナーも復活するかもしれませんが、そちらもご了承ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1827t/>

とある麻帆良の超電磁砲（レールガン）

2011年12月13日11時56分発行